

ZC T
ZC Z J1222 96-009

限定資料

本資料は(9年)7月27日付で
登録区分変更する。 [技術展開部技術協力課]

地層処分研究開発に関する情報の認知に係わる研究(その2)

(動力炉・核燃料開発事業団 研究委託内容情報書)

技術資料		
開示区分	レポートNo.	受領日
7	J1222 96-009	1996.7.17

この資料は技術管理室保存資料です
閲覧には技術資料閲覧票が必要です
動力炉・核燃料開発事業団 技術協力部技術管理室

1996年3月

株式会社 三菱総合研究所

この資料は、動燃事業団の開発業務を進めるため、限られた関係者だけに開示するものです。については、複製、転載、引用等を行わないよう、また第三者への開示または内容漏洩がないよう管理して下さい。また今回の開示目的以外のことには使用しないよう特に注意してください。

本資料についての問い合わせは下記に願います。
〒107 東京都港区赤坂1丁目9番13号三会堂ビル
動力炉・核燃料開発事業団 環境技術開発推進本部
社会環境研究グループ

限 定 資 料
PNC ZJ 1222 96-009
1996年 3月

地層処分研究開発に関する情報の認知に係わる研究（その2）

河合 潤*
薮田 尚宏*
吉屋 俊輔*
青木 紀勝*

要 旨

地層処分研究成果の公衆の理解は、情報提供の内容や方法のみならず、地層処分そのものに関する印象や、更には個人の知識、倫理観等に強く左右される。地層処分のようなリスク事象の公衆への情報提供には、一般的にリスクコミュニケーション研究の成果が用いられるが、地層処分研究成果の情報提供に関して確立された手法はない。

本研究は、この情報提供手法の確立に向け、情報提供内容や手法と公衆の認知に関する関係を明らかにする事を目的としたものである。平成6年度は、公衆を対象とした個別ヒヤリングを実施し、ISM (Interpretive Structural Modeling) 法を適用して、公衆の地層処分問題に対する態度と事実認識の関係の概略を把握することを試みた。

本年度は、地層処分研究開発を含めた地層処分問題全般に関する公衆の意識構造をより詳細に解明するため、平成6年度の知見に基づき、地層処分問題に対する公衆の態度と事実認識さらには事実に対する価値判断の関係を構造化して、基本的な意識構造モデルを構築した。さらに、個別ヒアリング調査により意識構造モデルの枠組みおよび構成要素の妥当性の確認を行い、地層処分問題に対する公衆の態度類型や態度に至る情報認知過程の推定を行った。ヒアリング結果から、地層処分問題における事実認識として、共通して問題に対する認識が薄い、リスク感が大きい、ペネフィット感をほとんどない、技術的な面でデメリットを想定していることが判った。これらの事実認識を、構築した意識構造モデルの枠組みの中で説明できることを確認すると併に、日常的問題での価値判断と共通した判断過程も持つことも明らかになった。

本報告書は、株式会社三菱総合研究所が動力炉・核燃料開発事業団の委託により実施した研究内容結果である。

契約番号：070D0202

事業団担当部課室および担当者：環境技術開発推進本部 社会環境研究グループ 大澤 正秀

※：（株）三菱総合研究所 総合安全研究センター

COMMERCIAL PROPRIETARY
PNC ZJ 1222 96-009
March, 1996

The Study of public cognitive process for generic geological disposal problem(Ⅱ)

Jun Kawai※
Naohiro Yabuta※
Syunsuke Furuya※
Norikatsu Aoki※

ABSTRACT

The degree of public acceptance about the study for generic geologic disposal problem is affected by not only the content and the way of announcement, but also the impression, the knowledge and the view of ethics on the disposal system. For the announcement to the public about the matter involving latent risk like generic geologic disposal problem, the risk communication study is applied generally. But, it hasn't been established to announce generic geologic disposal problem.

For the purpose of establishing the method of the announcement about generic geologic disposal problem, this study was made to prove the relation between the public cognitive process and the content or way of announcement to public. The year of 1995, we investigated the views from which several persons recognize "The R&D about generic geologic disposal system for HLW", identified the dominate factors for them to recognize the information, and analyzed how they judge the value of generic geologic disposal problem by correlating factors with ISM method.

In this study, based on the results of the year of 1995, we investigated the views from which several persons and constructed the experimental frame of the judgement for value, because of fully analyzing how they judge the value of generic geologic disposal problem within R&D. Further, by the hearing to housewives, we confirmed the validity of the experimental frame with applying the systematic method, and assumed the type of personal attitude for generic geologic disposal problem within R&D. It was proved from the hearing that they had little cognition about generic geologic disposal problem, felt large risk and least benefit of generic geologic disposal system, assumed the demerit to generic geologic disposal technology.

As a result, it was made sure that their cognitive process about generic geologic disposal problem were illustrated with the experimental frame of the judgement for value. Also, it was shown that they had something in common between the judgement for value to generic geologic disposal problem and their social life problem.

Work performed by Mitsubishi Research Institute, Inc. under contract with Power Reactor and Nuclear Fuel Development Corporation (PNC).

PNC Liaison : Masahide Ohsawa
General Manager
Presentation Management Research Program
Radioactive Waste Management Project

※ Research Center For Safety Science, Mitsubishi Research Institute, Inc.

目 次

1. 序論	1
1. 1 目的	1
1. 2 実施内容	1
1. 3 研究の方法	4
2. 基本的な問題設定	9
2. 1 研究の位置づけ	9
2. 2 リスクコミュニケーションの考え方	10
2. 2. 1 リスクコミュニケーションの次元	10
2. 2. 2 本研究におけるリスクコミュニケーション方策	18
3. 地層処分に関する意識構造モデルの設定	19
3. 1 分析の基本的な枠組み	19
3. 1. 1 地層処分問題の構造	20
3. 1. 2 地層処分に対する態度	32
3. 1. 3 地層処分に対する態度にいたる意識構造モデル	33
4. 意識構造モデルの基本的枠組みおよび要素の妥当性の確認	54
4. 1 ヒアリングによる確認事項	54
4. 2 ヒアリングの方法	57
4. 3 ヒヤリング結果の整理	66
4. 4 意識構造モデルの基本構成および要素の妥当性に関する考察	73
5. 地層処分に関する公衆意識構造の推定	92
6. まとめ	96
参考資料 I ヒアリング調査の結果	資-1
参考資料 II ヒアリング結果の整理	資-2 2

1. 序論

1. 1 目的

地層処研究開発成果の公衆の理解は、情報の内容や方法のみならず、地層処分そのものに関する印象や、更には個人の知識、倫理観等に強く左右される。

地層処分のようなリスク事象の公衆への情報提供には一般的にリスクコミュニケーション研究の成果が用いられるが、地層処分研究開発成果の情報提供に関して確立された手法はない。

本研究は、この情報提供手法の確立に向け、情報提供内容や手法と公衆の認識に関する関係を明らかにする事を目的としたものである。

このため昨年度は、ISM (Interpretive Structural Modeling) 法を適用した系統だったアプローチにより、適切に選定した公衆を対象とした個別ヒヤリングを実施し、公衆の地層処分問題に対する意識構造の概略を把握することを試みた。

そこで本年度は、昨年度得られた知見に基づき、地層処分研究開発を含めた地層処分問題全般に関する公衆の意識構造を詳細に解明する。

1. 2 実施内容

本作業の研究範囲は以下の通りである。

- (1) 地層処分に関する意識構造モデルの設定
- (2) 意識構造モデルの基本構成および要素の妥当性の確認
- (3) 地層処分に関する公衆意識構造の推定

以下に各項目の実施内容を記す。

(1) 地層処分に関する意識構造モデルの設定

地層処分問題に対する公衆の意識構造を把握するための第1段階として、公衆意識を構造化する枠組みとなる、意識構造モデルを設定する。

本研究が扱う意識構造モデルは、今後この成果を情報提供手法の検討に適用できるよう、地層処分に対する態度の類型化が可能となるような構成とする。

このため、意識構造モデルの基本構成は以下の3つの要素から構成されるものとする。

- ① 評価因子
- ② 個人特性
- ③ 資質

評価因子は、地層処分に対する判断を左右する重要な論点である。個人特性は、各評価因子における判断の違いに影響を与える個人差を表すものである。資質は、このような個人差を生み出す人間の基本的な性質である。このように、表面に現れる認識とその下地となる人間の基本的な性質とを階層的に関係づけることにより、地層処分に対する態度の類型化を行うものである。このため平成6年度は、100点余りの多種多様な論点を材料にISM法を用いた一般公衆個人の意識構造分析を行い、これらの論点間の論理的なつながりを調べた。

本作業項目においては、昨年度得られた成果に基づき、地層処分に対する一般公衆の判断を左右する重要な論点を分析し、意識構造モデルを構成する3要素の体系化を行う。

このようにして設定する意識構造モデルは、一般公衆の地層処分に対する態度類型を表現するための枠組みとなるものであり、以降の研究の前提となるものである。なお、一般公衆の選定は、昨年度を参考に適切な方法で行うものとする。

意識構造モデルの基本構成案を下図に示す。

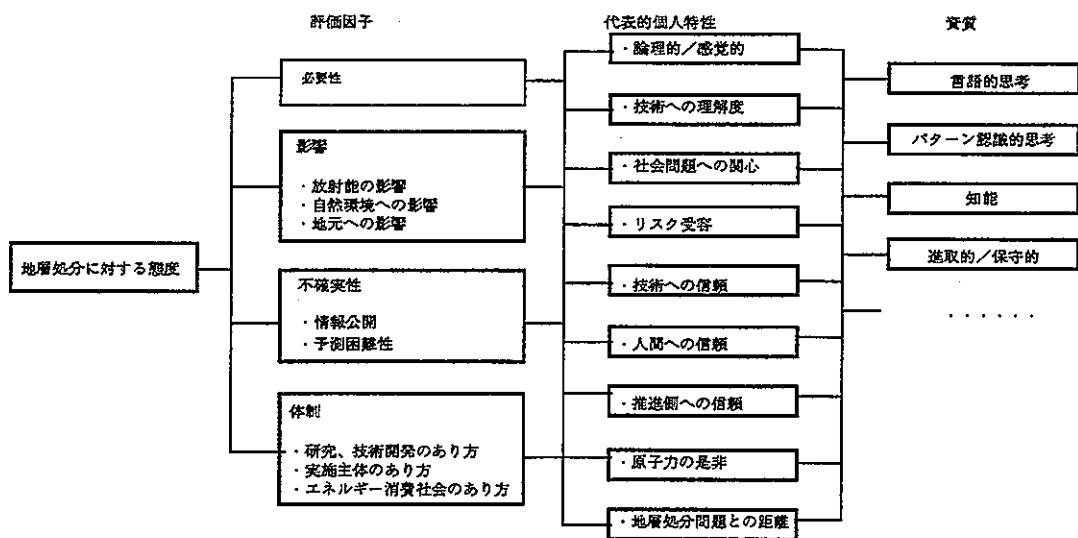


図 意識構造モデルの基本構成の例

(2) 意識構造モデルの基本構成および要素の妥当性の確認

本年度は、平成6年度の成果を踏まえてより的確に対象者の意識構造分析を行うことにより、(1)で検討した意識構造モデルの基本構成および要素の妥当性の確認を行う。この結果、想定した基本構成や要素が適切でないと判断される場合は、(1)に戻って再検討を行うこととする。

意識構造分析は、系統だった手法の適用による、個人を対象としたヒアリング調査（対象：約10名程度）により実施する。

(3) 地層処分に関する公衆意識構造の推定

(1) および(2)で構築した意識構造モデルに基づき、地層処分に対する公衆の態度類型の推定を行う。

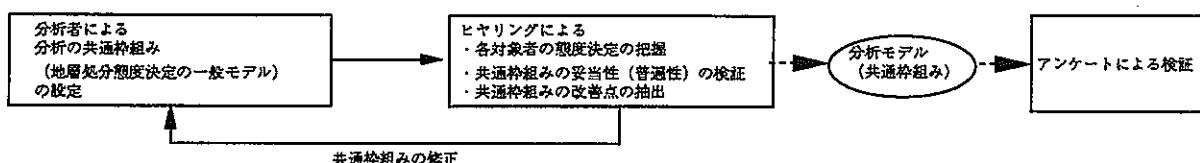
1. 3 研究の方法

- ・本研究では、地層処分研究の事業内容に関する情報を一般の人々に提供することで、地層処分に対するよりよき理解を得るためにには、どのような情報提供のあり方が適当なのかを把握することを最終的な目的としている。
- ・地層処分に対する理解や印象、意見は人によって異なっているので、可能ならば、各人に合わせた情報提供が望ましい。しかしながらそのような方策は实际上困難であり、現実的なのは、対象とする一般の人々を、地層処分に対して類似した考え方を持つ人たちにグルーピングし、そのグループごとの対策を考えていくことになる。
- ・一般の人々をグルーピングするにあたっては、ただ単に地層処分に対する態度の違いだけに注目して分類すればよいのではなく、各グループに対する効果的な情報提供のあり方を見いだせるように、地層処分に対する態度がどのような因子で決まってくるのか、そのよって来る所とともに見ていくことが必要である。地層処分に対する態度を決定づけている因子を把握し、それが誤解や情報不足により生じているのであればそれを解消するような情報を提供することで、地層処分に対するよりよき理解につながっていくことになると考えられる。
- ・したがって、まず、地層処分に対する態度とその態度を決定づけている本質的な因子とを結びつけていく必要がある。
- ・分析の方法として、基本的に次のように行う。
 - ーそれぞれの人には、地層処分に対してそれぞれの考え方があり、それらをただ単にヒヤリング等により聞き出すと、その表現は千差万別になる。
 - ーしたがって、複数の人の地層処分に対する認識の内容を比較し、分類するためには、どのような人の考え方も一応表せるような、共通の枠組みが必要となる。
 - ー共通の枠組みは、後の情報提供のあり方を検討できるように、地層処分に対する態度とその態度を決定づけている本質的な因子との結びつきをあらわすような枠組みとする。
 - ー共通の枠組みは、ヒヤリングに基づきはじめからボトムアップ的に構築していくのではなく、昨年度の検討結果にもとづいて見通しを立てた上、分析者が仮説としてトップダウン的に設定

する。

—ただし、そのことにより分析者の予見に強く影響され、分析結果の妥当性が著しく損なわれてしまうことがないように、用意した枠組みで、どの対象者の認識も表現できることを確認する必要がある。

—したがって、分析の手順として、次のステップを踏む。



ヒヤリングによるミクロな分析の意味

人の態度を測定する方法としては、次のような方法が一般的である。まず測定しようとする態度対象に対して、一群の人々が共有すると考えられる単一または複数の態度項目の次元を想定する。ついで、対象への態度を測定するために考案された複数の項目への回答を求める。これらの結果を回答者集団全体で集計したり、因子分析することで尺度を構成する。最後に、集団の反応分布から当該個人の位置を統計的に記述する。こうした尺度構成法の利点は、多数の人々に共通して存在する態度次元を抽出することができ、特定個人の態度が、他の人々と比較されることで、相対的にどの程度の強さを持つのか、を明らかにできる点である。

しかしながら、個人の態度を共通次元上の相対的な強度によって測定しようとするこうした手法では、個々人が持つ態度の独自性を切り捨ててしまうという欠点が生じることになる¹⁾。態度を具有するのは特定の個人である。そして態度対象は、当該個人の心理的世界に存在するものである。態度の形成や変容は、個人の情報への接触や体験に基づく。態度を構成する諸要素は、分化・統合され、構造化される。そして、個々人が接触する情報や体験の内容を長期にわたって観察するならば、すべてにおいて共通することはきわめてまれである。というより、現実にはあり得ない。また、個々人の性格や社会的背景の違いのために、同じ事象であっても異なって認知され、体験されることになる。このために、態度の構成要素や全体構造は、一人一人異質なものとならざるを得ないのである。

個人別に分析することにより初めて、これまで見捨てられてきた普遍的特性を発見する可能性を持つ。また、個人別の態度の全体構造を分析するならば、各人の構成要素の内容が異なっていても、態度構造の形態上の普遍性を検討することができる。

¹⁾ 心の測定法

個人の態度構造をどのように観察するか：スキーマ

個人の政治的な態度は、充分な資料の収集、分析の結果結論される結論される判断ではなく、それまでに蓄積してきた簡略化、集約化、類型化された世界モデル、すなわち、スキーマ (Schema) により構成されると考えられる¹⁾。したがって、個人が抱いているスキーマを観察することが、その個人の態度を把握する重要な手がかりを与えることになる。

[スキーマ]

- 1.スキーマは入力された情報を整理する枠組みとして働くことにより、個人の経験を体系化するものである。
- 2.スキーマには事象に関する「仮説」や「期待」が含まれており、これが新しい情報を同化する際の解釈の枠組みとなる。こうした解釈ではしばしば、それらの「仮説」や「期待」を確認するような方向で実際にはなんらかの反証があったとしてもそれを無視してしまう傾向がある。たとえば、ある政治家が慈善活動を行ったというニュースに接した場合に、それを「次の選挙に向けての人気とり」と解釈し、既存の仮説「政治家というものは目的のためには手段を選ばない」が強化される、といった具合である。
- 3.同様にスキーマは、未来の出来事や状況を予測するための枠組みとなる。その場合、スキーマにビルトインされた「推論」処理が行われるため、改めて綿密に情報処理を行う必要がない。たとえば「あの議員は次の選挙でも金をばらまくに違いない。なぜなら彼は『政治家』だから」といった推論である。
- 4.ある対象に関する情報が欠けている場合、スキーマはその「穴を埋める」ための枠組みとなる。すなわち、スキーマは「既定値」(default values)を持つことにより、自動的に欠損情報を穴埋めする。たとえば多くの人は「裁判官」と聞くと法服をまとった男性の姿を思い浮かべる。実際には女性の裁判官も存在するのだが、これは人びとが持つ「裁判官」スキーマにおいて「性別」の既定値が「男性」であることによる。
- 5.意思決定において、記憶の中のどの情報が表象化され検索されるかを規定する枠組みとなる。そして多くの場合、ある対象を評価するためは、スキーマの階層における上位レベルの情報（たとえば一般的なカテゴリー名など）を活性化し呼び出すだけで事足りる。なぜなら、こうした上位レベルに位置する情報の活性化のみによって、個々の事例やそれらの細かい属性など下位レベルに位置する情報を活性化させなくても瞬時にその全体像をイメージすることができるからである。言い換えれば、スキーマは対象の全体的な表象を生成する。これはスキーマに基づく(schema-based)思考」と呼ばれている。たとえば、ある特定の政治家について「竹下派」という上位レベルのノードを活性化させるだけで、その政治家の清潔さや行動パターンに関する具体的な情報（すなわち下位レベルのノード）を活性化させることなく、こうした清潔さや行動パターンをも含めた全体的な評価を下すことができるのも、この思考メカニズムによるものである。
- 6.スキーマは、問題解決を手早く単純に行うための「方略」(heuristic)を提供する。ある問題の解決にあたって、本来考慮すべき多くの側面の中から少数のものだけを活性化し、それらのみによって判断を下せば意思決定のコストは低く抑えられるが、スキーマはこうした問題解決の枠組みとなる。たとえば新税導入への賛否、「自分の家計への影響」、「財政の健全化」、「社会的公正の達成」等のうちの一つだけに依拠して決定すればそれが「合理的」であるかどうかはともかくこれらすべてを考慮に入れた場合に比べて、格段に短時間かつ少ないエネルギーで目的を達せられることになり、複雑な現実世界に対し、判断を節約して対処できることになる。

ただし、スキーマは直接観察できるものではなく、「態度」などを同じく、仮説的な潜在変数である。スキーマ測定の方法としては、次のものが提案されている。

¹⁾ 池田 謙一、投票行動のスキーマ理論、選挙研究、Vol.6、1991

- ・質問に対する反応時間、情報の誤再認等の指標を利用
- ・「発語思考（thinking-loud）」などにより、顕出的（salient）なスキーマを抽出
- ・質問視を用い、スキーマを構成すると考えられる対象の属性や評価を列挙し、選択させる

スキーマ概念は、人々の多様性を前提とする。換言すれば、外見的には同一な政治行動であってもかぎりなく多様な「個人個人の理由」が存在する。スキーマ概念に基づく分析は、こうした政治行動の意味的多様性を明らかにする。

本研究では、Knowledge Engineeringにおいて行われる専門家からの知識獲得の方法を応用して、このスキーマを（可能な限り）外在させていく。具体的には、”なぜ(why)”や”どのように(how)”という関係代名詞で本人の考えを掘り起こしていく、対象問題に対して本人が抱いている知識体系を意味ネットワークとして抽出する。

共通枠組みの設定方法

政治心理学的に分析する方法論としては、つぎのものがある¹⁾。

a. 主観的記述による類型論

時代や社会との意味的な関わり合いの中で、政治心理の微細な質的差異を論じることが可能となるが、この類型化が個々の研究者の主觀に大きく左右され、研究者ごとに多くの類型が併存する結果となる。

b. 先驗的構造化による類型論

先驗的に意識の基本的な次元を設定し、それらを組み合わせて演繹的に類型化を行う。

c. 客観的構造解析

フィールドデータに基づき、客観的な手続きにより導けるものの、その処理家化の意味するところを読みとるのは結局、研究者の主觀である。また、多くの場合、客観データからその本質的意味を読むことはきわめて難しい作業である。他方、厳密な客觀性を持たせようすると、きわめて限定された表面的な知見や傾向しか得られなくなってしまう。

リスクに対する態度の分析にあたっても、問題状況は政治心理分析と同様である。

a. の方法論によれば、微細な（文学的な）記述が得られるものの、その成果を何らかの実践的

¹⁾ 飽戸 弘、政治行動の社会心理学、福村出版、1994

な場に応用するための、一般性や操作性が得られない。

c. の方法論によれば、客観性の制約が、結果として得られる結論の、問題の本質に対する表現力をも制約してしまう。

結局、このような複雑、多様で相互連関が強い「強システム¹⁾」の分析にあたっては、対象を合目的に説明するような、解析者による先駆的分析枠組みを予見的に設定し、その点から演繹的な類型化を行っていくことが最も有効なアプローチであると考えられる。

¹⁾ 戸田 正直、認知科学選書24 感情、東京大学出版会、1992

2. 基本的な問題設定

2. 1 研究の位置づけ

基本的な問題

豊かで人間的な社会を実現し、維持していくためには、充分なエネルギーが、安価に安定して生み出されなければならない。またそのエネルギーは、環境に深刻な負荷を与えないものである必要がある。

原子力エネルギーは、現在、この要求を満足する選択肢としてもっとも現実的なものである。しかし原子力発電には、高レベル廃棄物をいかに処分するかという問題がともなう。

したがって、次世代に過大な負の遺産を残さずに、他方、豊かで人間的な社会を実現し次世代に引き渡していくためには、高レベル廃棄物を安全に処分していくことが必要である。

しかしながら、高レベル廃棄物の処分を進めていくためには、処分場を建設する地元住民の反発や、それを支持する（部分的な）国民世論が予想される。（ただしこうした反発は、無知や誤解、非合理的態度による公共福祉の阻害行為、と一面的に捉えるのではなく、技術と社会についてのより本質的な問題として捉えなおし、その解決を公共の場で見いだしていかなければならない性格のものである

（2. 2 参照）

ある施策が社会的に正しい、あるいは皆のためになることになると判断する、ということは、その言葉の厳密な意味において、社会の成員の大部分によって受け入れられていることが大前提となっている。（つまり、社会の多数によって受け入れられていない、社会的正義はありえない）

このため、地層処分を進めていくにあたっても、処分に対する社会的な合意は、問題のきわめて重要なポイントである。

具体的な問題

地層処分事業を進めていくために処分に対する社会的な合意を得ていくことは、この問題の基本であるが、本研究の対象はその部分問題である。

すなわち、安全な地層処分技術の研究開発を担う動燃として、地層処分事業の円滑な推進に貢献するため、研究開発に関する基本的な考え方やその技術的な成果をどのように社会に提供していくべきよいのか、を考えるものである。

社会的に論争されている（あるいは、論争が起こりうる）技術システムに関して、その技術的性格

や内容を正確に専門外の人々に伝え、問題認識を共有し、その到達点を前提とした社会的な議論によつて、「社会的に正しい」政策を決めていくことは、まさにリスクコミュニケーションの問題である。

したがって、本研究が対象としているのは、地層処分技術に関する研究開発者、一般公衆とのリスクコミュニケーションの問題である、といえる。

このリスクコミュニケーションの問題は、ただ単に、専門的な技術情報をどのように正確に一般公衆に認知してもらうか、という問題に留まらず、技術と社会についてのより本質的な問題を含んできるものである（2. 2 参照）。

本研究は、このようなリスクコミュニケーション問題の本質に充分配慮し、技術開発者としての情報提供のあり方を摸索していくものである。

2. 2 リスクコミュニケーションの考え方

本調査研究の目的は、

地層処分事業について公衆のより良き理解を得るために、研究開発者としてどのような情報提供を行えばよいのか

という問題に一定の指針を与えるものであり、これは上に述べたようにリスクコミュニケーションの問題である。

2. 2. 1 リスクコミュニケーションの次元

伝統的リスクパブリシティ

「リスクコミュニケーション」は、狭義にはつぎのように考えられている。

a. 専門的知識を持たない一般公衆にとって、複雑な技術システムの持つリスクを正確に把握することは、難しい。不完全な知識により、過小評価したり、過大評価したりする。したがって専門家は、一般公衆が正確にリスクを把握し、合理的な意思決定ができるように、リスクやその発生源である技術システムに関する情報を判りやすく公衆に提供しなければならない。

理性合理的リスクコミュニケーション

また最近では、一方向的な情報の提示ではなく、次に示すように、双方向による情報のやりとりを基本として、互いの信頼感を醸成していく「双方向的リスクコミュニケーション」の重要性が認識されてきている。

b. 複雑な技術システムの持つリスクに関し、異なる見解を持つグループが互いの情報を交換しつつ理性的にディベートを行うことにより、客観的に正しいと思われるリスク評価の共通認識に到達でき、その過程で互いに信頼感が醸成され、問題の解決が促進される。

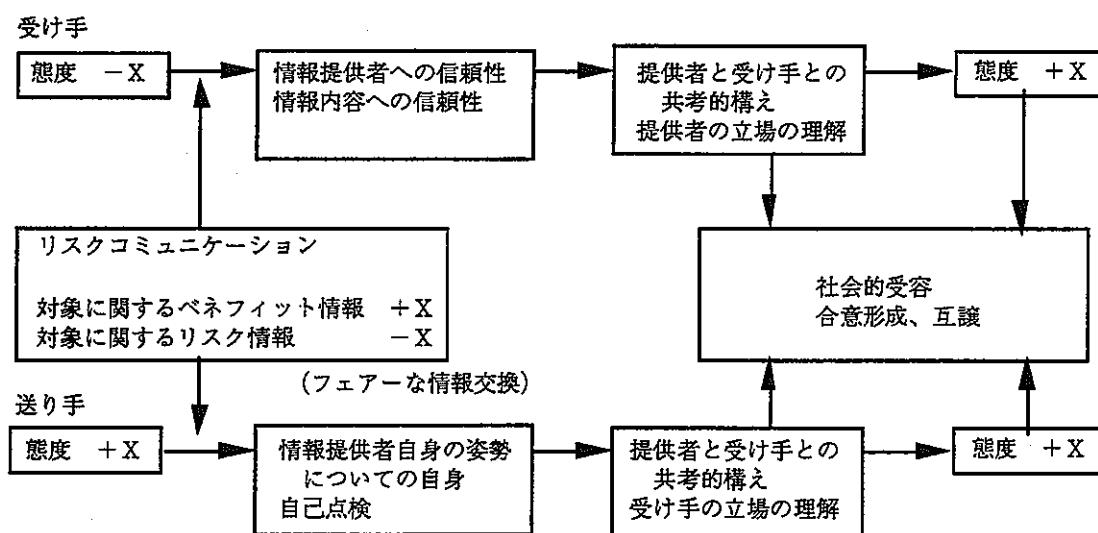


図 双方向的リスクコミュニケーションモデル¹⁾

しかしながら、正確かつ平明な技術情報を公衆に伝えるだけでは、現代の技術システムにまつわる論争の解決には直接結びつかない場合が多い。また公正客観的な情報交換をおこなっても、互いに異なる文化的背景を持つグループ間のリスクコミュニケーションを成功させることには少なからぬ限界がある。

ex) 日消連（日本消費者連盟関西グループ）の人たちとか原発のことで関心を持ってた人たちが学習会みたいなものをやっていた。そこへ私も行ってて、女もけっこう多かったんやけど、男がやっぱり中心みたいな感じがあってね。進行役は女がやったりもしたけど、全体の話が冷

¹⁾ 木下 富雄、リスク・コミュニケーション、日本リスク研究学会誌、Vol.5, No.1、1993

静、客観、科学的というかね、そういう次元の話じゃないとあかんみたいな雰囲気を私は感じた。それで何回目かは忘れたけれど、参加者のある男が「反原発というけど、ぼくは原発推進する側の意見と反原発の意見と同じように聞いて、それで自分の考えをはっきりさせたいとおもってきたんや」というようなことをいうて、「なんかおかしい、これはおかしい」と思った。今やったら、自分がどう生きたいのかというのがまずあるから、「あんたはどんな生き方がしたいんや、あんた自身はどないやねん」みたいな感じで言えるねんけど、その時はどういうていいのかわからへんで、とにかくおかしいという思いだけはあった。（中略）どつかの新聞記者の男からも「なにがなんでも反対なんて、非科学的でむちゃくちゃな」って言われたもんな¹⁾。

上記の例は、生協活動を通して反原発運動に入っていた女性の考え方をよく表現しているものである。これは、先のa.およびb.のリスクコミュニケーションの考え方にはあっては、望ましくないリスクへの態度であるといえる。しかしながら、彼女の考え方を上の新聞記者のように直ちに「非科学的でむちゃくちゃ」として否定しさることは難しい。それは次の理由による。

① 「リスク」を客観的・厳密に定義し、指標として算出することはできない。

「リスク」は、その起源として、生物の個体に適切な防衛行動をとらせるための警戒シグナルに由来する。すなわち、失われる価値（生存そのものや生存のための食物など）が大きいほど、また失われる可能性が大きいほど、強い「リスク」として生物に知覚される。この結果、生物はそのような「リスク」の大きな状況を避けることにより、個体の生存や集団の繁栄を最大化していく。

したがって、本来的に「リスク」とは自分が抱く価値観とその価値観が失われる可能性で構成されているので、「リスク」観は個人の主観的価値観に本質的に基づいていることになる。

このような「リスク」を客観的、数学的に定義し、指標化することは難しい。（科学の主要な領域においてすら、客観的厳密性に対する論争は決着していない。現在のところ、・・・と考えても矛盾は観察されない、ことを客観的厳密と考えている。）（例えば、原子力発電と自動車のリスクを比較することは、双方に抱かれる価値がそもそも違うので、比較が難しい。単位電力量あたりの人命損失と単位移動距離あたりの人命損失を比較することは難しい。）（あるいは、電力量は客観的に定義できるが、電力利用の便利さは、客観的に定義できない）

¹⁾ 三輪 妙子編、原発をとめる女たち、社会思想社、1990

②客観的・厳密に定義できない主観的価値観に対して、どれが正しく、どれが正しくないか、を判断することは、非常に難しい

③人間のあらゆる感情的な反応は、発生学的な根拠を持ち、野生合理的¹⁾である。

例えば野生環境においては、各個体の縛張りを適切に分配し、各個体の生産性と野生社会全体の秩序を維持する必要がある。この秩序維持のためには、ルール違反者に警告を与え、さらに再度のルール違反を抑制させるための、個体間の作用が必要となる。このために発達したのが”怒り”という感情である。すなわち、集団の秩序維持のための自然発生的なルールは野生社会においても存在し、そのルールを犯されたものには”怒り”という感情が生じ、またルールを犯したものには”罪悪感”という感情が生じる。被害者が”怒り”を示し、加害者が”罪悪感”を抱くことが”加罰”という社会制度の本質であり、被害者は罪悪感による負の感情を心中に抱き、加害者はその結果、正の感情を受け取ることにより、社会的通貨の交換行為としてルール違反に対する補償が成立する。

この野生社会における秩序維持制度の発展形態が、現代社会における法制度である。ただし、現代社会においては、野生環境での空間的な縛張りと比べて、個人の権力・権利空間が非常に多様、複雑、抽象的原因で、社会的ルールの認識が個人により様々に異なり、野生合理性（すなわち”怒り”という感情システム）に基づく両者の共通認識での”加罰”行為が成立しにくい。このため、明文化した法体系の導入が必要となる。

技術システムにおける「リスク」を生み出す側と、生み出される側の社会的交換行為も基本的に同様であり、人々が自然素朴に抱く「リスク」観のもつ野生合理性も充分尊重されなければならない。

野生合理的リスクコミュニケーション

このように、リスクに関するコミュニケーションは、純粋な技術論に閉じるものではなく、本来的に個人の主觀に立脚したものである。したがってリスクコミュニケーションを通して生じる論争は、純粋な技術論以外の次元を持っている。この次元においては、客観的リスク指標の存在を前提とするリスクコミュニケーション形態（上記、a, b）では問題解決に限界がある。この次元では、人間の持つ感情システムの特性が配慮されなければならない。これを、野生合理的リスクコミュニケーションと呼ぶ。

¹⁾ 戸田 正直、認知科学選書24 感情、東京大学出版会、1992

c. 高等動物が持つ感情システムは、本来、野生環境に適合し集団の社会的統制を維持することにより個体や集団の生存や繁栄を実現していくための高度な認知情報処理システムとして発達してきたものである。言語処理システムはこの感情システムを拠り所としている。また明文化された法体系も、野生環境における感情体系を起源としている。したがって、自然な感情体系を軽視することは、種の保存のための野生合理性を否定するものであり、法体系の自然法的な正当性の根拠も否定することになる。また感情論を排した論理的思考は、しばしば極端な非人間的結論へと導く。したがって、リスクコミュニケーションの場においても人々の自然素朴な「リスク」観が尊重される必要がある。リスクコミュニケーションは、異なるグループがお互いに感情的な満足に到達することを目指して進められなければならない。

しかしながら、複雑な現代社会においては自然法の調整が必要なのと同様に、個別状況での個人の野性的合理性にもとづく判断に一定の制約が課されなければならない。個人の主観的判断を至上のものとすると、「君と私とでは考え方方が違う。どちらが悪いともどちらが良いとも言えない。互いに批判することは出来ない。自分の信念に基づいて行動するだけである」とする文化的相対主義、個人主義的ニヒリズムに陥ってしまう。特に、技術施設のリスクを扱う問題においては、市民の主観的判断を過度に尊重すると、個人の利害の最大化により社会全体の福利に深刻な損害がもたらされるという社会的ジレンマを引き起こす危険性がある。

現実的なリスクコミュニケーションの方策： 理性的合理性と野性的合理性の中庸

客観的リスク指標の存在を前提とし異なるグループ間でのリスク評価の共通認識を目指す素朴な理性的合理的リスクコミュニケーションでは、異なる文化的背景を持つグループ間の論争を解決するには不十分である。他方、個人の主観的判断の文化的相対性を過度に尊重したリスクコミュニケーションでは、現代社会では相対主義的なニヒリズムに陥るか社会的ジレンマを引き起こす可能性がある¹⁾。

したがって、現実的なリスクコミュニケーションは、理性的合理性と野性的合理性の中庸を模索していく方向で進められなければならない。

表2. 1に、以上述べたリスクコミュニケーションの次元についてまとめる。また、その典型例を表2. 2に示す。

以上の3つの次元は、実際のリスクコミュニケーション分析で必ず問題点となるところである。

¹⁾ K.S.Sharader-Frechette, Risk and Rationality, University of California Press, 1991

例えば、遺伝仕組み換え施設の建設問題¹⁾では、問題解決のための課題として、次の項目が抽出されている。

- ・客観的リスク評価に関する共通認識の形成
- ・当事者間の信頼関係の醸成
- ・公と私、弊害をもたらしうるものと被りうるものとの競合についての、社会全体の議論を通じた調停基準の設定

また、Raynerも、リスク論争の厳しさと複雑さとの関係を、同様の次元を用いて整理している²⁾(下図)。図中、第1レベルは技術的安全性の確率論的評価の問題であり (Knowledge & Expertise) 、第2レベルは関係者や組織の経験度や適格性に起因する問題 (Experience & competence) であり、第3のレベルは世界観や価値観に関わる問題 (WORLD VIEWS & VALUES) である。Raynerは、もし第3レベルにおける問題が未解決のままならば、第2や第1レベルの解決も著しく困難になる、と述べている。

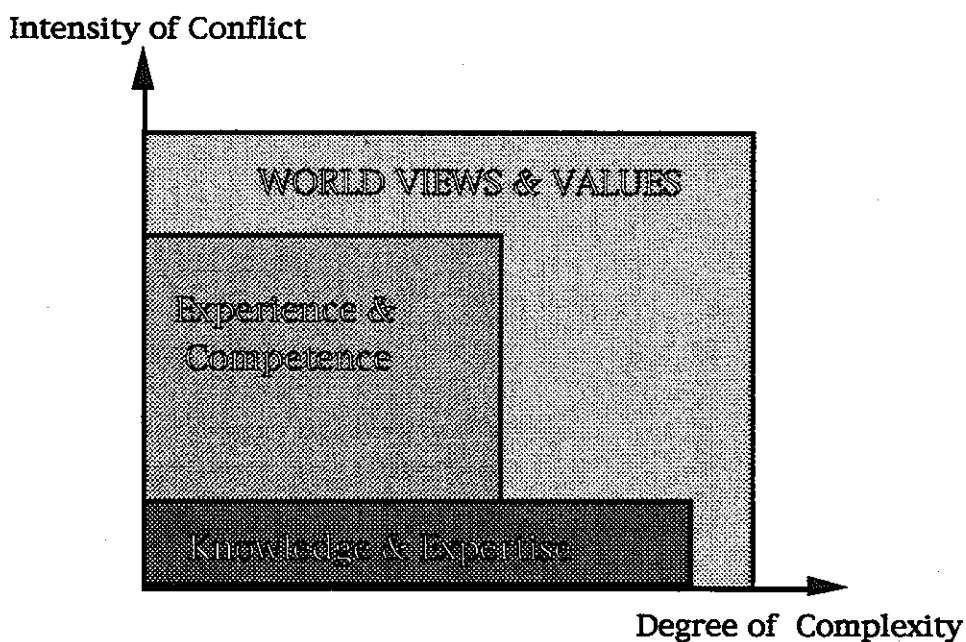


図 リスク論争の厳しさと複雑さの関係

¹⁾ 河合、社会的意思決定問題の事例分析、日本原子力学会 秋の大会、1993

²⁾ S.Rayner, Risk and relativism in Science and policy, The Social and Cultural Construction of Risk, Reidel, Dordrecht, 1987

表2.1 リスクコミュニケーションの次元

リスクコミュニケーション形態	コミュニケーションの方向性	コミュニケーションのメディア	基本的パラダイム	リスクに対する考え方	問題点
伝統的リスクパブリシティ	一方向的 (説得的)	情報	啓蒙主義	リスクは客観的合理的に評価できる。 したがって、その前提の上で議論ができる	<ul style="list-style-type: none"> ・客観的厳密性を持った「リスク指標」を定義することが難しい ・専門的な技術的内容を公衆にわかりやすく伝達することが難しい ・一方的な情報伝達は、民主的手続きと馴染まない
リスクコミュニケーション	理性合理的 リスクコミュニケーション	双方向的 (共考的)	情報 信頼	近代合理主義 (素朴合理主義)	<ul style="list-style-type: none"> ・客観的厳密性を持った「リスク指標」を定義することが難しい ・専門的な技術的内容を公衆にわかりやすく伝達することが難しい ・情報と信頼のみでは、文化的背景の異なるグループ間では真の解決が得にくい ・論的思考は、極端な過ちを犯しうる
野生合理的 リスクコミュニケーション	双方向的 (共有的)	情報 信頼 価値観・権力	文化相対主義 (感性至上主義)	リスクは個人の主觀的価値観により、千差万別である。 したがって、リスク観の正統性には、優劣をつけられない。	<ul style="list-style-type: none"> ・非合理的な判断、不明瞭な判断に至る可能性がある ・感情的対立、あるいは相対主義的ニヒリズムに陥りやすい ・個々の市民が個人的利害（いまここ価値）のみを追求すると社会的ジレンマに陥りる可能性がある

表2. 2 リスクコミュニケーション形態の典型例

リスクコミュニケーション形態	典型例
伝統的リスクパブリシティ	<p>「私はなぜ原子力を選択するのか」 The Nuclear Energy Option - An Alternative for the 90s Bernard Cohen, 1990</p>
リスクコミュニケーション	<p>「リスク・コミュニケーション」 日本リスク研究学会誌、Vol5, No.5, 1993 木下 富雄</p>
	<p>「リスク・コミュニケーションは、基本的に、情報の送り手と受け手の相互作用によって成立している。まず受け手は、リスク・コミュニケーションを与えられることによって情報の送り手と、そのメッセージ内容について信頼感を抱く。一方送り手も、正しい情報を伝えることによって後ろめたさがなくなり、自分自身の姿勢について自信を持つ。(中略)このような「フェアー」な情報交換を土台にして、相手の立場に対する相互理解が芽生え、両者の間に共考的構えが作られる。(中略)要約すれば、フェアーな情報提供による信頼感を媒介として、送り手と受け手の間に、初めて合意の可能性が出てくるということであろう。」</p>
野生合理的 リスクコミュニケーション	<p>「Risk and Culture」 University of California Press, 1982 M. Douglas and A. Wildavsky</p>
	<p>「公衆のリスク認知とその受容レベルは、言語システムや倫理体系と同様に、集団共有的な概念体系 (collective constructs) である。このような善惡の判断基準に属するものは、集団の生存を最適化する社会的相互作用に即して、その社会の文化的な体系から自然に形成されてきたものであり、元来、客観的絶対的な根拠はない。(中略)したがって異なる文化的背景を持つ価値観に優劣をつけることはできない。」</p>

2. 2. 2 本研究におけるリスクコミュニケーション方策

2.2.1で述べたように、純粹に技術的な問題は、地道な広報努力（リスクパブリシティ）により共通認識を得ていくことが可能である。また理性的な対話により、公衆の信頼を得ていくことも可能である。この理性合理的リスクコミュニケーションの実際に關しては、Covello¹⁾らによる豊富な事例やノウハウの蓄積がある。

しかしながら、人々の意思決定をより根元的なところで規定する野生合理性にたいするリスクコミュニケーションは、いまだ明らかとなっていない。問題は、この次元におけるすれ違いが深刻な論争の源であり、解決が難しく、また事実関係や技術的評価に関する論点や信頼関係に多大な影響を及ぼす点である。

したがって、地層処分技術に関する純粹な研究開発情報の提供のあり方（第1の次元）を検討するにあたっても、第3の次元に属する問題に充分な配慮がなされていなければならない。

この第3の次元への配慮は、2.2.1で述べたように、理性合理的なアプローチ（第2の次元）のみでは不十分であるが、一方、野生合理性にとらわれすぎると現代社会における公共的合理性そのものを損なうことになる。

とりうる方策は、野生合理性に根ざす公衆の自然的「リスク」観をよく把握し、そのうえで適切な配慮をしていくことである。（実際に事業を推進していくにあたっては、公共的合理性を損なうことなく民主的な協議を行う、という枠組みに基づくことになると考えられる。ただし、この民主的な協議のあり方に関しては、純粹な研究開発情報の提供のあり方を検討する本研究の範囲を越えているので、ここでは深く立ち入らない。）

本研究では、人々の自然な「リスク」観を充分に配慮しつつ、複雑な現代社会の全体的な福利を損なわないようなリスクコミュニケーションを模索する。このためにはまず、

①人々の野生合理的なリスク観を「現にあるもの」として、把握する。

必要がある。この自然な「リスク」観を踏まえた上で、

②現代社会における合理的な合意形成を行うために解決されなければならない障害（価値観のコンフリクトが生じる点）を整理する。

¹⁾ National Research Council, Improving Risk Communication, National Academy Press, 1989

3. 地層処分に関する意識構造モデルの設定

3. 1 分析の基本的な枠組み

2つの判断

- ・基本的な枠組みは、”地層処分に対する態度とその態度を決定づけている本質的な因子との結びつきをあらわす”ものとなる。
- ・地層処分に対する態度を決定づけている本質的な因子としては、次のようなものが考えられる。

－事実関係に関する基本的な認識

本人によって客観的に把握された状況認識である。この認識に基づいて理性合理的な判断がなされる。この判断は本人により意識される。この判断内容に関しては、次元1および2のリスクコミュニケーションが可能である。

－潜在的な主観的価値判断

態度の基本的な指向を決定する因子と考えられる。本人の潜在的な価値判断によってなされ、おそらく本人には明瞭には意識されないと考えられる。野生合理的な判断であり、次元3のリスクコミュニケーションが必要となる。

- ・これらの因子間の関係を図示すると、次のようになる。

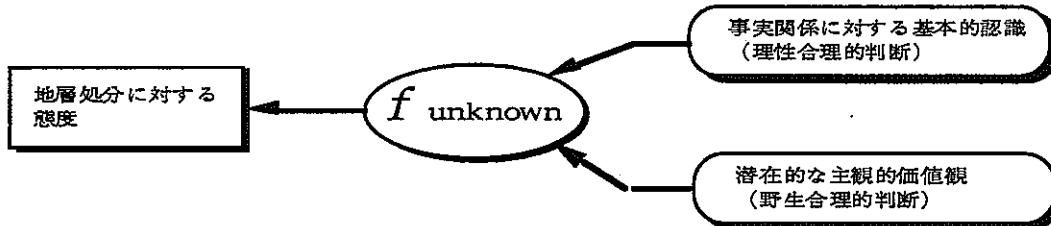


図 基本的枠組みの構成

- ・本研究では、特にこの図式において、基本的認識と主観的価値判断を同等の重要性を持って分析する。ただし、基本認識と主観的価値判断に属する具体的な構成因子の推定に留め、それら因子と態度とをつなぐ（非線形と考えられる）写象関係については踏み込んだ分析は行わない。

(昨年度研究と今年度研究の位置づけについて)

- ・昨年度は、特にこのような、地層処分の態度に関する意味的な整理や、その整理結果に基づく分析枠組みを用意することはせず、資料調査やブレーンストーミングによって網羅的に抽出したと考えられた論点を用いて分析を行った。これは、実際に対象者にヒヤリングを行うまでは、地層処分に対する態度に至る背景にどのようなものがあるか不明だったことや、分析に予見を与えることをなるべく避けたかったからである。このため論点として用意した項目も意味内容にバラエティや網羅性を持たせるため、概念的な整理は必要最小限に留めた。

昨年度の調査では、主婦層という、地層処分問題から比較的距離の遠い層が、地層処分に対する態度として分析者が想定し得るような認識を示していることが判った。このため、この知見をもとに、分析をもう一步踏み出して、分析者側が、地層処分に関する論点が述べている意味内容を整理して、公衆が抱く地層処分に対する態度およびその背景を一般的に表現する分析枠組みを用意し、その妥当性を実際のヒヤリング結果に基づき確認する、というのが本年度の作業である。

3. 1. 1 地層処分問題の構造

- ・地層処分問題の問題構造を（分析仮説として）設定する。
- ・地層処分に対する態度は、上図に示したように、理性的合理的、あるいは野生合理的判断による問題認識に基づいて形成されてくると考えられる。

しかしながら、これらを漠然と関連づけるのではなく、地層処分という問題の基本的な、あるいは多くの人々に共通した枠組みを土台においていたうえで、あらためて態度と理性的合理的、あるいは野生合理的判断による問題認識の関連を把握した方が問題の見通しが良い。

(1) 地層処分問題の特徴

- ・地層処分問題の構造を把握するための準備として、地層処分問題の特徴を明らかにする。
- ・昨年のヒヤリング結果などをみると、地層処分問題に対する人々の意見に関してはいくつかの一般共通な特徴（認識のパターンともいるべきもの）がある。それらを整理すると、次のようになる。これらは類似の社会問題と比較するとより明瞭となる。

処分の必要性

既にある高レベル廃棄物を安全に処分しなければならない、ということに関しては、大方の人が納得するようである。特に現在の原子力発電所に反対している人であっても、現にある高レベル廃棄物をなんらかの方法で処分しなければならない、ということに関しては同意を示す、あるいは現にある以上、その処分には同意を示さざるを得ない。

この場合、では地層処分がその方法としてふさわしいか、という点に関しては議論が出てくるところとなるが、他の処分方法と比較した場合の地層処分法の優位性は多くの人が納得するようである。

しかしながら、この納得は個人が自身で技術的に判断した結果でてきたものであるか、というとそうではなく、ビデオ等で専門家がそのような判断を下しているという見聞から、専門家のそのような判断への信頼やその判断を伝える情報メディアへの信頼から、優位性を納得しているものと考えられる。

したがって、これらの点に関して懷疑的な人は、他の有力な方法が確立されるまでは処分を先延ばしにするべき、というモラトリアムを考えることになる。

処分に関するメリット感の希薄さ（と、デメリット感の多様性）

高レベル廃棄物の処分は、負の（やっかいな）存在を0にするという意味で、誰にとってもなんらの積極的なメリットが乏しい、という特徴がある。この点は、有用な電力を生み出す源として認識されている原子力発電所と好対照をなすところである。このメリット感の希薄さは、次に指摘するよう地元の人々にとっては拒否感を先鋭化し、他の一般の人にとって問題を遠いものとして捉える見方を助長する要因となっている。

ここでつけ加えるならば、ではリスク感を中心としたデメリット感は強いかというと、この点は意見の分かれることもある。高レベル廃棄物ということで原子力発電所以上に危険性を感じるという人がいる一方で、地中深くに処分し動的な利用が伴わないということで、本質的には安全なものと捉える人もいる。

総論賛成、各論反対

何らかの方法で地層処分をしなければならないことと、にもかかわらず処分してもメリット感が実感を伴わないことが、地層処分に対して、総論賛成、各論反対というかなり共通した態度を形成している。すなわち、総論としては多くの人が地層処分を実施することは必要であると考えるが、各論として自宅の近くに処分場が建設されることには強く反対する、という態度である。

この各論反対の部分は、いわゆるNIMBY問題であり、上記の理由や放射能が持っているリスク感の強さから、問題が純粋な形で提示されることになる。

処分問題への関心、責任感の重要性

特に、処分場が自宅から遠く離れたところに建設されると考える多くの国民にとって、処分のメリット、デメリットに関する実感が希薄であり、いきおい個人の一般的社会問題への関心度が、態度に大きく影響することになる。関心度が希薄であると、その個人の態度は周囲のムードに流されてしまうことになる。

また関心度と相まって、責任感の感じ方も重要である。地層処分への態度を決める大きなポイントは、個人が高レベル廃棄物の発生とその処分に関して自分の責任をどの程度感じているか、という点である。この責任意識が高ければ、（そういう人は一般に公共意識の高いので）NIMBY問題に冷静で、民主的な見解を持つ。一方、高レベル廃棄物の発生は国の責任、あるいはさらに言えば国が勝手にやったこと、という認識を持つ人にとっては、NIMBY問題は永久に解決しないことになる。

大きな不公平状態

地層処分場の地元となる地域では、実感としてのリスク負担感が大きく、一方、大都市では多くの便益を享受しているという事実があり、その間の不公平感が大きい。

したがって、これを受け入れる地元にとっては、"貧乏くじを引いた" ということが強く意識される。また他の地域では、公共意識の高い人にとっては、地元との不公平性が地層処分方式に積極的に賛成するための障害になる可能性がある。一方、他の地域の人が、地層処分は国民全体の責任であり、ある特定の地方に負担をかけることが問題であることを認識して何らかの解決努力を示したとすると、地元で発生が予想される反対運動をやわらげる上で大きな効果が期待できる。

また不公平感の中には、将来の子孫にリスクを負担させることになるのかどうか、地層処分実施の政策決定者と一般国民との間の情報や決定権などに関する不公平感などの要因もある。しかしながらこの2つの要因はあまり大きな議論になることは少ないようである。

- ・このように、問題（態度と問題認識）の特徴の間には、相互に強い影響関係が見られる（次節参照）。
- ・問題（態度と問題認識）の特徴は、類似の社会問題と比較すると明瞭となる。下表に、原子力発電所の建設、一般ゴミ処理場の建設、沖縄米軍基地の移転との比較を示す。

表 地層処分問題の特徴

	地層処分場の建設	原子力発電所建設	一般ゴミ処理場の建設	沖縄米軍基地の移転
必要性の認識	◎ ある以上、処分しなければならない	△	◎ これ以上建設する必要が本当にあるか	○ 日米安保の必要性はほぼ受容されている
積極的メリット感	△ 原子力推進派以外、積極的意味は希薄	◎ 豊富な電力供給は多くの人にとって魅力	○ 家庭のゴミ処理はメリットとして実感	○ 安全保障の重要性は実感されやすい
総論賛成／各論反対	◎ 必要性は高いものの、希薄なメリット感	△ 必要性に議論があり、総論賛成ではない	△ 必要性が高く、リスク感は低い	○ 必要性ではあるが地元のリスク感が強い
問題への関心、責任意識	△ 日常生活との関わりが薄い	○ 有名な社会問題だが、责任感はなし	○ 日常生活との関わりが深い	△ 遠い沖縄の話という認識、政府の問題
不公平感	◎ 希薄なメリットと地元の強いリスク負担	○ 地元の強いリスク負担	△ 日常生活との関わりと低いリスク感	◎ 地元の強いリスク負担と、沖縄の特殊性

◎：特にある、 ○：ある、 △：ややある、 -：ない

・地層処分の問題は以上のように、必要性の認識が強いものの、積極的なメリット感が乏しく、”まあ、必要だから仕方がない”という捉え方をされることになる。しかしながら全般的な関心度は低く、リスク感の強さとも相まっていきおい総論賛成／各論反対という態度が形成されやすくなる。このことは地元に取ってみれば、メリットが希薄でリスク感の強いお荷物を押しつけられた、という印象を与える、不公平感が高まることになる。

・地層処分建設と沖縄米軍基地の移転では

- －問題が国政レベルであり一般人の関心や責任意識が薄い
- －問題が国政レベルでありメリット感が薄い
- －しかしながら国民全体で解決していかなければならない
- －大方の意見は、総論賛成／各論反対的である
- －地元の受ける負担と他の地域との間で著しいアンバランスがある

(このため、地元の人とその他の一般人とで著しい認識の差が生じる4)

という点で、共通が見られる。

・原子力発電所の建設では、これ以上の発電所の増設に多くの批判的な意見があるものの、発電所そのものが持っている有用性にも一般の共通認識がある。このため、原子力発電所の建設問題では、発電所のメリットとデメリットとの比較という功利論が主テーマとなる。この点、皆にとってのやっかい物である高レベル廃棄物をどのように処分するか、そのためには誰に負担してもらうか、という公共的正義の問題である地層処分とは若干異なる。（もちろん、原子力発電でもそのような問題は重要なテーマではある。）

・一般ゴミ処理場の建設では、必要性の認識が高いという点で地層処分と共通しているものの、一般ゴミ処理場のリスク感はあまり高くなく、また日常生活に密接しているためにその恩恵を理解しやすいことから、総論賛成／各論反対という態度は（もちろん一般ゴミ処理場問題でも強い住民エゴは見られるが）それほど先鋭ではない。またこのことから、処分場近隣とそれ以外の地域との間の不公平感もあまり高くない。

(2) 問題構造に関する仮説

- ・実際に一般公衆を対象にヒヤリングを行うにあたっては、漠然と聞くのではなく、出来るかぎり要点を絞って聞いていき、その結果を体系的にまとめていかなくては意味がない。
そのためには、あらかじめ分析者側に問題を意味づけたり、位置づけたり、評価したりする一定の枠組み（あるいは分析チャート）が必要である。
- ・この分析チャートを得るためには、”地層処分問題とはこのような問題である”ということをいう仮説が必要である。もちろん、この仮説は独りよがりなものではなく、一般的で妥当性のあることが必要である。
- ・昨年度のヒヤリングを通して、地層処分の問題に関してはその問題構造に一定のパターンが見られた。
問題構造とは、態度と、その態度にいたる（理性合理的、野生合理的）判断認識との関係である。
そこに一定のパターンが見られる、とは、大多数の人が同じような認識を持つ、というのではなく、検討されるテーマ（認識のサブジェクト；例えば”高レベル廃棄物処分の必要性はどうだろうか”など）が共通しているということである。それらの共通したサブジェクトを土台として、各サブジェクトに関して個々人の異なる認識が示され、異なる態度が導かれることになるのである。
- ・(1)において、類似の社会問題との比較の上で、地層処分問題の特徴点を整理した。
この特徴点にポイントを置きながら、地層処分に関する問題構造の一定のパターンを整理する。その結果を、図3. 1にしめす。
地層処分に対する態度に最も大きな影響を与えるのは、高レベル廃棄物処分の必要性である。一般的には”現にある以上何らかの方法で処分することは仕方がない”という認識がもたらし、消極的な賛成へと繋がっていく。ここで、原子力発電所に対する認識が影響してくる。一般的には、もうこれ以上の発電所の増設には賛成しないものの現状の発電所の有用性は認められており、これが高レベル廃棄物は”現にある以上何らかの方法で処分することは仕方がない”という認識に結びついている。さらに高レベル廃棄物処分の必要性が認められたとして、その処分方法には本当に地層処分が適切なのか、という議論（認識のサブジェクト）がある。ここで大方の態度として地層処分が実施方法として適切であり、”全体的には賛成”という基盤が形成される。そのうえで、個別のメリットやデメリットの評価が行われる。また、個別のメリットやデメリットは対象者個人と地層処分との広い意味での利害

関係（その人の公共意識に地層処分がどのような印象を与えていたか、という点も含めて考えている）を生み出しており、これが対象者個人と地層処分問題との距離を規定することになる。この距離感は地層処分に対する態度の大きな影響を与えるとともに、もう1つの認識サブジェクトである社会的不公平性に対する個人の認識に影響を与えている。

・このように認識のサブジェクトは、地層処分に対する態度に様々な影響を与える。また、認識サブジェクト間でも相互に影響しあっており、この相互影響のパターンからもいくつかの重要な分析の視点が導かれる。さらに各認識のサブジェクトについては、代表的な認識のオルターナティブ（図3.1中、認識の相違で結ばれているもの）を示すことが出来る。

a.認識サブジェクトと態度との関係

b.認識サブジェクト間の関係

c.認識のオルターナティブ

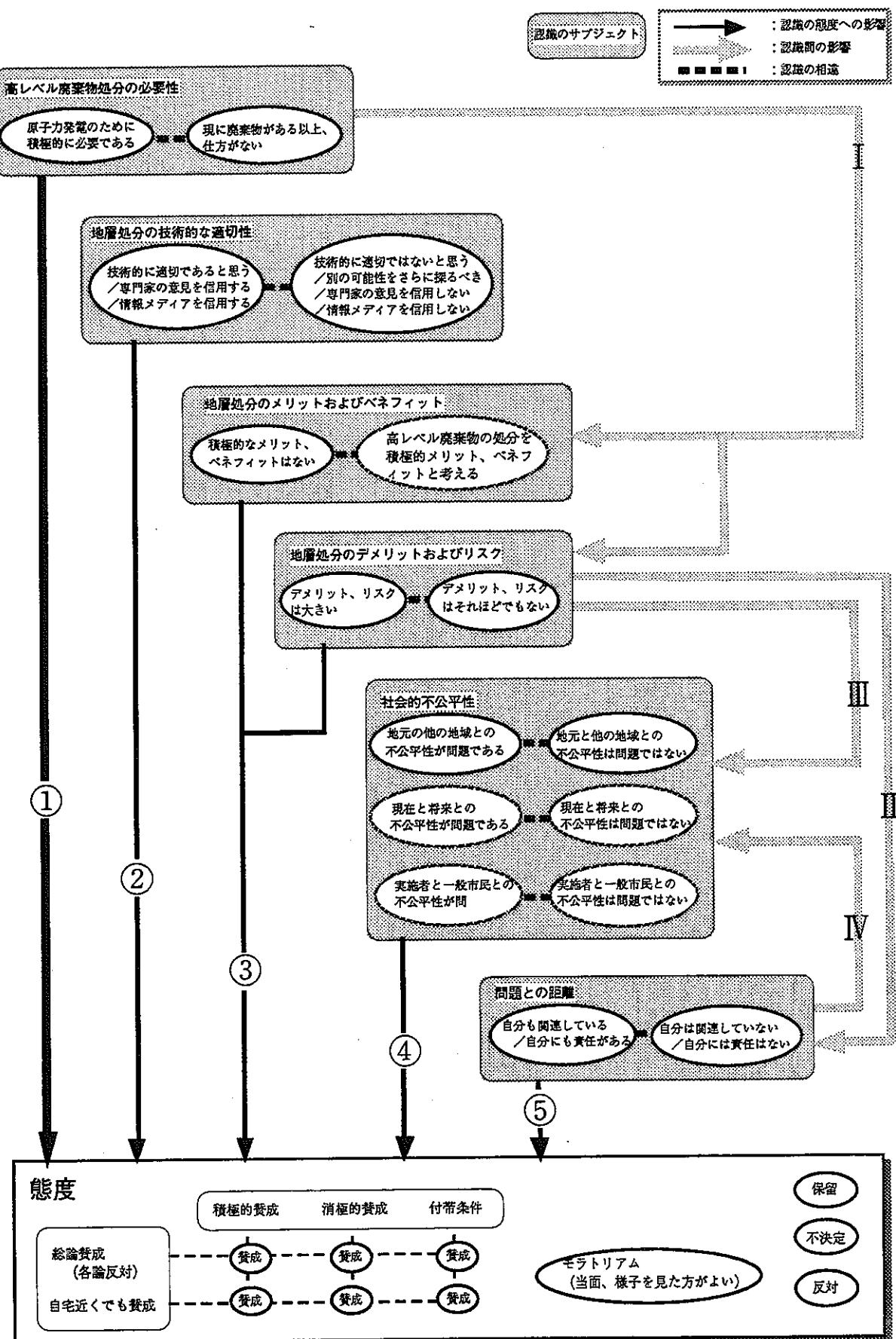


図3. 1 問題認識と態度との基本的な関係構造

a.認識サブジェクトと態度との関係、および認識のオルターナティブ

①高レベル廃棄物処分の必要性

サブジェクトの意味：

地層処分にたいする態度を規定する最も支配的なサブジェクトである。そもそも高レベル廃棄物の処分が不必要であったなら、地層処分に賛成とする態度も極めて希になるであろう。しかしながら実際には、現にやっかいな高レベル廃棄物が存在しているわけであり、少なくとも現在ある高レベル廃棄物を何らかの方法で処分しなければならないことは、ほとんどの人が認めるところである。この必要性の認識は、地層処分の数少ないメリットの認識につながる。

オルターナティブ：

多くの人にとっては、”現に廃棄物がある以上、仕方がない”というものであろう。また、原子力発電所に積極的な価値を見る人は、高レベル廃棄物の処分に関して”原子力発電のために積極的に必要である”と考えるであろう。

原子力発電所の必要性

サブジェクトの意味：

原子力発電所の必要性の認識は、地層処分に対する態度を形成する上での隠れたサブジェクトである。”隠れた”というのは、原子力発電所必要性の認識に関わらず、現にある廃棄物を処分しなければならないという認識やその結果（消極的ながらも）賛成の態度を示す点は影響を受けていない。しかし表面的には影響を受けていなくても、メリット、デメリットの判断をはじめとして多くのサブジェクトや態度のimplicitな影響を与えているものと考えられるからである。この影響の最も重要な点は、高レベル廃棄物必要性の認識を通して、地層処分に積極的に賛成するかどうかの分かれ目となること、地層処分のメリットに積極的な認識を持つこと、の2点に現れる。

オルターナティブ：

現状では、発電所の建設は”現状維持”か、”減らした方がよい”という意見が多いであろう。また”さらに必要である”とする認識も少なからずあると考えられる。

②地層処分の技術的な適切性

サブジェクトの意味：

高レベル廃棄物処分の必要性が認められたとして、それをどのような方法で実施するかは、次の段

階のサブジェクトとなる。地層処分方式の優位性は、動燃等の研究機関により多く提示されており、一般公衆はこうした情報提示を信用するか、しないか、の選択を行うことになる。したがって、このサブジェクトでは、第1次元のリスクコミュニケーションである「技術情報の提示」が認識の重要な改善、促進手段となる。

ここで、地層処分が適切でないと認識されると、態度保留（モラトリアム）につながることになる。
オルターナティブ：

専門家の意見やそれを提示する情報媒体を信用することにより”地層処分は技術的に適切である”という認識が持たれることになる。またそのような信用が認識されないと、別の可能性もある、という議論につながり、他方式の研究のより精力的な実施や地層処分に対するモラトリアムにつながることになる。

③地層処分のメリット、デメリット

サブジェクトの意味：

地層処分が技術的に適正であるとしても、処分に伴うメリット、デメリットによって、個人の態度は多様に変化しうる。メリット（あるいはベネフィット）は、やっかいな高レベル廃棄物を処分できるという、やや消極的なものが主であり、なかなか積極的なメリットは認めにくい。これは賛成が積極的なものであるか、消極的なものであるかに影響を与える。一般的にはメリット感は希薄で、消極的な賛成につながることが多い。デメリット（あるいはリスク）の認識は多様である。代表的なものとして放射線による汚染や環境破壊があげられる。これらのメリット、デメリットの具体的な内容については、（後述するように）地層処分の影響項目として整理される。

オルターナティブ：

メリットに関しては、現にある高レベル廃棄物を仕方がないからなんらかの方法で処分しなければならないと考える人にとっては、”積極的なメリットはない”と認識されるであろう。一方、原子力発電を積極的に支持する人にとっては処分のメリットとしてもより積極的な意味を持つと考えられる。またデメリットとしては放射能汚染や自然破壊など多様な項目がありそれらの影響の認識もまた多様であり、”デメリットは大きい”から”デメリットはそれほどでもない”までの段階を持つ。

これらのメリット、デメリットの認識に関しては、事実関係として認識される地層処分の影響項目だけではなく、潜在的主観的な価値判断（野生合理的判断）も大きく影響するものと考えられる。

④社会的公平性

サブジェクトの意味：

地層処分は、メリット感が希薄で、デメリット感は（多様性があるものの、概して）強い。またこの問題に対する地元以外の一般的公衆の関心は低く、無責任な認識となりやすい。このため、地元ではややもすると貧乏くじという印象が強くもたれやすい。このようにして、実質的なメリット／デメリットのアンバランスと心情的なものから”地元と他の地域との間の”強い不公平感が認識されやすい。またこれほど強いサブジェクトではないが、高レベル廃棄物中に含まれる放射性物質が長期的に残存することから”現在と将来の世代の間の”リスク負担に関する不公平性の認識が存在する。また中央行政が主体となって事業を進める事から”実施者と一般市民との間の”情報や決定権に関する不公平性の認識も問題となるであろう。

これらは、なんらかの付帯条件などにあるか、ややもすると総論賛成／各論反対という性格を持つ態度の形成に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

これらの社会的不公平性への認識は、個人の価値観、特に社会に対する価値観や政治意識が大きく影響するものと考えられる。

オルターナティブ：

”地元と他の地域との間の不公平性”、”現在と将来の世代の間の不公平性”、”実施者と一般市民との間の不公平性”がある。

⑤問題との距離

サブジェクトの意味：

地層処分に対する基本的な態度を形成する上で、個人の問題との距離感は重要である。距離感は、自分にとって関連のある問題か（ひと事ではないか）、自分にも多少なりとも責任のある問題か、の2つの点で表される。この距離が遠いと、個人の態度は意見の大勢に従うことになる。また地元との不公平感など社会的な緊張関係に関して有効な態度を示すことが難しくなる。高レベル廃棄物を処分することの重要性の認識と、処分問題への距離の近さは、有効な社会的解決策を導く上で重要である。

オルターナティブ：

”自分も関連している”と考える社会性があるかどうか、”自分にも責任がある”と考える公共性があるかどうかが重要なポイントとなる。”自分との関連”については、一般に認識が低い。”責任”に関しては、自分の責任を強く感じる人は少ないが、逆に国が勝手に高レベル廃棄物を発生させたのであり自分には責任はないとする人はさらに少ない。

以上の各認識サブジェクトと態度との影響関係を、下表に示す。ここで態度は後述するように、賛成（積極／消極、総論賛成／各論賛成）、モラトリアム、反対、放棄、不決定とした。

表 認識サブジェクトと態度との影響関係

	積極賛成 ／消極 ／付帯	総論賛成 /自宅付近	モラトリアム	反対	不決定	放棄
①高レベル廃棄物処分の必要性	●	●	—	—	—	—
②地層処分の技術的な適切性	●	●	●	—	—	—
③地層処分の メリット／デメリット	●	●	▲	—	—	—
④社会的不公平性	●	●	—	●	—	—
⑤問題との距離	●	●	—	—	●	●

b.認識サブジェクト間の関係

I. 地層処分の必要性と地層処分のメリット／デメリットとの関係

高レベル廃棄物のリスクの認識

地上に存在し、蓄積していく高レベル廃棄物の影響（放射能リスク）の認識が強いと、何らかの条件付きであっても、放射能リスクを緩和できる一つの手段として地層処分の必要性を認めるであろう。必要性の認識から地層処分のメリットには、高レベル廃棄物の社会からの隔離や他の手段と比べたときの安全の優位性が考えられる。しかし、高レベル廃棄物の放射能リスクの認識は、地層処分のデメリットにもつながる。

原子力発電の積極的支持

原子力発電を積極的に支持し、さらなる発電所の増設の必要性を認識していると、高レベル廃棄物を処分により原子力発電が維持できることも、地層処分の潜在的なメリットとして認識されると考えられる。

II. 地層処分のメリット／デメリットと問題との距離との関係

問題における個人の得失

地層処分問題で個人の価値観がどのような影響（得ること、失うこと）を受けるのかは、個人と問題との距離感を規定する上で重要な因子となる。例えば、地元の住民で放射能汚染のリスクを現実的なものとして感じたとすれば、その人の問題との距離はぐっと近いものになる。また都市に住んでいる人でも、行政側の事業の進め方にその人の価値観に反するような（例えば強権的な）姿勢が見られれば、その人は反権力という価値観において問題を近いものと認識するであろう。このため、ここでは個人の世界観や価値観が大きな意味を持っている。

地層処分の積極的メリット

地層処分に積極的なメリットを見いだしている人は、多少の社会的不公平の発生には目をつぶる傾向を示すだろう。これは間接的に原子力発電への態度が、社会的公平性の議論に影響を及ぼしていることを示すものである。

III. 地層処分のメリット／デメリットと社会的不公平性との関係

問題における個人の得失

地層処分問題で個人の価値観がどのような影響（得ること、失うこと）を受けるのかは、個人の社会的公平性の認識に大きな影響を及ぼす。例えば、地元の住民で放射能汚染のリスクを現実的なものとして感じたとすれば、そのようなリスクの脅威を受けずに電力の恩恵を享受している都市住人に対して強い不公平感を抱くかもしれない。また処分事業の実施において権力者の強権発動とする考えを抱いた人は、実施者と一般市民との決定権などに対する不公平を認識することになる。

地元の人と都会人の見解のギャップ

地層処分のメリット感がだれにとっても希薄であり、一方、地元の住民のリスク（をはじめとするデメリット）負担が過大であるという認識に至れば、地元の都会人との間の認識のギャップという問題が顕在化する。この結果、処分場が建設される地元に住んでいる人にとっては、問題の捉え方が大きく異なると想像される。現在、処分場予定地の”地元”は存在していないので、その意見の傾向を示唆するデータは存在しないが、実験用の施設を建設しようとしてる北海道の幌延町や岐阜の東濃郡において、原子力発電所の建設を凌ぐ強さの反対運動が起きていることを考えると、相当な逆風が吹くであろうことは容易に想像できる。

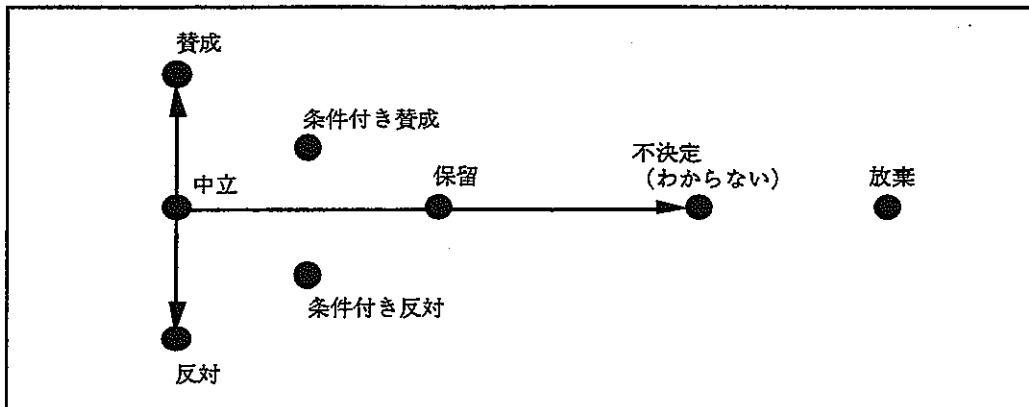
IV. 問題との距離と、社会的不公平性との関係

社会性と公共意識

問題との距離は、社会的公平性に関する認識に影響を与える。例えば、公共性の高い人は、行政の強権的な政策には批判的になる一方、住民側の理不尽な反対の主張にも異を唱える大局的な見方をしやすいと考えられる。社会性、公共意識が低いと、社会的不公平性には鈍感となるであろう。

3. 1. 2 地層処分に対する態度

- ・地層処分に対する態度としては、昨年度のヒヤリングにおいて、次のような例が観察されている。
 - －直ちに処分に着手するべきである。
 - －技術開発を充分に行った後に着手するべきである。
 - －社会的なコンセンサスを充分に取った上で、着手するべきである。
 - －他のオプションの可能性をまず充分に吟味した上で、地層処分の優位性が明確に示されなければ着手するべきではない。
 - －海外の動向が定まるまで着手するべきではない。
 - －直ちにやめるべきである。
 - －よくわからない。
 - －どうでもよい。
- ・これらの異なるトーンを類型化する枠組みとして次のものを考える。
すなわち、これらのトーンは、
 - －賛成か、反対か
 - －その決定に到達する時間軸の2軸で位置づけられる、と考える。
- ・特に、時間軸の延長上に「放棄」を位置づけた。放棄とは、本人が、自分とはまったく関係のない問題と考えて、そもそも地層処分問題について考察すること自体を放棄する場合を意味している。
したがって、地層処分を自身に関係する問題と認めつつも情報不足などから判断できない、とする不決定とは、明確な差異があることに注意する必要がある。
- ・最近の国政選挙に多大な影響を与えるいわゆるサイレントマジョリティは、この図式中では、不決定を中心に、判断保留から放棄の間に分布することになる。



3. 1. 3 地層処分に対する態度にいたる意識構造モデル

- 3.1.1で仮説として設定した地層処分問題の基本構造に基づき、3.1.2で設定した態度へと至る問題認識の流れを、理性合理的判断および野生合理的判断との位置づけを明らかにしながら、モデル化する。このモデルを「地層処分に対する態度にいたる意識構造モデル」とし、以降のヒヤリング分析の拠り所として用いる。下図に、地層処分に対する態度にいたる意識構造モデルの概要を示す。

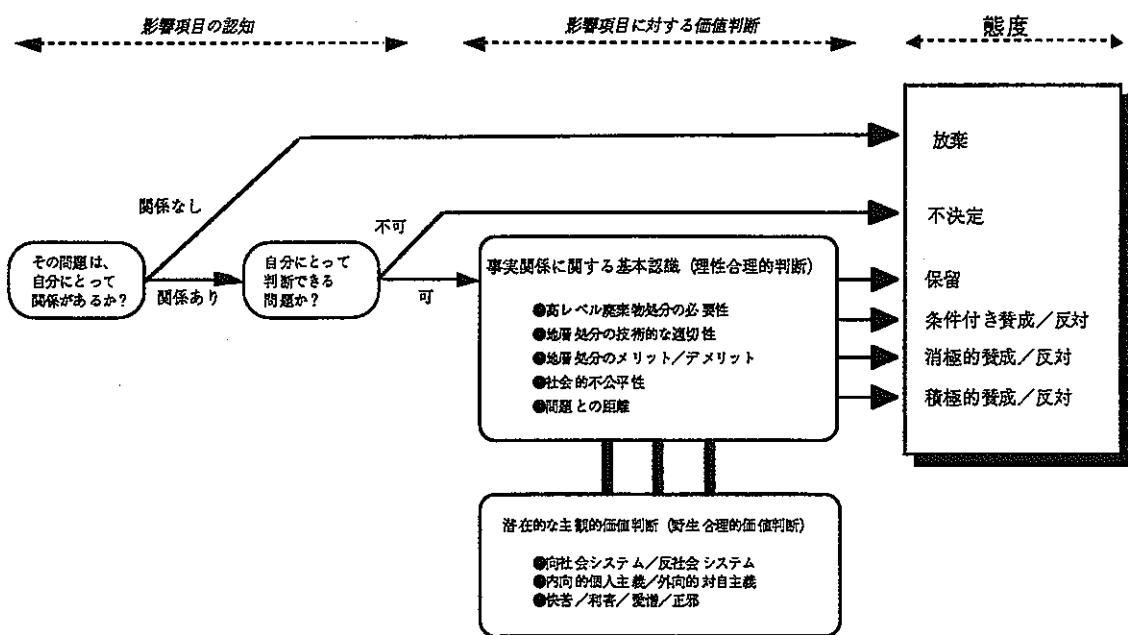


図 地層処分に対する態度にいたる意識構造モデルの概要

- 3.1.1で仮説として設定した地層処分問題の基本構造を検討した際には、地層処分に対して何らかの価値判断を行うことを前提としていたので、その前段階である問題の認知段階は明示していなかった。ここでは、より包括的にこれらの認知段階と、その段階で認知に失敗した場合の態度として放棄と不

決定を考える。

- ・3.1.1で仮説として設定した地層処分問題の基本構造における問題認識の流れを、事実関係に関する基本認識として、より詳細に設定する（3.1.4章参照）。
- ・3.1.1で仮説として設定した地層処分問題の基本構造における問題認識の背景にある主観的判断を、潜在的主観判断として、より詳細に設定する（3.1.5章参照）。

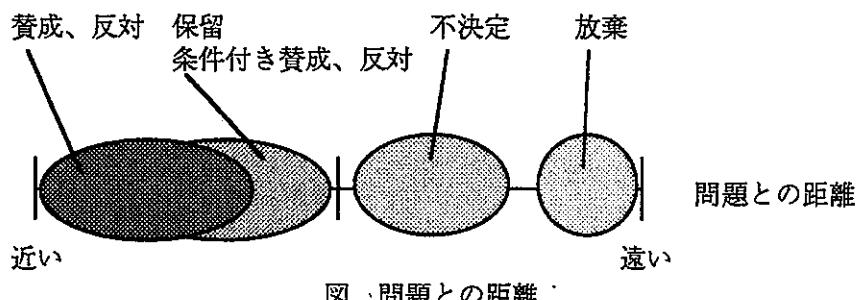
3. 1. 4 事実関係に関する基本的認識（理性合理的判断）

- ・昨年度の研究においては、地層処分に対する意識内容を捉るために、様々な意味内容にとれる一般的な用語である「論点」を設定し、複数の論点を言明とその根拠の【because-of】関係で結びつけていくという手法をとった。
- ・本年度の研究においては、昨年度のような手法により得られた論点内容の収集結果に基づき、その分析、理解のもとに、意味的な連関をより明確にした（論点の）認識モデルを設定している。
- ・すなわち、3.1.1で仮説として設定した地層処分問題の基本構造である。
この基本構造をより具体的に書き下し、実際のヒヤリングを行うための【地層処分に対する態度にいたる意識構造モデル】の「事実関係に関する基本的認識」を設定する。
- ・「事実関係に関する基本的認識」は、2つの部分で構成する。すなわち、
 - a.事実関係の基本認識の基本条件となる部分
 - －高レベル廃棄物処分の必要性（原子力発電の必要性）
 - －地層処分の技術的な適切性
 - －問題との距離
 - b.事実関係に関する具体的な評価、判断
 - －地層処分のメリット／デメリット
 - －社会的不公平性
- ・このうち、a.の高レベル廃棄物処分の必要性と地層処分の技術的な適切性は明確であるので、さらに詳細な設定は行わない。

- ・a.の問題との距離と、b.の地層処分のメリット／デメリット、社会的不公平性をさらに詳細に設定する。このうち、社会的不公平性は広義のデメリットと考えられるので、地層処分のメリット／デメリットに含めて考える。

問題との距離

- ・地層処分というものを、まずは自分にも関わりのある問題として認識する段階である。ここで影響項目が認知されず、自分とは遠い距離にある問題と判断してしまうと、問題に対して何らかの考察をしようとする段階には至らないことになる。これは関心の度合いとして、図のように設定する。



地層処分のメリット／デメリット

- ・地層処分のメリット／デメリットの認識項目として、昨年度の「論点」をより狭義に捉え直す。すなわち、地層処分による状況として具体的に認識され（合理的判断が行われ）る対象を、「地層処分によってもたらされる影響」とする。例えば、”放射性廃棄物を処分できること”、”環境破壊が発生する可能性があること”、”漠然とした不安感を抱くこと”などである。
- ・（主観的価値観により影響されないとすると、）態度は、この事実認識に対する判断の総合として決定されると考える。例えば、”地層処分により放射性廃棄物を処分できる”という「影響項目」があり、それは良いことという「理性的判断」があり、その結果、地層処分には積極的に賛成するという「態度」にいたる、と考える。
- ・事実認識に基づくメリット／デメリットの判断とは、これら影響項目の望ましさ、良いか悪いかを判断するものであるが、その良し悪しの意味内容を、リスク認知の3因子、「リスク」「ベネフィット」「信頼感」に分解して考える。つまり、この3因子を評価属性として、ある影響項目の総合的な価値判断を行う、とする。図式的に表すと、次のようになる

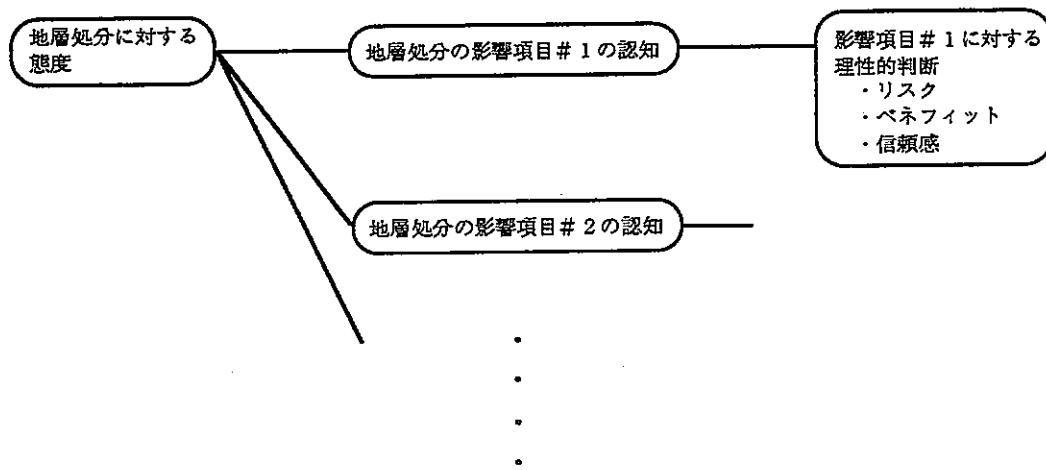


図 影響項目（事実認識）と態度との関係図式

- ・ある影響が「良いか、悪いか」の判断は、つまるところその影響のメリット、デメリットの比較で下されると考えられる。
 - ・しかしながらものごとには必ず知り得ない情報による不確実さ不明瞭さがつきまとるものであり、合理的な判断をせまられる人はそこで何らかの不確実性に対する賭けを行わなければならない。
 - ・リスク認知研究では、因子分析の結果、メリットとして「ベネフィット」、デメリットとして「リスク」、そして不確実性に対する賭けとしてその影響項目を制御しうる人々の能力や姿勢に対する「信頼感」を抽出している。
 - ・したがって、本研究でも、リスク認知に関して安定的に観察される因子である「リスク」「ベネフィット」「信頼感」を、価値判断の3因子とする。
 - ・問題に対する直接的な理性的判断とは、その問題となる対象がもたらす影響や効果が、自分にとって、（あるいは自己と関係のある他者にとって）、好ましいことであるのか、あるいは好ましくないことであるのか、を評価することである。地層処分に伴う好影響をメリットとし、悪影響をデメリットとする。リスク認知では、メリットをリスク主体の持つベネフィット、デメリットをリスクとして扱っている。
- 地層処分はひろく社会的な問題であるので、個人的判断と公共的判断とがともに重要であり、その間の葛藤が判断全体を位置づける軸となりうる。
- したがって、地層処分問題について賛成、あるいは反対を決定づける判断は、基本的にメリット／

デメリットの比較により決定されるとし、それが個人／公共の2軸により、2次元的に位置づけられるものとする（下図参照）。

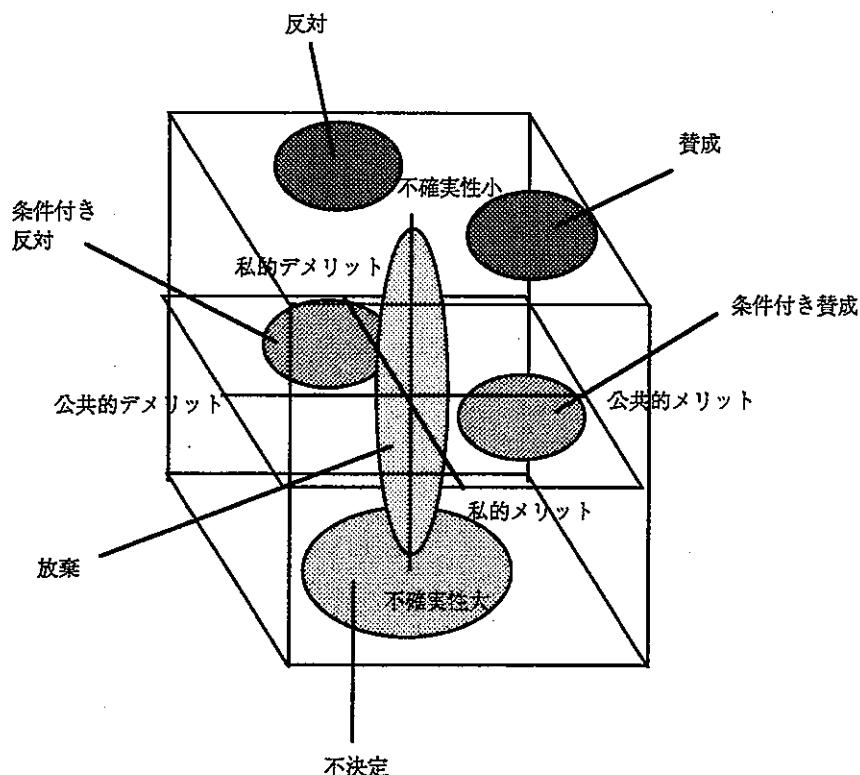


図 地層処分のメリット／デメリット

- ・地層処分のメリット／デメリットの認識項目としての「地層処分によってもたらされる影響項目」を表3. 1に整理する。またその影響項目を導く根拠となる影響図式を図3. 2に示す。

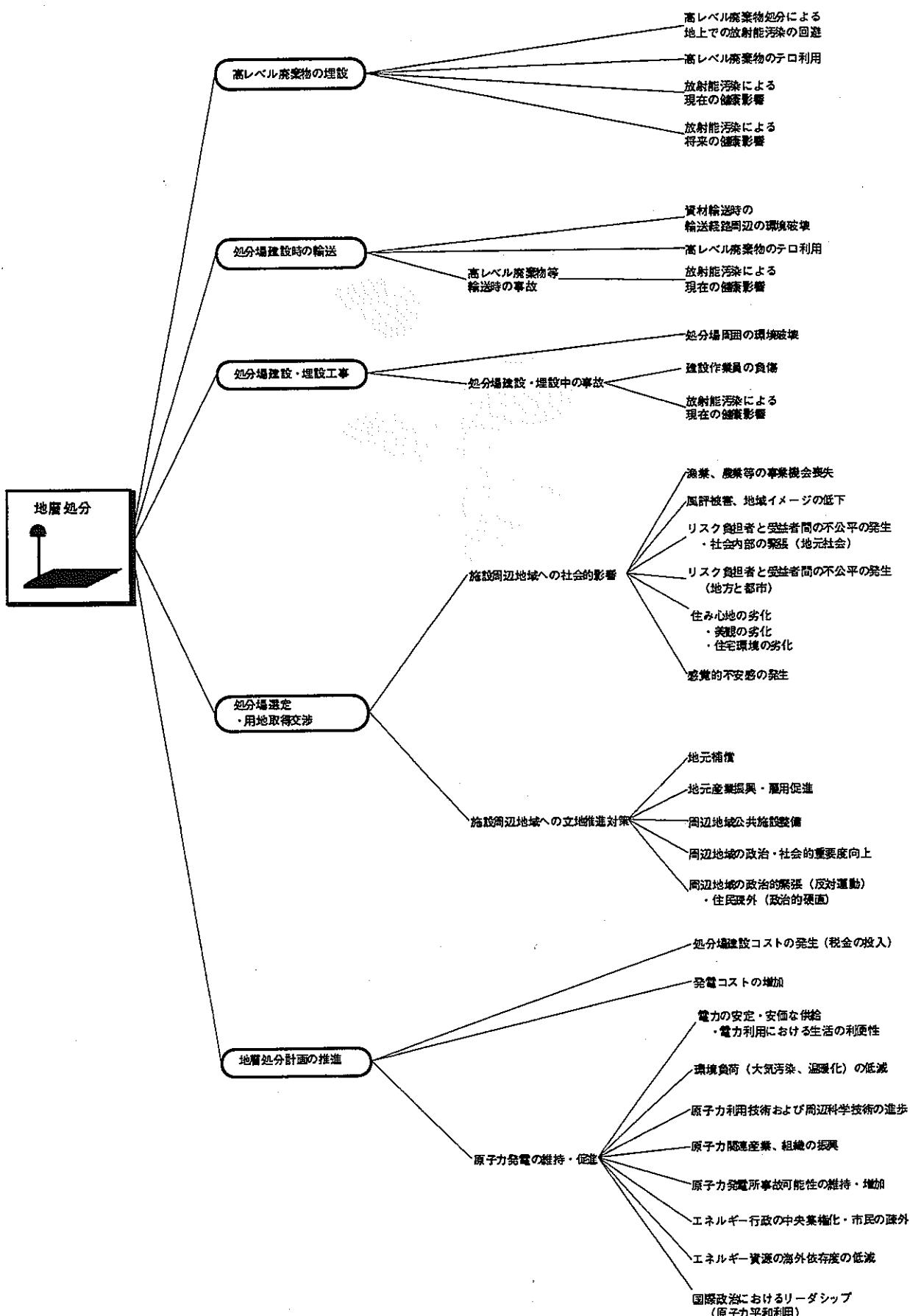


図3. 2 地層処分の影響図式

表3. 1 影響項目の整理（事実認識項目）（1／2）

影響を受ける 価値の区分	周辺地域社会への限定的影響	全国レベルでの影響
生存 (生命、健康) (リスク)	<ul style="list-style-type: none"> ・放射能汚染による現在の健康影響（埋設時） ・放射能汚染による将来の健康影響（埋設時） ・高レベル廃棄物のテロ利用（埋設時） ・放射能汚染による現在の健康影響（輸送時） ・高レベル廃棄物のテロ利用（輸送時） ・放射能汚染による現在の健康影響（建設時） ・建設作業員の負傷 （建設時） 	<ul style="list-style-type: none"> ・高レベル廃棄物処分による地上での放射能汚染の回避 （・放射能汚染による現在の健康影響）* (埋設時) （・放射能汚染による将来の健康影響）* (埋設時) ・高レベル廃棄物のテロ利用（埋設時） （・放射能汚染による現在の健康影響）* (輸送時) ・高レベル廃棄物のテロ利用（輸送時） （・放射能汚染による現在の健康影響）* (建設時)
生活・環境 (デメリット)	<ul style="list-style-type: none"> ・資材輸送時の輸送経路周辺の環境破壊 ・建設時の処分場周辺の環境破壊 ・住み心地の劣化 美観、住環境 ・感覚的不安感の発生 	<ul style="list-style-type: none"> ・感覚的不安感の発生
経済・産業 (デメリット)	<ul style="list-style-type: none"> ・漁業、農業等の事業機会喪失 ・風評被害、地域イメージの低下 	<ul style="list-style-type: none"> ・処分場建設コストの発生 ・発電コストの増加
政治・社会 (デメリット)	<ul style="list-style-type: none"> ・リスク負担者と受益者間の不公平 社会内部の緊張（地元社会） ・リスク負担者と受益者間の不公平 (地方と都市) ・周辺地域の政治的緊張、住民疎外 	<ul style="list-style-type: none"> ・リスク負担者と受益者間の不公平 (地方と都市) ・エネルギー行政の中央集権化、市民の疎外

*：技術的リアリティはないが、社会的リアリティがあるので、リストに含めている

表3. 1 影響項目の整理（事実認識項目）（2／2）

影響を受ける価値の区分	周辺地域社会への限定的影響	全国レベルでの影響
生存 (生命、健康) (ベネフィット)		<ul style="list-style-type: none"> ・環境負荷の低減（大気汚染、温暖化） ・原子力発電所事故可能性の維持、増加
経済・産業 (ベネフィット)	<ul style="list-style-type: none"> ・地元補償 ・地元産業振興、雇用促進 ・周辺地域公共施設整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・電力の安定、安価な供給、生活の利便 ・原子力利用技術および周辺科学技術の進歩 ・原子力関連産業、組織の振興
政治・社会 (ベネフィット)	<ul style="list-style-type: none"> ・周辺地域の社会、政治的重要度向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギー資源の海外依存度の低減 ・国際政治におけるリーダーシップ

3. 1. 5 潜在的な主観的価値判断（野生合理的判断）

地層処分に対する態度がかたちづくられるうえで、本人が意識する、しないに関わらず、潜在的に態度形成に影響を与えていくと思われる主観的価値判断因子を推定する。

(1) 主観的価値観と事実関係の認識との関係付け

・主観的価値観と事実関係の認識との関係付けは、基本的に、地層処分問題の評価の際に潜在的に判断を行っていると考えられる主観的価値項目を抽出し、

①その地層処分に関する主観的価値項目は、より一般的な価値観のどの部分に関与しているものか

②また地層処分に関する主観的価値項目に関する判断は、事実関係の認識のどの部分に実際に影響を

与えているか、その影響とはなにか

という視点で、関係付けを行う。

すなわち、地層処分に関する主観的価値項目を接点として、一般的な価値観と事実関係の認識とを関係づけようとするものである。

主観的価値項目を、より一般的な価値観と対応づけるために、現代日本の一般的価値観の類型化を行う。

ヒヤリングにおける一般的な価値観との対応づけは、この地層処分に関する主観的価値項目に対する判断内容を聞いて、それが一般的価値観の類型のどの部分に対応できるのかを検討することで行う。

また、主観的価値項目に対する判断と地層処分に対する事実認識との対応づけは、ヒヤリング対象者の直接的な連想から導き出す。

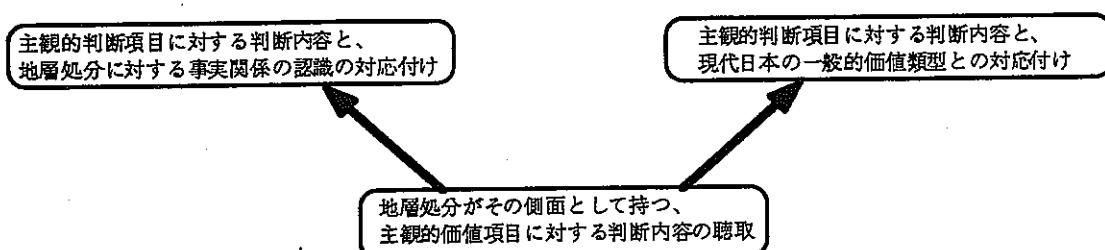


図 一般的価値観と地層処分についての事実関係の認識を対応づける流れ

(2) 主観的価値観の一般的定義

主観的な価値観を類型化するための準備として、主観的な価値観がどのような野生合理性から発現してくるかを整理する。このことは、個人の主観的価値観に対する認識がどのような野生合理性に基づく反応を引き起こすかを見る上で重要である。

主観的な価値判断は、本人の野生合理的なリスク観に基づくものと考える。そこで、野生合理的なリスク観を、公共の技術施設の持つリスクに対する基本的な態度の指向性を決定づける広義の（つまり、客観的事実認識よりもたらせるの局所的なものとは異なる）「リスク」観と位置づける。

言語処理系が持つ知識体系は、本人を取り巻く世界の森羅万象を記号化し、その記号間を論理的に関係づける。例えば、”樹”には”果物”がなっている、などの因果関係を理解している。一方、言語処理系を支える感情システムは、言語処理系が扱う記号の「意味づけ（価値づけ）」を行う。果物を食べることによる満足感、満腹感を味わうことにより初めて”果物”が大きな価値のあるものである、という意味を実感することが出来る。

個体の生存にとって有効な（栄養のある）果物は、「美味しい」と感じ、そうでないものは「不味い」と感じることによって、生物は個体の生存を野生環境の中で最適化することができる。

のことから、高等生物に備わっている感情システムは、野生環境の中できわめて合理的にプログラミングされた認知処理系となっている。

言語処理系における知識や記号の体系が、この感情システムにより意味づけられている以上、言語処理系が下した論理的な結論が感情システムが持つ意味体系に相反する場合には、結局、感情システムにおける判断のほうが優勢になるであろう。

地層処分に対する態度の形成においても、表面で事実の認識に基づく理性合理的な判断が行われているのと並行して、感情システムによる野生合理的な価値判断が潜行しているものと考えられる。そして、この感情システムによる野生合理的な判断が、地層処分に対する態度形成に多大な影響を及ぼすことになる。

したがって、地層処分などの公共的リスク施設に多大な影響を及ぼす野生合理的な「リスク」観を把握しておく必要がある。

野生合理的「リスク」観

生物の行動原理としてもっとも基本的なことは、自分の生存や繁殖に不適合かどうかを察知し、もし不適合であればそれを回避することである。不適合を察知するためには、現状の不適合を知覚することに加えて、将来に発生するおそれのある不適合を予測する能力も同等に、あるいはそれ以上に重要とな

る。したがって、生物の知能の主要な目的や興味の対象は、将来どのような不適合が発生しうるかを予測することである。この予測に失敗した場合、生物は種の拡大再生産の目的になにがしかの悪影響を被ることになる。悪影響を被り、その失敗から学習していくためには、からずどのくらいの悪影響を被ったのかを測定しなければならない。「リスク感覚」とは、このために高等生物が備えている感情認知機構であり、すなわち、自分の「行動目的」の達成のために準備した「将来予測」がどの程度のパフォーマンスを持っていたか、どの程度役立つものであったのか、役立たないものであったのか、を見積もる指標である。したがって、高等生物は「自分の予想に反して」「思いがけない」悪影響を受けたりすると、その予測失敗を「痛み」として痛感する。これが、野生合理的「リスク認知」である。

このように考えると、肉親の死のいたみにしても、朝元気に出かけていったのに不慮の事故で（本人になんの落ち度がなく、単なる偶然で）死亡した場合と、「危険を承知で」嚴冬期に冬山登山にいって遭難した場合、あるいは末期癌によってその死期が予めかなりの確からしさで「予測」できていた場合とでは、同じ人物が同じ時期に死亡したとしても、その「痛み」すなわちリスク知覚は、大きく異なることの説明がつく。なぜならば、癌による死期が判っていた場合はもちろんのこと、危険な冬山登山による遭難も、「危険な冬山登山に行って遭難してしまったのだ」という一応の説明がつく事柄であるからである。つまりリスク認知が、生命にとって重要な、将来の不適合を予測する能力を向上させるため、予測失敗の程度を測定するための感覚機能を考えると、上に述べた冬山登山の例は、「冬山登山には遭難という生存に関する危険が伴う」という将来予測については失敗していないからである。一方、たまたまいつもより一本遅い電車に乗ったために事故に遭遇したばかりには、「なぜ」「どうして死んでしまったの?」という強い負の感覚が、知覚されることになるのである。

このように考えると、「リスク」という概念は、その存在目的から、「自分が期待していた将来得べかりし価値が、不測の事態により喪失してしまった落胆に対する危惧」であり、「自分の行動目的の重要性（行動が達成されたときに得られる価値）」と「予測の裏切られ方」の双方が重要となるのである。このことから、野生合理的「リスク」観を構成している因子として次の項目が挙げられる。

- ①どの程度の損失を及ぼしうるか。（個人、集団の生命損失、生活基盤損失： 痛み、悼み）
- ②その損失が発生する確率はどの程度か。（事態推移の可能性、主観確率）
- ③その予測はどの程度確からしいか。そもそも予測可能か。（不確実性、理不尽さ： 不安全感）
- ④危険を回避したり、対抗したりする手段を取りうるか。（制御可能性）

感情と主観的価値観

価値とは、感情の強さ（あるいは重要性）の知覚である。自分の生存にとって価値のあるものほど、“美味しい”という強い感情を知覚するように、感情システムがプログラミングされている。

感情システムでは、この「価値観」を主要な媒介変数として生物の行動をコントロールしている。す

なわち、獲物を見つけて捕食したり、外敵を発見して逃走したりするための一連の行動シーケンスは、感情システムがその都度、支配感情を転換することによりうまく制御していく。獲物（正の価値）や外敵（負の価値）が大きいほど、強い感情が生起され、生物の敏捷な行動を促す。

感情は、Plutchikによれば、つぎの8類型で構成されている¹⁾。

「期待」「恐れ」「受容」「驚き」「喜び」「悲しみ」「誘惑」「嫌悪」「意欲」「怒り」この項目を、野生合理的な感情システムにおける感情の転換シーケンスとしてモデル化すると、図3. 3のようになる。またこれを意味的に整理したものを、下表に示す。

表 支配感情の転換シーケンス

	状況認知・評価	準備・内在化	体験・記憶	動機・外向化	行動管理
正の事象 (快の価値)	期待 [ベネフィット]	受容 (弛緩・解放)	喜び(安心)	誘惑(得意)	意欲 (包容・保護)
負の事象 (苦の価値)	恐れ [リスク]	驚き (緊張・閉鎖)	悲しみ(喪失)	嫌悪(卑下)	怒り (攻撃・排除)

この感情の転換シーケンスにおいて、獲物の正の価値は、「期待」感情により状況認知され、もしそれが予測通りならば（樹を見上げたら果物がなっていた）、「受容」感情がわき起こり、ついで「誘惑」に駆られ行動が決心され、「意欲」をもって行動が管理され、その結果成功すれば、「喜び」を味わい、その成功体験が強く記憶され、次回の行動戦略を修正する。同様に、外敵の負の価値は、「恐れ」感情（リスク認知）により状況認知され、もしそれが不測の事態ならば（突然、熊が現れた）、「驚き」感情がわき起こり、ついで「嫌悪」（および状況の不確定による不安）を感じ行動が決心され、「怒り」（および状況の不確定による不安）をもって行動が管理され、その結果失敗して傷つけば、痛みを伴う「悲しみ」を味わい、その失敗体験が強く記憶され、次回の行動戦略を修正する。

¹⁾ P. Plutchik, 情動立体モデル, 1981

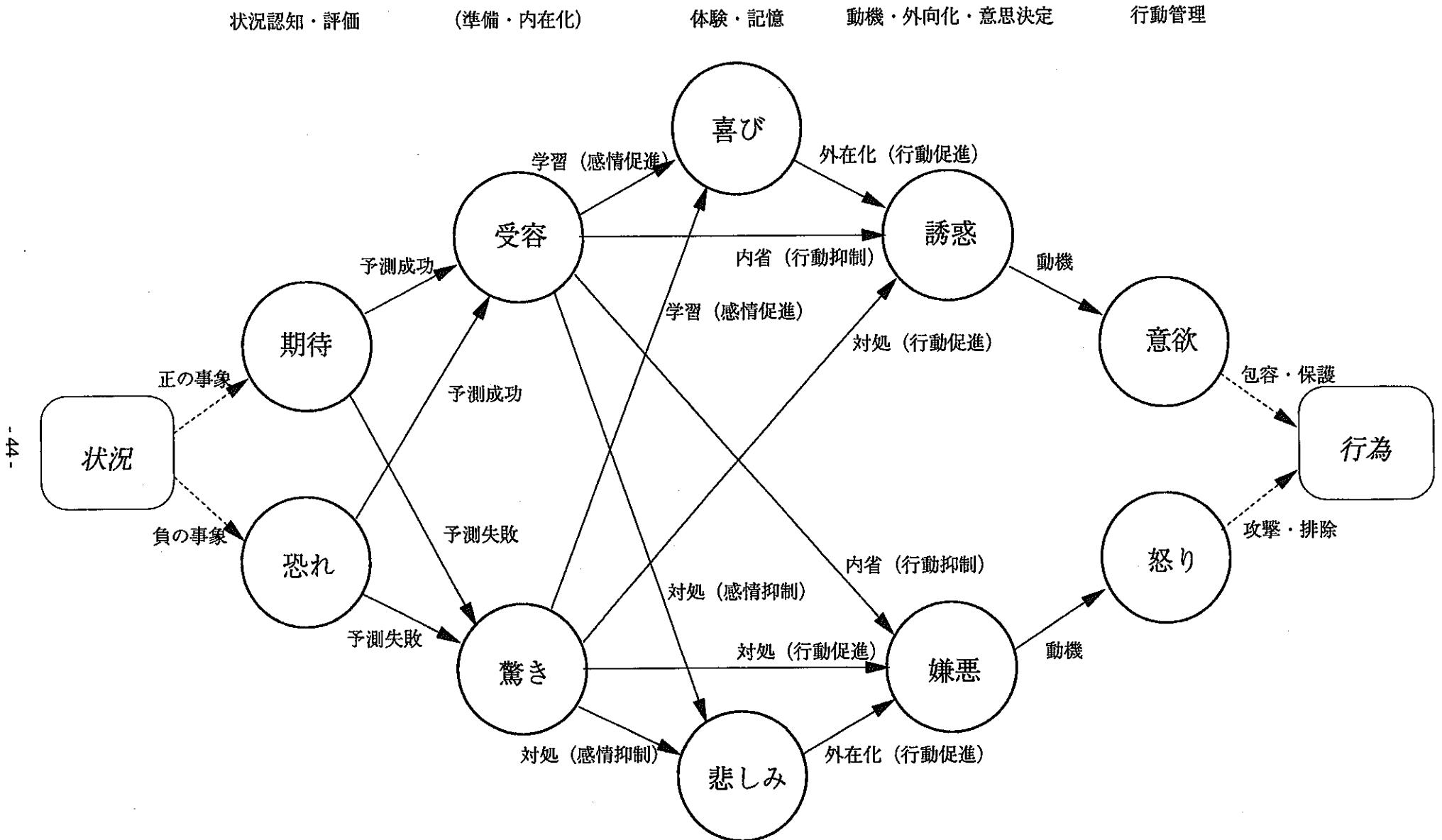


図3.3 感情システムの制御シーケンス

基本的価値類型

価値は、人間にとっては、獲物や外敵などの直截的なものだけでなく、より時間的、空間的な軸上で広範囲に価値づけられている。

見田¹⁾によれば、人間の価値観は、自己－他者（社会的空間）、現在－未来（時間）という軸で、下図のように整理できる。自己に関する価値の（予測）損失は利／害であり、他者の（予測）損失は正／邪となる。実際に被害を被ったり益を獲得した場合のより直接的な感覚が、快／苦、（他者のそれにとっては）愛／憎である。なお、自己損失（快／苦）は、肉体的な感覚として知覚される。他者のそれは、より高次の認知過程により知覚される。

		時間的位置	
		現在 (知覚・感性) 美／醜	未来（時間移動） (予測・理性) 真／偽
空間的位置	自己本位 幸／不幸（エロス） 生理的欲求 (生存・安全)	快／苦 [安心・喪失]	利／害 [不安・恐れ]
	社会本意（視点移動） 善／悪 社会的・自己実現欲求 (美・知・所属)	愛／憎 [安心・喪失]	正／邪 [不安・恐れ]

図 基本的価値類型

(3) 現代日本における一般的価値観の類型

（すなわち、地層処分に対する態度に影響を与える個人の主観的価値観の類型）

(2)で述べたように、広義の「リスク」観は、「自分が期待していた将来得べかりし価値が、不測の事態により喪失してしまう落胆に対する危惧」である。また、喪失の対象となる価値の類型は、時間的、社会的に広がりを持って存在している。

社会的に影響力の大きい技術システムのリスクは、社会の成員である公衆に様々な波紋を投げかける。この場合、ただ単に技術システムの持つリスクが個々人なりに受けとめられるだけでなく、もしその技術システムの存在が個人の主観的な価値観になんらかのかたちで抵触すると、より複雑で根の深い反応

¹⁾ 見田 宗介、価値意識の理論、弘文堂、1966

を引き起こすことになる（Raynerによる第3レベルの論争）。次に示す女性の独白¹⁾は、現代の管理社会の中での個人の自由や自己実現という価値への渴望が、原子力発電所をそのような管理社会と同一視させ、その結果反原発運動に参加させていく心理状態をよく表している。

ex) その頃私は、イラストレーターとフリーライターを半々にやってなんとかギリギリ、都心のボロアパートの4畳半で暮らしていた。仕事で描く絵は注文主の依頼に応じてあれこれと変わり、自分でも情けなくなるほどツマラない作品が多かった。「なんとかもっと遊びのある大胆な作品を描きたい」とは思っても、プロとして業界で生きていくには妥協はつきもの、そのうち力をつけたら好きなことをやれる時も来るだろう。一そなふうに自分を納得させていた。だが、日本中の原発のどこか一ヵ所でも重大事故を起こしたら、もう逃げるところはないという状況を知った時、すべての「いつか」は「いま」に変わったのだった。たったいま自由へと歩き出さなければ、誰かが自由にしてくれるのを待っていてもだめなのだ。（中略）一緒に描き始める人たち、共感の言葉をくれる人たちとの出会い。それは予想以上に自分を暖かい想いで満たしてくれるできごとだった。絶対に開かないと思った重い扉に、鍵がかかっていないのがわかった時のようにだつた。たとえその扉がまだ開いていなくても、扉を「開ける」イメージだけはこの日から心の中に生まれたのである。

このように、個人が抱いている主観的な価値観の内容によって、地層処分技術に対する受けとめ方も大きな影響を受けるものと考えられる。

原子力発電所や地層処分施設は、公共性の非常に顕著な技術システムであるので、個人のライフスタイルや政治的な価値意識がこれらの技術システムへの態度形成に直截、密接な相関関係を持つであろうことは、容易に想像できる。したがって、本研究において問題とする個人の主観的な価値観として、ライフスタイルや政治的価値意識を考える。地層処分施設の存在が、個人の（政治的）価値意識を何らかの形で損なう場合、それは強い価値喪失の「リスク」観として感受され、地層処分施設そのものの技術的风险と同一視されることになると考えられる。

脱物質主義

1970年代、経済成長や世代交代にともない、学生運動、平和運動、環境保護運動、女性解放運動などの社会運動を経て、先進産業諸国では、物質主義的・産業社会から脱物質主義的・脱産業社会へと

¹⁾ 三輪 妙子編、原発をとめる女たち、社会思想社、1990

価値観が変化した。こうした変化は、国内秩序や経済発展などに関する物質主義的価値から言論の自由、政治参加等に関する脱物質主義的価値への変換が説明できる¹⁾。すなわち、経済的豊かさの達成により物質的な飢餓感が解消し、全体戦争の不在は身体の安全を保障することから、1970年以降においては、これらの物質的な価値よりも、より高次の社会的欲求や自己実現欲求を含む脱物質主義的価値に関する欠乏感の方が切実になると想るのである。

こうしたなかで、政治的争点は、産業社会における経済問題に代わって、環境保護や生活の質や女性の役割と言った非経済的な争点が登場し、国民における争点が主として、経済的争点と非経済的争点に2極化する傾向が表れてくる（争点両極化仮説）。そして、このような志向を持ち、社会参加や自己実現を求める立つ物質主義者達は、エリートによる政治的動員よりも、直接民主主義的な政治参加様式を志向するか、現状の政治システムから距離を置く内向的な志向を持つようになる。

特に日本では、脱物質主義の志向は、革新政党支持へと変動するよりも、政治的無関心へと移行する傾向が強い。昨今の無党派層はその顕著な例である。

価値相対主義

ポストモダン現象の特徴を一言でいうならば、「小さな物語の氾濫²⁾」、すなわちさまざまな価値観の相対化が絶対化され、それと同時に、かつての価値秩序を支えていたコードの崩壊と組み替え、混合が生じたことである。古い権威がこの模倣を受容するに及んで、新旧の権威は、明確に対立することなく、共存する現象も生じた。この結果、他人の価値観には干渉しない、というディスコミュニケーションが生じた。

権威主義一自由主義

日本では、脱物質主義と並行して、権威主義から自由主義への変化もおこっているという観察もある³⁾。これは日本では社会、文化における伝統と近代化が交差しており、この移行が脱物質主義化と複雑に絡み合っているからである。権威主義的価値と自由人的価値は次のように対比できる。

権威主義的価値：禁欲、自己訓練、同調性、権威への献身

自由人的価値：自己放縱、世俗主義、独立性、自己主張

権威主義は、全体主義にも関係する。また、自由人的価値は、生活重視に通じるものである。

¹⁾ Inglehart, The silent revolution, Princeton University Press, 1978

²⁾ 石子順造ら、キッチュ1971：まがいものの時代、ダイヤmond社、1971

³⁾ S.C.Flanagan, Changing values in advanced industrial societies

政治的無関心（無党派層）

高度経済成長による所得の上昇と価値意識の多様化によって、青年の関心領域が多様化し、私的な領域の事項に关心を持つ青年が政治に関心を持たなくなることによって、全体としての青年の政治参加が弱まっていく、と考えられる¹⁾。

政治的無関心を構造化するために、政治的疎外意識という概念が導入されている²⁾。政治的疎外意識は、無力感、無意味、無規範、孤立、自己疎隔に整理される。

無力感：自分自身の行動が自分の期待実現に効力がない、という認知により生じる

無意味：個人が何を信じればよいか解らない状態

無規範：個人の行為を規制する社会規範は有効でなくなった状態

孤立： 社会で高く評価されている目標や信念に比較価値しか認められない

自己疎隔：行動が行動自体の外部にある報酬に依存している状態

このうち、政治的無力感と政治的無規範性が、因子分析により抽出されており、疎外意識の2次元構造として認められている³⁾。

政治的無力感：政治に対して個人が一定の影響力を行使しうる、という感覚

政治との関係における自己認識：無能力感、シニシズム

政治的無規範（不信感）：現状の民主的政治システムの正当性を決定する政府への信頼感
この体制への不信感が、政府、電力会社などへの不信として認知され、同一視されていく可能性がある。特に、最近の無党派層におけるこの傾向は世論に重要な影響を与えるものである。

		政治的無力感	
		高	低
政治的 不信感	高	極度離反型（全体主義的） 分離主義的・革命的 諸運動、 完全な引退	改革志向型（異議申し立て） 制度的枠組みの内部で 活動を維持する抗議集団
	低	無関心型（従属的） きわめて低水準の政治的関与	政治的統合型（民主的） 同調的参加

享楽主義とシニシズム

アイデンティティの確保にとって、いかなるスタイルでどのように表現するかが重要となるが、若者を中心に人々の関心は自己充足に向かい、おもしろさという新しい価値の登場と相まって、バブル期には享楽主義が広まった。遊びは元来、余裕と享楽の2面を持つが、人々は競って享楽に走った。まるでなにから逃げるよう、いそがしく、おもしろさを追いかけた。しかし、このような享楽主義は、一方では、70年代の社会運動の敗北と現実の重さを一時でも忘れないとの重いと切り放せなかい。そ

¹⁾ 三宅一郎、政治参加と投票行動－大都市住民の政治生活、ミネルヴァ書房、1990

²⁾ M.Seaman, On the meaning of alienation, American Sociological Review, Vol.24, 1959

³⁾ A.Finifter, Dimensions of political alienation, American Political Science Review, Vol.64, 1970

ここにはニヒリズムが見られる。さらに日本人にとってニヒリズムは厭世主義、シニシズムとほぼ同義で深淵さを欠く。シラケが常態となる。シラケながら、刹那主義的にわれを忘れ、憂き世をせめて楽しく生きようと享樂にふけるのである。もちろん批判の姿勢を保ち運動のネットワークをつくるひとたちはいた¹⁾。

生活保守主義（私生活主義）

有権者の政治的無力感が高まる一方で、生活や政治への不満は低下し、自民党の（消極的）支持率が上昇する、という矛盾した現象を説明するものとして、状況の背後に、保身性と批判性をあわせもつ新中間大衆の政治意識として生活保守主義が導入された²⁾。新中間大衆とは、自己の生活程度を「中流」と位置づける、国民9割にもおよぶ層であり、「豊かな社会」の恩恵を受け、大幅な変更は好まないが、即時的価値（あそび）に関わる私生活や余暇生活などが脅かされるばあいには、強い批判を表明する。

（裏庭問題）。

この傾向は、privatization³⁾と密接な関係がある。privatizationとは複雑化した社会生活や政治生活に対する自覺的対応として、人々が私生活に沈潜し、公共生活にたいして非活動的な生活様式となるようになる動向のことをいう。こうした動向は、集団への献身を重視する伝統文化から個人を開放する日本独特の個人主義的な価値変動であり、私生活重視の生活保守主義や、政治世界への傍観者的態度を表す観客民主主義とも類をなす、大きな価値変動の流れの1つの表れである。

またこうした動向の背景として、マスコミの発達や社会のシステム化による、直接的なコミュニケーションがある身内の世界と、マスコミュニケーションが造り上げた外界（何人も制御し得ない、「社会システム」）との2極分化が指摘できる。

私生活主義とは、社会のシステム化、管理社会化に対して示す、若者層の自己閉鎖傾向をいう⁴⁾。管理主義、競争主義の社会環境の中で、自分の将来に強い关心を持つ時期に入る若者ほど、そうした厳しい人間疎外の現実に拒否反応、防衛反応を示す。現在では、そのような社会システムを少しでも修正しようという方向に向かうのではなく、多くは、社会の中でのおのれの無力を感じ、他人や社会のことよりもまず自分の生活を考えようとする、自分主義、私生活主義の立場に近づく。これはシラケと自己閉鎖性という側面を持つ反面、他人のプライバシーに深入りするつもりはなく、だからこそ自分の領域に

¹⁾ 高橋勇悦・藤村正之編、青年文化の聖・俗・遊、恒星社厚生閣

²⁾ 村上泰亮、新中間大衆の時代、中央公論社、1984

³⁾ 丸山真男、個人析出のさまざまなパターン、岩波書店、1968

⁴⁾ 飯田哲也、浜岡正好編、人間性の危機と再生、法律文化社、1988

も深入りされたくない、という他の面の持っている。個々には、他人を犠牲にしてまで成り上がろうとは思わぬ、というかぎりで、偏狭なエゴイズムを否認する、たくみなバランス感覚として評価できる面もみられる。

社会のシステム化

後期産業社会では、自由と平等、すなわち民主主義の価値理念から発生する要求は、もっぱら「市場化」された社会共同体において処理されることになる。

しかし、「組織化」の側面では、産業化は依然として権威主義によって管理されている。地域社会生活社会、「自然発生的」な共同体とよぶ社会が徹底的に「市場化」すなわち大衆社会化していく過程に並行して、統治と産業化のための権力中枢は「組織化」の領域に移されていった。その結果、後期産業社会は、おしなべて民主主義が一応実現している大衆社会と、新しく統治・管理・産業化の担い手として登場した、権威主義によって統制される組織との間に、解決しがたい矛盾を生み出すようになった。この矛盾にはいくつかの側面がある。後期産業社会は、「将来中心、効率志向、仕事志向、社会的関心」などを特徴とする「手段的価値群」と、「現在中心、情緒志向、余暇志向、私生活中心」などを特徴とする「即目的価値群」との価値観の分極化をおしすすめている。

「市場化」・大衆社会・民主主義の領域で、人々は業績主義的競争の主役が本来、原理的にも実際的にも、一人一人の個人であることをますます強固に確信するようになっている。学校を卒業して就職するまで、人々は個人主義的なルールの世界、個人を主体とする業績ゲームの世界で生活する。それどころか、社会における行為主体がどこまでも個人であることは、自由民主主義の統治を正当化する基礎的な原理でもある。ところが就職して組織に所属したとたん、経済的領域における業績ゲームのプレーヤーはいまや個人ではなく、組織となってしまい、個人が阻害されるという問題点を生み出す。

甘えの構造¹⁾（内と外）

遠慮の有無は、日本人が内と外という言葉で人間関係の種類を区別する場合の目安となる。遠慮がない身内は文字どおりうちであるが、遠慮のある関係は義理である。この遠慮が働く人間関係を中心体とすると、その内側には遠慮がない身内の世界、その外側には遠慮を働く必要のない他人の世界が位置する。一番内側の世界と一番外側の世界は、無遠慮であるという点で一致する。しかしながら、身内に無遠慮であるのは甘えていて隔てがないためであり、外に対しても隔てはあるがそれを意識する必要がないので無遠慮となる。

¹⁾ 土居 健郎、「甘え」の構造、弘文堂、1995

これらは心理学的に分析すると、母性原理として説明される。若者を中心としたの私生活主義も同じ構造を持っている。

父性原理：論理的・意識的、 現実原理、自立、 能動的・主体的、社会公共的、

母性原理：イメージ的・感覚的、快楽原理、依存・甘え、受動的・同調的、自己愛・自閉的、

現代日本における一般的価値観の類型のマッピング

以上見てきたように、現代の日本社会においては、様々なライフスタイル、政治的価値意識が存在するが、これらは、次の2つの軸に整理できる。

①向システムー反システム

現代の先進産業化社会は、社会全体が高度にシステム化されており、その中で個人の存在が希薄になっている。脱物質主義や私生活主義は、こうした文脈から出てくるものである。ここでは、社会システムを積極的に受け入れ自分の自己実現の場とするか、システムの外にある「自然」に自己実現を求めるかに分かれている。

②内向的個人主義ー外向的対自主義

現代の日本社会は、伝統的権威主義が崩壊し、社会がシステム化することにより、個人は、伝統的なうちとそとの境界が消滅しつつある社会の流れの中でアトム化にさらされている。ここで、父性原理に基づく自立に向かうか、または母性原理に基づく相互依存に向かうかの岐路に直面している。

この2つの軸は、(1)で整理した個人の主観的価値類型のどのセクションを重視するかという現代日本の一般的価値観の相違（類型）と対応づけることが出来る（図3. 4）。

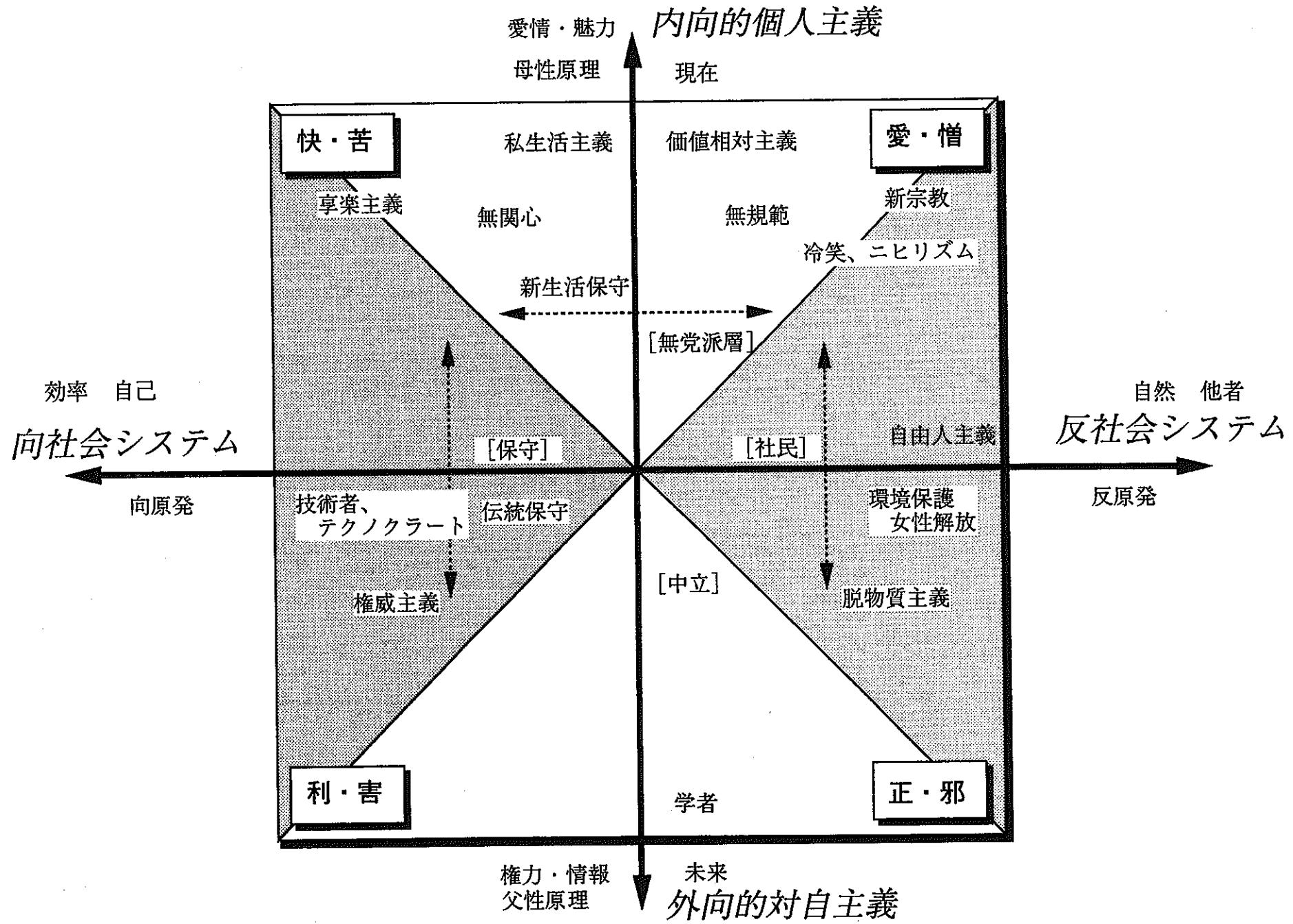


図3.4 價値類型と政治価値意識との対応付け

(4) 地層処分がその側面として持つ主観的価値項目

地層処分がその側面として持つ主観的価値項目を以下のように設定する。これは、地層処分という社会的な存在が、(3)で設定した現代日本の一般的な価値類型の中で、どのような価値項目に相当する側面を持っているか、という観点で抽出したものである。

- ①社会的な難儀
- ②不特定多数の全体責任
- ③権威者のトップダウン的決定
- ④不公平
- ⑤計画的な後始末
- ⑥必要悪
- ⑦社会システムの受容（依存・共生・包摶／自立・対峙・権力）
- ⑧物質主義／脱物質主義
- ⑨権威主義・絶対価値／自由人主義・相対価値
- ⑩科学・理性・合理性／超自然・感性・超越性

4. 意識構造モデルの基本的枠組み及び要素の妥当性の確認

4. 1 ヒヤリングによる確認事項

3章で設定した意識構造モデルの基本的枠組み及び要素の妥当性は、ヒアリングを通じて確認した。妥当性の確認に際しては、確認項目として以下の7項目を考慮した。

- (1)地層処分に対する態度
- (2)事実関係に関する基本的認識
- (3)事実関係の認識の態度への影響
- (4)事実関係の認識間の相互関係
- (5)主観的価値項目に対する判断内容
- (6)主観的価値項目に対する判断内容と地層処分の事実関係の認識との関係

以下に項目毎の内容の概略を記す。

- (1) 地層処分に対する態度
 - ・態度類型と態度の内容
地層処分に対する基本的な態度（賛成、反対）とその内容（付帯条件）
 - ・NIMBYに対する態度
裏庭問題（処分場の自宅付近への建設）に対する態度
- (2) 事実関係に関する基本的認識
 - ①影響項目の認知の有無
 - ・態度への影響項目（事実関係の認識）と事実関係の認識に対する主観的判断の可否
 - ②高レベル廃棄物処分の必要性
 - ・必要性に対する事実認識の相違（オルターナティブ）の分類と相違点
 - ③地層処分技術の適切性
 - ・適切性に対する事実認識の相違（オルターナティブ）の分類と相違点

④ 問題との距離

- ・地層処分問題と自分との直接的あるいは間接的関連性を示す内容

⑤ 地層処分のメリット、デメリット

- ・メリット認知の項目の一覧、内容、程度（社会的重要性／個人的重要性）

⑥ 社会的不公平

- ・社会的不公平認知の項目一覧、内容、程度（社会的重要性／個人的重要性）

(3) 事実関係の認識の態度への影響

事実関係の認識の地層処分問題に対する基本的態度への影響

- ① 高レベル廃棄物処分の必要性の態度への影響
- ② 地層処分技術の適切性の態度への影響
- ③ 問題との距離の態度への影響
- ④ 各地層処分のメリット、デメリット認知の態度への影響
- ⑤ 社会的不公平認知の態度への影響

(4) 事実関係の認識間の相互関係

事実関係の認識間で影響している内容

- ① 高レベル廃棄物のリスク認識
- ② 原子力発電の積極的支持
- ③ 問題における個人の得失（1）
- ④ 地層処分の積極的メリット
- ⑤ 問題における個人の得失（2）
- ⑥ 地元と都会人の見解のギャップ
- ⑦ 社会性と公共意識

(5) 主観的価値項目に対する判断内容と地層処分の事実関係の認識との関係

以下の主観的価値項目と地層処分問題に対する事実認識および主観的判断項目との関係

- ① 社会的な難儀
- ② 不特定多数の全体責任
- ③ 権威者のトップダウン的決定

- ④不公平
- ⑤計画的な後始末
- ⑥必要悪
- ⑦社会システムの受容（依存・共生・包摶／自立・対峙・権力）
- ⑧物質主義／脱物質主義
- ⑨権威主義・絶対価値／自由人主義・相対価値
- ⑩科学・理性・合理性／超自然・感性・超越性

4. 2 ヒヤリングの方法

(1) 第1回ヒヤリング

[概要]

第1回のヒヤリングは、被験者の地層処分に対する価値判断の流れを、逐一、順序立てて聞き取っていくかたちで実施する。これは、一種のKnowledge Engineeringにおいて行われる専門家からの知識獲得の方法に類似したものである。また得られた結果は、本人が対象問題に対して抱いている一種の意味ネットワークとみなすことが出来る。

基本的には、分析者側から提供する材料を最小限にし、分析者は聞き役に徹して、”それは何故ですか？”というような問い合わせできる限り繰り返すことにより、本人が考えている項目を網羅的に引き出していく。このようにして、地層処分に対する態度に至る理由や根拠等、価値判断の流れを掘り下げていくことで、それらの流れは樹形図上に拡がっていき、その末端では、本人の基本的な考え方である世界観に関する項目が現れると考えられる。こうしたヒヤリング方式により、被験者の地層処分に対する価値判断の1次データを収集する。（その価値判断の背景にある一般的価値観は、第2回ヒヤリングのテーマとなる。）

[目的]

このヒヤリングの第1の目的は、被験者の「態度」－「影響項目認知」－「価値判断」の流れを把握し、先に設定した枠組みに基づいて整理するために行うものである。さらに、その背景となる世界観につなげられる様なような手がかりを得ることが、2番目の目的である。

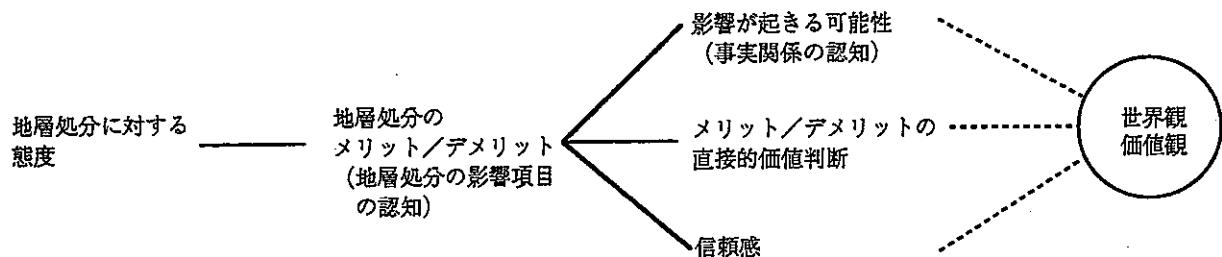
[方法]

方法としては、”なぜ(why)” や”どのように(how)” という関係代名詞で本人の考えを掘り起こしていくが、この段階ではあまり厳密な枠をはめずに、分析者が重要だと思う観点で多様な意味の”なぜ” や”どのように” を使用して、問題を深めていくことが望ましい。とにかく、第1、第2の目的を達成できればよい。

ヒヤリングは原則的に、上で述べたように被験者のフリーハンドによる詳述を基本とするが、ヒヤリングを系統的に進めることで目的の達成が保証されるように、一応の手順を設けておく。

ヒヤリングは、次ぎのような項目、手順で系統立てて進めていく。

- ・地層処分に対する態度
 - ・地層処分のメリット／デメリット（地層処分がもたらす影響項目の認知；分析の単位となる）
 - ・メリット／デメリットが起こる可能性（事実関係の認識）、（およびその背景となる価値観、世界観）
 - ・メリット／デメリットの価値判断、（およびその背景となる価値観、世界観）
 - ・信頼感、（およびその背景となる価値観、世界観）
- すなわち、これらの系統は、議論を掘り下げていくためのタネである。



[地層処分に対する態度]

質問表現：“地層処分とは、どのようなものか、今後どのように進めていこうとしているのか、について、だいたいのところをご理解いただいたとは思いますが、こうした地層処分をやっていくことに賛成されるか、あるいは反対されるか、ご意見をお聞かせ下さい。”

前提条件： 地方に処分場を建設するとして、東京に在住している現在の自身の立場そのままで答えてもらう。

分析：・基本的に、放棄、不決定、保留、条件付き賛成／反対、中立、賛成／反対に分類する。

特に、放棄、不決定、中立は、「よく判りません」という同一の言葉で表現されるので、注意深く分類することが必要である。

・この段階でも、地層処分問題に対する距離感を把握しておく。

[地層処分のメリット／デメリット（影響項目の認知）]

地層処分のメリット／デメリットは、結局のところ、地層処分を実施することが、個人／社会にとって、どの点でどのくらい良いのか／悪いのか、を明らかにするものである。

また、問題に対する距離感や、価値判断に関する不確実さも同時に聴取する。

質問表現：“いま、地層処分に対するご意見を伺いましたが、どのようなことを考えてそのような判断をされたのか、をお聞きしたいと思います。ばく然とお聞きするとお答えになり

にくいと思いますので、地層処分をするとどのような良いことがあるのか、あるいは悪いことがあるのか、また反対に地層処分を行わないとどのような良いことがあるのか、あるいは悪いことがあるのか、思いつくままで結構ですので自由にお答え下さい。良いこと、悪いことは、具体的なことがらでも、ばくぜんとした感覚的なことがらでも結構です。”

一通り列挙してもらう。

”もう、他にはございませんか。そうしましたら、はじめの「放射性物質が地下から染み出す」ということについて伺います。こういうことがありうる可能性をどのようにお考えになりますか？次のうちのどの表現が適当でしょうか？”

一からずそういうことが起きる。

一かなりそういうことが起きる可能性がある。

一わりとそういうことが起きる可能性がある。

一ひょっとするとそういうことが起きる可能性がある。

一何とも言えない。

一わからない。

”この「放射性物質が地下から染み出す」ということは、どの程度悪いこと（良いこと）だと思いますか？次のうちのどの表現が適当でしょうか？”

一とても良いことである。

一わりと良いことである。

一どちらかといふと良いことである。

一良くも悪くもない。

一どちらかといふと悪いことである。

一わりと悪いことである。

一とても悪いことである。

一わからない。

”では、この「放射性物質が地下から染み出す」ことは誰にとっての悪いこと（良いこと）なのでしょうか？”

回答表現：影響項目の表現は、次のように統一する。

”それは、地層処分により、・・・・が、～～～となるからです。”

ex) ”それは、地層処分により、高レベル廃棄物が、処分できるからです。”

ex)" それは、地層処分により、放射性物質が、地下から染み出すからです。"

ex)" それは、地層処分により、放射能に対する不安な気持ちが、沸き上がって
くるからです。"

分析：・地層処分問題で認知している影響項目を抽出する。

- ・抽出された影響項目が、予め想定された区分（表*）に分類されうるか、確認する。
- ・影響項目に対する距離感を（質問に対する全体的な考え方や、熱心さを通して）把握する。
- ・影響項目の認知に伴う不確実感を（影響発現の可能性の認識として）把握する。
- ・影響項目に関する価値判断を把握する。

[メリット／デメリットが起こる可能性（事実関係の認識）]

質問表現：“なぜ、「放射性物質が、ひょっとすると、地下から染み出す、可能性がある」と思う
のですか？ その根拠のようなものがあれば聞かせて下さい。”

(例えば、“地下水があるから”、と応えたとする)

”これとは別の根拠が、まだありますか？”

(例えば、「なぜ、ひょっとすると、なのか？」など)

”では、なぜ、「地下水がある」と思うのですか？ その根拠のようなものがあれば聞
かせて下さい。”

”（「地下水がある」について）これとは別の根拠が、まだありますか？”

(例えば、“地下に地下水があるのは当然じゃないですか？”，と応えたとする)

”では、地下水があると、なぜ（どのように）、放射性物質が、地下から染み出す、と
思うのですか？”

分析：・影響項目の認知に至る事実関係の認識を把握する。

- ・事実関係の認識の背景にある、通念、信念、世界観、価値観を抽出する。

[メリット／デメリットの価値判断]

質問表現：“なぜ、「放射性物質が地下から染み出すことは、地上の住人に対して、とても悪いこ
と」と思うのですか？ その理由について、お聞かせ下さい。”

(例えば、“住人に対して、健康影響が出る”、と応えたとする)

”「放射性物質が地下から染み出すことは、地上の住人に対して、とても悪いこと」と
思う理由は、「住人に対して、健康影響が出る」からだけですか？もう他にはあります

せんか？”

(例えば、”将来の子孫に対して、健康影響が出る”、と応えたとする)

”なぜ、「将来の子孫に対して、健康影響が出る」ことがとても悪いことと思うのですか？その理由について、お聞かせ下さい。”

注意事項：価値観に関する質問は、”なぜ、それが悪いのか／良いのか”と問い合わせ続けることにより、その人の基本的な世界観をうまく引き出せるようにすることが大切である。そのためには、”なぜ”の意味をその時の言説の意味を考えて、多様に解釈し使い分けていくことが必要である。

分析：・影響項目の価値判断に至る、通念、信念、世界観、価値観を抽出する。

[信頼感]

質問表現：“「放射性物質が地下から染み出す」ことを少なくするよう（高めるよう）努力するとして、その効果について信頼することができますか？次のうちのどの表現が適当でしょうか？”

ーとても信頼できる。

ーわりと信頼できる。

ーどちらかというと信頼できる。

ーどちらでもない。

ーどちらかというと信頼できない。

ーわりと信頼できない。

ーとても信頼できない。

”それは、誰が、どのように信頼できる（信頼できない）からですか？”

”それは、何故ですか？”

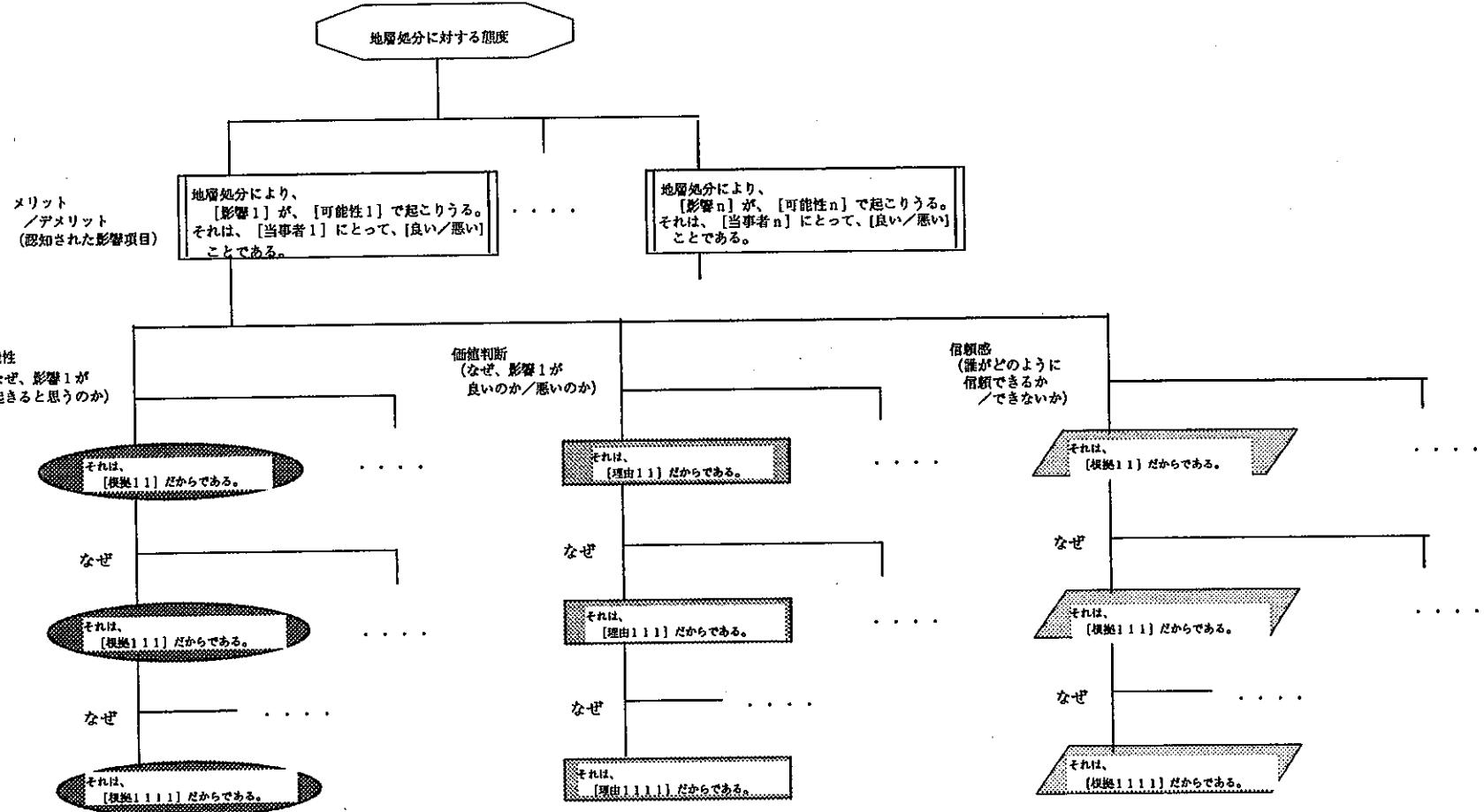
”他に、重要なのは誰ですか？それは、どのように信頼できる（信頼できない）ですか？”

”それは、何故ですか？”

分析：・影響項目の価値判断に伴う不確実性への賭けである、信頼、不信の根拠を抽出する。

・その信頼、不信の根拠の背景としての通念、信念、世界観、価値観を抽出する。

図 第1回目のヒヤリングの結果得られる、事実関係の認識に対する意味ネットワーク



(2) 第2回ヒヤリング

[概要]

第1回ヒヤリングは、事実関係に対する認識、および認識の根拠への本人説明内容から、その背後に暗黙の前提事項として置かれている一般的価値観への手がかりを得ることが2番目の目的として行われている。

第2回ヒヤリングでは、この価値観の手がかりをもとに、まず価値観を客観的事実認識と混同しないように注意深く分離し、その価値観が、予め想定した枠組み上でどのように分類されるのかを詳しく聞いていく、という作業を行う。

暗黙の前提事項である価値観の抽出には、分析者の恣意が結果に影響する可能性が高いため、注意が必要である。このため、上記の根拠として収集された短文と、抽出した価値観との対応付けを行うことにより、分析の客観性を示していく。さらに、抽出結果を本人に提示し、それが本人の認識に沿ったものであるかどうかの確認も行う。

第2回目のヒヤリングは、このように、分析者による分析結果の確認と、確認した上でさらに詳細な意識内容の調査、という位置づけで行われるものである。

[目的]

- 1.地層処分に対する態度の形成に影響を与えると考えられる対象者の一般的な価値観を把握する
- 2.対象者の一般的な価値観がどのように地層処分に対する態度につながっているかを探る
- 3.地層処分に対する態度および事実認識を、あらかじめ用意した評価枠組みにより整理する

[質問構成]

- a.一般的価値判断に関する質問 (主として、目的1.)
- b.地層処分に対する意見の整理 (主として、目的3.)
- c.一般的価値判断と地層処分との連想 (主として、目的2.)

a. 一般的価値判断に関する質問

[質問概要]

- ・日常生活において直面する価値判断で、地層処分に対する主観的価値判断と密接な関連があると思われる判断項目を用意する（これをトピックスと呼ぶ）

- 地層処分に対する主観的価値判断は、「やっかいなものを処分すること」や「誰か権威のある人の決定に従うこと」など、種々の別個の判断項目を包含しているものと考えられる。そこで、各個別の判断項目を特徴的に述べるようなトピックスを用意し、そのトピックスに対する判断を聞く。
- 日常的な価値判断といつても、地層処分との関連を見るにあたっては、それらを総合的な政治意識のマップ上に位置づける必要がある。したがって、トピックスは、地層処分に対する価値判断と密接に関わりのあるものであるとともに、政治意識の類型とも密接に関わりのあるものであるものを設定する必要がある。
- ・各トピックスについて、価値の基本類型である「快苦」「利害」「愛憎」「正邪」のそれぞれを重視した場合の判断内容を提示し、対象者に選択してもらい、対象者の価値判断様式を把握する

[趣旨] (読みとること)

- ・日常生活におけるトピックスに対する対象者の判断を把握し、対象者の地層処分に対する判断を形成する下地となる日常的な価値観を把握する
- ・日常生活におけるトピックスに対する対象者の判断を把握し、対象者の政治意識を形成する下地となる日常的な価値観を把握する

[質問項目]

1. やっかいなものを処分すること
2. みんなに責任があること
3. 誰か権威のある人が決めること
4. 不公平なこと
5. 計画的にものごとを進めること、ものの始末をすること
6. 必要悪なこと
7. 社会システムの受容
 依存・共生・包摂／自立・対峙・権力
8. 物質主義／脱物質主義（効率／自然）
9. 権威主義・絶対価値／自由人主義・相対価値
10. 科学・理性・合理性／超自然・感性・超越性

b.地層処分に対する意見の整理

[質問概要]

- ・地層処分に対する意見について、前回聴取したチャートを提示する
- ・地層処分に対する対象者の態度についてあらかじめ用意した評価枠組み上で定位し、確認をとる
- ・地層処分問題に関して対象者が感じる距離について、あらかじめ用意した評価枠組み上で定位し、確認をとる
- ・地層処分の影響項目の認知について、あらかじめ用意した評価枠組み上で定位し、確認をとる
- ・地層処分の影響項目に対するメリット、デメリットの判断について、あらかじめ用意した評価枠組み上で定位し、確認をとる

[趣旨]

- ・地層処分に対する対象者の考えを、チャートを再提示することにより、再活性化する
- ・地層処分に対する対象者の態度について、把握、整理する
- ・地層処分問題に関して対象者が感じる距離について、把握、整理する
- ・地層処分の影響項目の認知について、把握、整理する
- ・地層処分の影響項目に対するメリット、デメリットの判断について、把握、整理する

c.一般的価値判断と地層処分との連想

[質問概要]

- ・a.で用いた質問用紙を再提示し、各トピックスと地層処分問題との関連で連想することを、単語としてあげてもらう
- ・それらの単語に関して、その意味内容を口頭で説明してもらう

[趣旨]

- ・地層処分に対する考えが一通り再活性化されたところで、本人の意識の中での、地層処分と一般的トピックスとの意味的な関連性を推定するための手がかりを得る
- ・同様に、地層処分と政治意識との意味的な関連性を推定するための手がかりを得る

4. 3 ヒヤリング結果の整理

(1)主婦の分類

ヒアリング対象とした主婦の特徴は次の通りである。

- ・年齢 : 30~40歳
- ・居住 : 東京都西部区内（大田、目黒、世田谷、杉並）
- ・職業 : 専業主婦（パートあり）
- ・学歴 : 短大卒以上
- ・家族 : 夫（サラリーマン）、子どもあり
- ・宗教 : なし
- ・人数 : 11人

なお、ヒアリングに当たっては、平成6年度同様に、原子力に関する基礎的な資料と地層処分研究開発に関するビデオを被験者への情報源に用いた。

ヒアリングに際して、主婦の一般的な特徴を見るために事前に性格検査を実施した。この検査は、専門業者が実施しているものを利用した。

性格は、次の4項目の組合せで分類されている。

- ①興味関心の方向： 外向的（E）－内向的（I）
- ②ものの見方 : 実践・現実的（S）－理論・独創的（N）
- ③判断の仕方 : 論理・分析的（T）－感情・情緒的（F）
- ④環境への接し方： 判断して対応（J）－臨機応変（P）

各項目で、どちらの傾向が強いかを記号で示すことにより16通りの性格分類がある。主婦11人の性格分類の内訳は次の取りである。

I S T P	I S F P	I N T P	I N T J	E S T P	E S F P	E N T P
3	2	1	1	2	1	1

これらの分類では、②がS、④がPに該当する人が11人中8人である。

この結果だけから即座に主婦の特徴付けを行うことは難しいが、ヒアリング対象者に共通する特徴としてまとめると、

- ・良い面から言えば、物の見方は現実的で、環境への接し方には柔軟性がある。
- ・悪い面から言うと、物事を深く考えず、その場だけの対応になる。

となる。つまり、"現実生活を、いかに旨く過ごすか"ということであろうか。

(2)ヒアリング結果

1回目のヒアリングで地層処分問題に対する論点の意味ネットワークを作成した。参考として、図4.1に主婦Dの意味ネットワークの例を示す。この図を基に、2回目のヒアリングで地層処分問題との距離を調べた。また、2回目のヒアリングでは、日常的な問題における主観的価値と地層処分問題の主観的価値における共通点を調べた。2回目のヒアリングのシートおよびヒアリング内容は参考資料Iとして添付した。

1、2回のヒアリングの結果を基に、各論点のつながり（意味ネットワーク）を意識構造モデルの基本的枠組み（態度－事実認識－主観的判断項目－主観的価値項目－論点、図4.2参照）に置き換えて整理した。表4.1に整理結果の1例（主婦D）を記載した。意味ネットワークの中で言及されていない事実認識については、表中から省略した）全被験者の結果は参考資料IIに添付した。

なお、図4.2、表4.1中の「コミュニケーションの実質」については、5章で説明する。

(2)地層処分に対する態度

2回のヒアリング結果から、地層処分問題に対する態度、表4.2に整理した。裏庭問題（NIMBY問題）に関する論点も並記した。また、情報提供メディアであるビデオへの反応に関する論点もつけ加えている。

基本的な態度は、

- ・賛成 : 3人
- ・条件付き賛成 : 2人
- ・仕方ない : 3人
- ・条件付き反対 : 3人

である。ただし、地層処分問題の論点の内容を見ると、"賛成"も積極的賛成は、主婦Aだけといえよう。"条件付き賛成"と"仕方ない"には、後者がやや消極的な表現である点を除けば、大き違い

はなく、共通して安全性での不安を挙げている。”条件付き反対”も、現状での安全性に不安を感じての反対である。

地層処分問題は、都市の主婦に取ってみれば極めてなじみのない問題であり、ビデオの提供情報に対して、安全性をどのようにとらえているかの違いが態度に現れると考えられる。”仕方ない”と”条件付き反対”の違いも同様である。

NIMBY問題では、地層処分に”賛成”、“条件付き賛成”あるいは”仕方ない”でも、問題に言及した7人のうち主婦D以外の6人(A、B、E、G、H)は、建設反対の意見を述べている。やはり”裏庭は反対”となる。

ビデオに対する反応では、”賛成”(B)、“仕方ない”(H)、“条件付き反対”(I、J、K)の5人が、「安全面しか述べていない」ことを疑問や反対理由に挙げている。

(3)事実関係に関する基本的認識

全被験者の事実関係に関する基本認識を表4.3に整理した。表中の内容は、ヒアリング結果を基本的枠組みに当てはめた結果から、各々の事実関係を左右している骨子を抜き出したものである。

①影響項目の認知

まず、態度への影響の面から見ると「生存に関するメリット」、「政治・社会のメリット/デメリット」を認めているのは、11人中3人である。前者は原子力の必要性・恩恵、後者は地元の不公平や反対運動を挙げている。両方とも同一人がほぼ同じ内容で認めている点は、原子力の恩恵の認識と地元の不公平の認識には関連があるものと考えられる。

「経済・産業のメリット/デメリット」は、わずかに1人だけである。確かに、この影響項目(例えば、地域振興等)は都市部の主婦層にすれば、あまりなじみないことではある。

②高レベル廃棄物処分の必要性

「高レベル廃棄物処分の必要性」は、地層処分問題への態度を強く寄与している影響項目である。この項目以外は、全て地層処分にはマイナス要因を含んでいる。このため、仮にこの項目が認識されなければ、地層処分は反対となってしまう。態度を決めるには、当然、「高レベル廃棄物処分の必要性」必要条件となるが、認識の内容を見ると”賛成”と”仕方ない”では差がないことから、他の項目の認知も影響していることも考えられる。

「高レベル廃棄物処分の必要性」の判断項目の中心は、「高レベル廃棄物の閉じこめ」、「高レベ

ル廃棄物による放射能汚染」である。前者では「放射能リスクの緩和」、後者は、「放射能リスク」が主観的価値項目となる。その他、「高レベル廃棄物の発生経緯の理解」から原子力発電の恩恵や推進者への信頼も判断項目にはなるが、やはり強く意識されるのは、「放射能リスク」に係わる判断項目であり、「高レベル廃棄物の閉じこめ」、「高レベル廃棄物による放射能汚染」となる。従って、「高レベル廃棄物処分の必要性」には、「高レベル廃棄物による放射能汚染」の認識と「高レベル廃棄物の閉じこめ」の理解が重要になっていく。しかし、これらを主婦が独自に判断することは難しく、やはり何らかの情報を基に判断することになる。情報を基に判断する場合には、情報内容だけでなく、提供する人や組織、提供の方法といったことまで判断項目となり、本来の「放射能リスク」と「リスクの緩和」の重みも薄れてしまう場合もある。このような認知過程が「高レベル廃棄物処分の必要性」の基本的認識で「安全性」「閉じこめ」ではなく「信頼」を挙げた主婦の例（A、B）と考えられる。

③地層処分技術の適切性

「地層処分技術の適切性」では、一部には技術者への不信とも見られる主観的判断もあるが、むしろ人工バリアや処分場の長期の健全性や安全性、将来予測の難しさや想定外事象等の発生といった技術面の不適切性を判断項目に挙げている。ここで、技術的な安全性について論じられていないわけではない。ただしそれは、他の手段との比較での相対的な安全性であり、技術の適切性では地層処分自体の絶対的な安全性での不安を論じている。

不適切性の判断を生じさせている原因の一つに、1995年1月の阪神大震災が挙げられる。震災では、（公衆にとっては）想定外の場所であったこと、地震が予知の問題や耐震基準の問題等も採り上げられた。公衆の技術や専門家への信頼が低下した面もあった。このため、地震や地殻変動が処分場の健全性を損ない、しかも地震は予測できないという懸念を持つ人が多い。さらに、放射能が極端に長期に残存するイメージから、放射能の永続的影響に対する施設の長期間の健全性の不安を判断項目とする事になっている。

④地層処分のメリット（ベネフィット）／デメリット（リスク）

①でも、記したが地層処分に関連してメリットもしくはベネフィットを認識する人は少ない。また、メリットの認識であっても、地層処分が主ではなく、"原子力は必要なので、地層処分も仕方がない"という文脈になる。つまり、地層処分に関しては、都市部の主婦は積極的なメリットを感じることはないと推測される。逆にデメリットに関しては、原子力発電所同様に、生存に係わる項目として「放

射能の健康影響」を1人を除いて、判断項目としている。しかし基本的認識の内容からは、地層処分への態度と「放射能の健康影響」に相関は見られないようである。賛成だからといって、「放射能の健康影響」を軽視しているわけではない。

「生活環境でのデメリット」については、8人中6人（A、D、E、F、H、J）が地層処分が何らかの形（建設、核廃棄物、深地下の掘削）で自然破壊につながること認識している。平成6年度でもやはり、ビデオから大規模な開発をイメージし、自然破壊がデメリットとして意識されていたが、ここでも同様な結果（自然破壊）を示すことになっている。しかし、本結果では大規模開発というより「地層に人工的に手を加えること」が自然破壊の論点であり、たとえ小規模であっても自然破壊という判断項目は残るとものと推測される。

⑤問題との距離

「地層処分問題との距離」であるが、都市の主婦にとって地層処分自体が極めてなじみがないこと、地層処分場が存在しないこと、かなり先の話であること、都市にはできないこと等が相まって、地層処分問題と自分との関係を直接的にも間接的にも認識することは難しいようである。表中には、直接的であれ、間接的であれ地層処分への関心あるいは関連として述べたと考えられる論点をまとめている。「地層処分問題との距離」を考えるには、不適切な内容もみられる。ヒアリングの方法にも問題はあるが、やはり認識が薄いことの現れかと思われる。ヒアリングでは、通常のごみ処分場の建設を対比させて、相対的な距離を調べてみた。ごみ処理場への関心は、東京都のごみ処理場問題への認識から大きくなっている。これに対して地層処分への関心は、ごみ処理場と同等かそれよりやや関心が少ない程度との回答が多いものの、実際にどのような点での関わりを意識しているかと言えば、明確にはなっていない。

(4)事実関係の認識の態度への影響

(3)①でもふれたが、地層処分問題に対する態度は、「処分の必要性」の主観的判断と「技術的な不適切性」、「生存のデメリット（リスク）」、「生活環境のデメリット」の主観的判断のバランスにより決まっていると考えられる。日常的な問題に関する情報認知の過程では、その問題の身近さやなじみの深さも態度の決定に影響するが、地層処分問題に関しては、「問題との距離」はあまりにも大きいため、態度への影響を測ることが難しくなっていると考えられる。このほかにも、地層処分問題には特殊性がある。「放射能リスク」があらゆる事実関係の基本認識の主観的価値項目に含まれることである。地層処分問題への態度を決定する際に、「処分の必要性」、「技術的な適切性」、「生活

環境のデメリット」に関しては、「放射能リスク」を除けば、日常的な問題での主観的判断と同様な判断を下すものと考えられる。しかし、「生存のデメリット」では「放射能リスク」が中心となるため、他の事実関係の認識の主観的判断とは区別して考える必要がある。

(5)事実関係の認識間の相互関係

地層処分問題への態度では、基本的な認識として「生存のデメリット（リスク）」を持ち、その上で「高レベル廃棄物の処分の必要性」が態度を左右し、「技術的な適切性」が認識の内容により「必要性」へのプラスやマイナスとなるものと考えられる。「生活環境のデメリット」は、NIMBY問題の場合でなければ、「技術的な適切性」より遠い事実関係の認識となり「必要性」へ影響は小さい。NIMBY問題では、「生活環境のデメリット」の主観的価値項目に「放射能リスク」が含まれてくることと、「問題との距離」が小さくなることから、「技術的な適切性」より影響が大きくなり、しかもそのマイナス効果は「必要性」を打ち消してしまうほど大きな物となり、結局態度は、”反対”に変わることになる。

(6)主観的価値項目に対する判断内容と地層処分の事実関係の認識との関係

NIMBY問題では特に主観的価値項目として「放射能リスク」がクローズアップされる。しかし、都市部の主婦の「地層処分問題への態度」では、前述したように基本認識として「生存のデメリット（リスク）」は持つにしても、その中の主観的価値項目「放射能リスク」だけが、態度を決定する価値項目ではなく、「高レベル廃棄物処分の必要性」での価値項目や「技術的な適切性」の価値項目が影響している。地層処分のメリット（ベネフィット）の影響は小さいとして良い。

これらの価値項目は、「放射能リスク」を除けば、日常的に物事を決める上での主観的価値項目と同じと考える。そこで、ヒアリングで得られた日常的な問題と地層処分問題との連想結果を基にして、日常問題での主観的価値項目では地層処分問題はどのような価値判断や事実関係の認識がなされるのかを整理した。ヒアリング内容（参考資料Ⅰ参照）が、比較的直接に日常問題での主観的価値項目を表した問題設定になっており、回答内容と地層処分問題に置ける主観的価値項目の内容（論点）を比較できる。表4.4に主観的価値項目に対する池沼処分問題の事実関係の認識との関係として示す。

1例として、表4.1に記載した主婦Dの地層処分問題での価値項目に対する論点と表4.4の内容を比較してみた。下表に比較結果を示す。、

表 主婦Dの主観的価値項目の論点の比較

主観的価値項目	表4. 1の内容	表4. 4の内容
社会的難儀	—	電力不足
社会全体責任 (公共意識)	地元だけに限定するのは良くない	妥協は恐い
トップダウン的決定	行政の密室性、慎重な推進	表面的ではこまる。もっと慎重に
不公平	—	誠意がない
計画的後始末(責任感)	電力を使っているのだから仕方ない	妥協点を見つける。とにかく反対では良くない
必要悪	—	必要悪
社会システムの受容	いずれ離れる	—
物質主義／脱物質主義	安定社会の享受	わずかの影響も許さない。
権威主義	現時点では専門家を信じる。	常識的な範囲で納得できる物を見つける
科学技術觀	技術を利用する人は人であり不安	専門家だけに任せておけばよいものではない

表4. 1の主観的価値項目と論点は多岐にわたるためどの論点を選択するかによって比較内容の違いも異なってくる。表4. 1の内容は、意味ネットワークを基本的枠組みで置き換えたもので、この結果と表4. 4の内容を一致させることは困難である。ここでは、できるだけ表4. 4の内容に近いものを選択した。

表中では、

- ・ トップダウン的決定
- ・ 権威主義
- ・ 科学技術觀

の3項目で共通点が見られる。「トップダウン的決定」では慎重さを要求し、「権威主義」では、現時点では専門家を信じることが常識的であると考えている。「科学技術觀」では、人間への不信と専門家への不信が重なる。

そのほかにも、「社会全体責任(公共意識)」では、安易な地方への建設を危惧している。

「計画的後始末(責任感)」でも、電気の恩恵があれば、いくらかの不便も仕方ない。妥協が必要であるということである。これらの結果から、地層処分問題における事実関係の認識での主観的価値項目の判断には、日常的な問題での価値項目の判断との類似性があるものと考えられる。今後更に、分析していく必要がある。

ただし、両者の内容の対応付けは、客観性に欠けるとは思われる部分もある。また、価値項目に全く対応していない内容もある。問題設定も含めてヒアリング方法をより高度化していく必要はある。

4. 4 意識構造モデルの基本構成および要素の妥当性に関する考察

(1) 地層処分に対する態度

地層処分に対する態度では、なじみのない問題であるにも係わらず”判断できない”や”放棄”ではなく、ビデオによる情報提供が、”賛成”、“反対”的度を決めるに役立ったとも考えられる。態度を”賛成”、“条件付き賛成”、“仕方ない”、“条件付き反対”に分類する事ができたが、実際の回答内容は、”条件付き賛成”か”仕方ない”かはっきりとしない場合もある。分類の枠組みとしては、大枠は妥当であるが、分類の境界の判別を明確にする必要もある。また、おそらくヒアリングを通じては”判断できない”や”放棄”的度は調べることが難しいので、何らかの手段で、これらの位置づけを確認しておくことも必要と考える。

(2) 事実関係に関する基本的認識

意識構造モデルの基本的枠組みは、適用対象を限定しないために、やや大きめの枠組みとなっている。また、網羅性を重視しているため、事実関係の認識を構成する判断項目や価値項目に冗長な点ももたせて設定している。このため、都市の主婦を対象としたヒアリングから得られた意味ネットワークを、基本的枠組みで置き換えた場合に、当然、枠組みが埋まらない事実関係の認識や主観的判断項目や価値項目が多数ある。例えば、「経済・産業のメリット／デメリット」がそれに該当する。対象が地方の場合には、施設誘致の可能性もあり、この事実関係の認識も埋まとと考えられる。同様に「政治・社会のメリット／デメリット」も枠組みの中には地元に関連する判断項目が含まれており、同じ事が言える。

地層処分の態度に至る構造モデルは、都市部主婦の場合、次の事実関係の基本認識で構成されている。

- ・高レベル廃棄物処分の必要性
- ・地層処分の技術的適切性
- ・生存に関するデメリット
- ・生活環境でのデメリット
- ・問題との距離

ここで、「生存に関するデメリット」は共通して持ち合わせている。「地層処分の技術的適切性」と

「生活環境でのデメリット」では、前者の寄与がやや強い。「高レベル廃棄物処分の必要性」は、態度を決める根幹である。「問題との距離」は重要な認識なのであるが態度にどの様な点で影響しているのか特定できない。5つの事実関係の基本認識と態度へのつながりを簡略化して示すと下図のようになる。図で矢印の太さが影響の度合いを楕円で囲んだ事実関係の基本認識の位置が態度との関連性を示している。

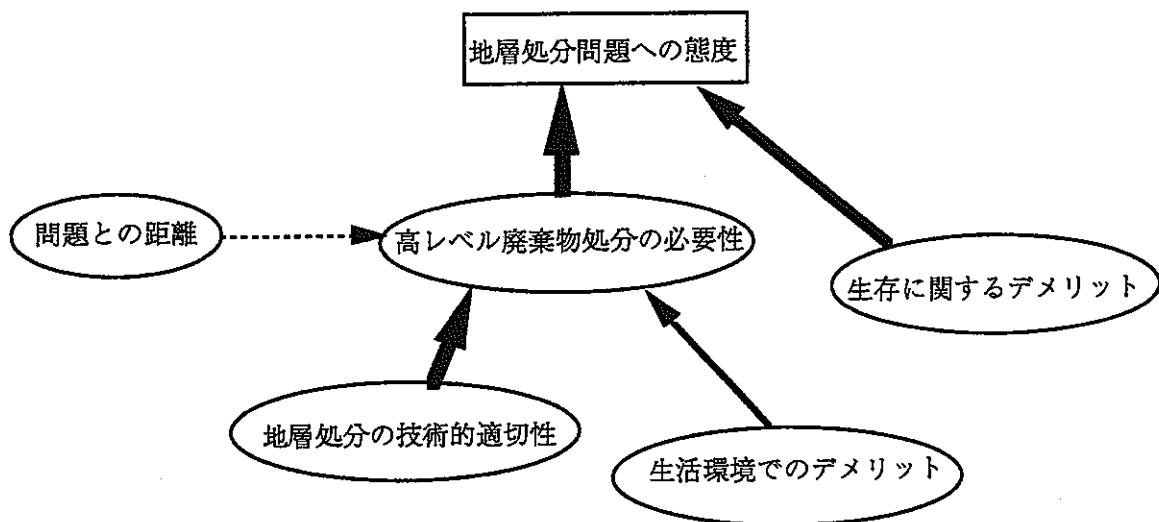


図 都市部主婦の地層処分問題に対する問題認識と態度の関係

この枠組みは、図3.1に示した問題認識と態度との基本的な関係構造に比べると事実関係の認識間のつながり方に違いが見られるが、全体的には枠組みに旨く収まっている。つまり、意味ネットワークを意識構造モデルの基本的枠組みに置き換えても問題ないことが判った。逆に言えば、構造モデルの枠組みは、意味ネットワークを十分カバーしており、構造モデルは妥当と考えられる。

事実関係の認識間の影響や相互の関係については、枠組みへの当てはめ結果を基にモデルを修正していく必要がある。

4. 3節でも述べたが、地層処分問題におけるメリットのうちで「生存に関するメリット」は、「原子力」であり地層処分からのメリットとは言いがたい面もあり、ヒアリング方法を検討して地層処分からのメリットにつながる項目を抽出していく必要がある。

また、「問題との距離」では、被験者自身が問題との関係や関連を意識できないず、距離が認識されない。このため、意味ネットワークの中から、「問題との距離」に当てはめる事実関係の認識や判断項目、価値項目を拾い出すことが難しくなっている。この点もやはり改善の余地はある。

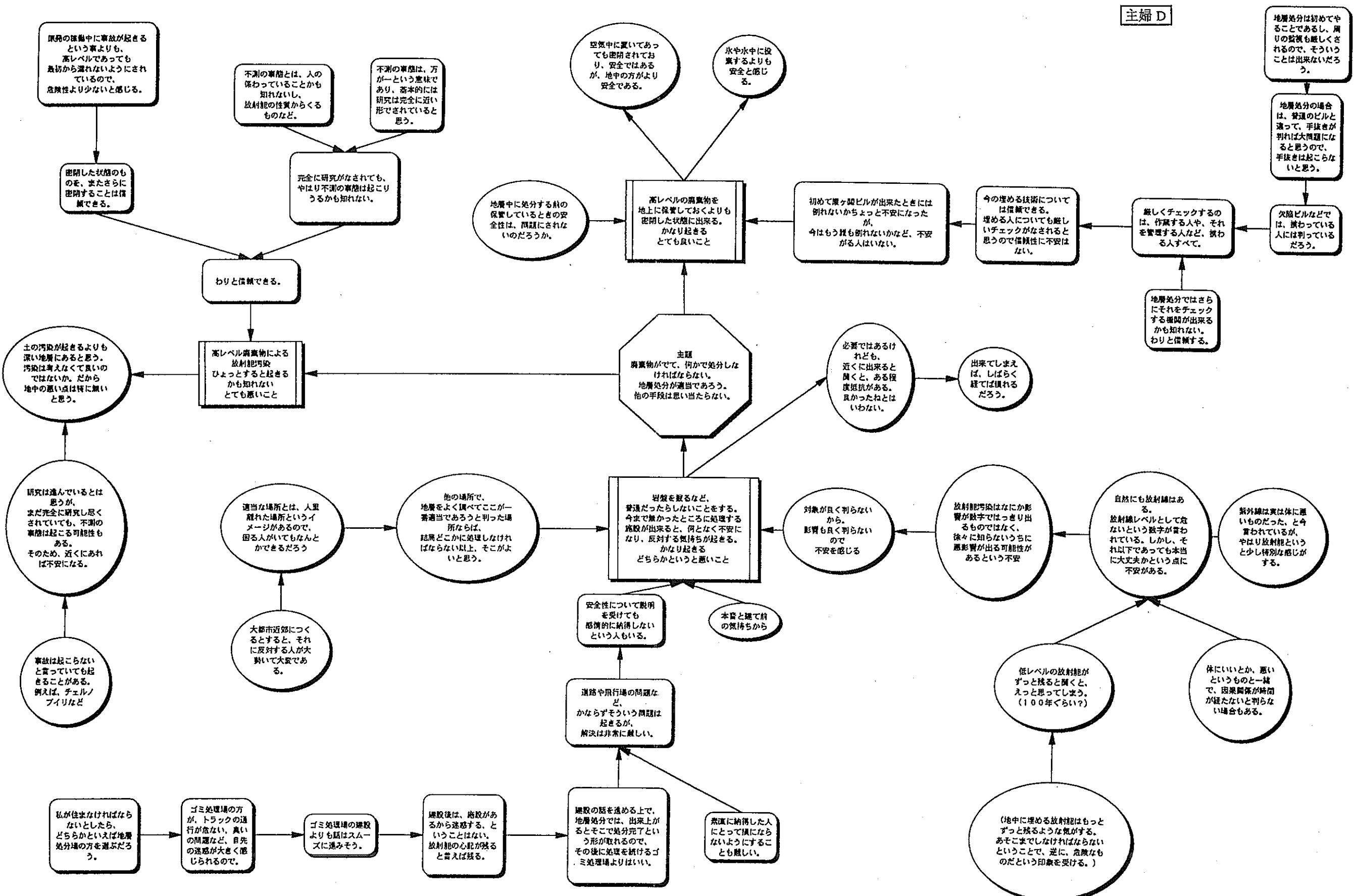


図 4.1 第1回ヒアリング結果（主婦D）

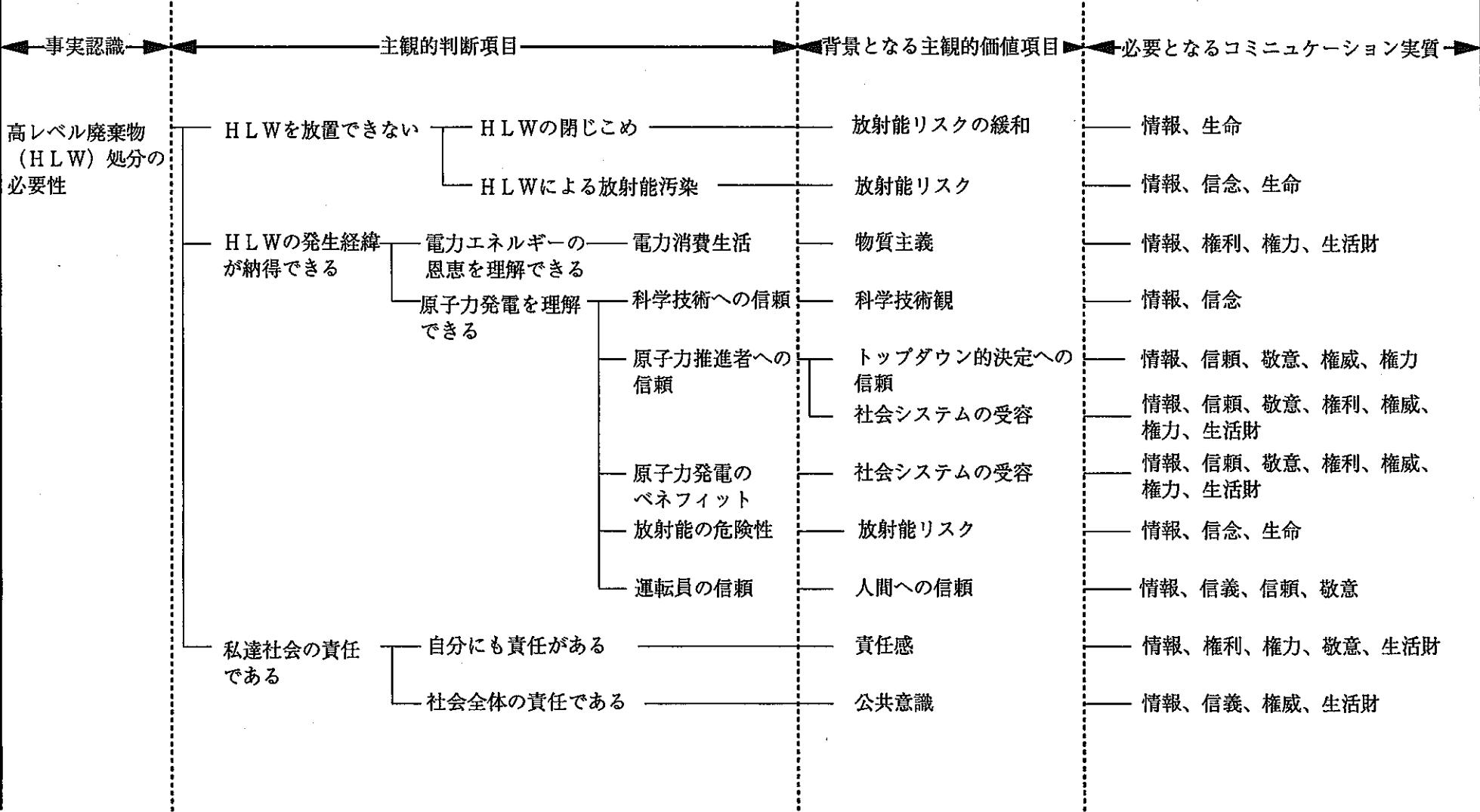


図4.2 地層処分問題に対する意識構造モデルの基本的枠組みの例 (1/8)

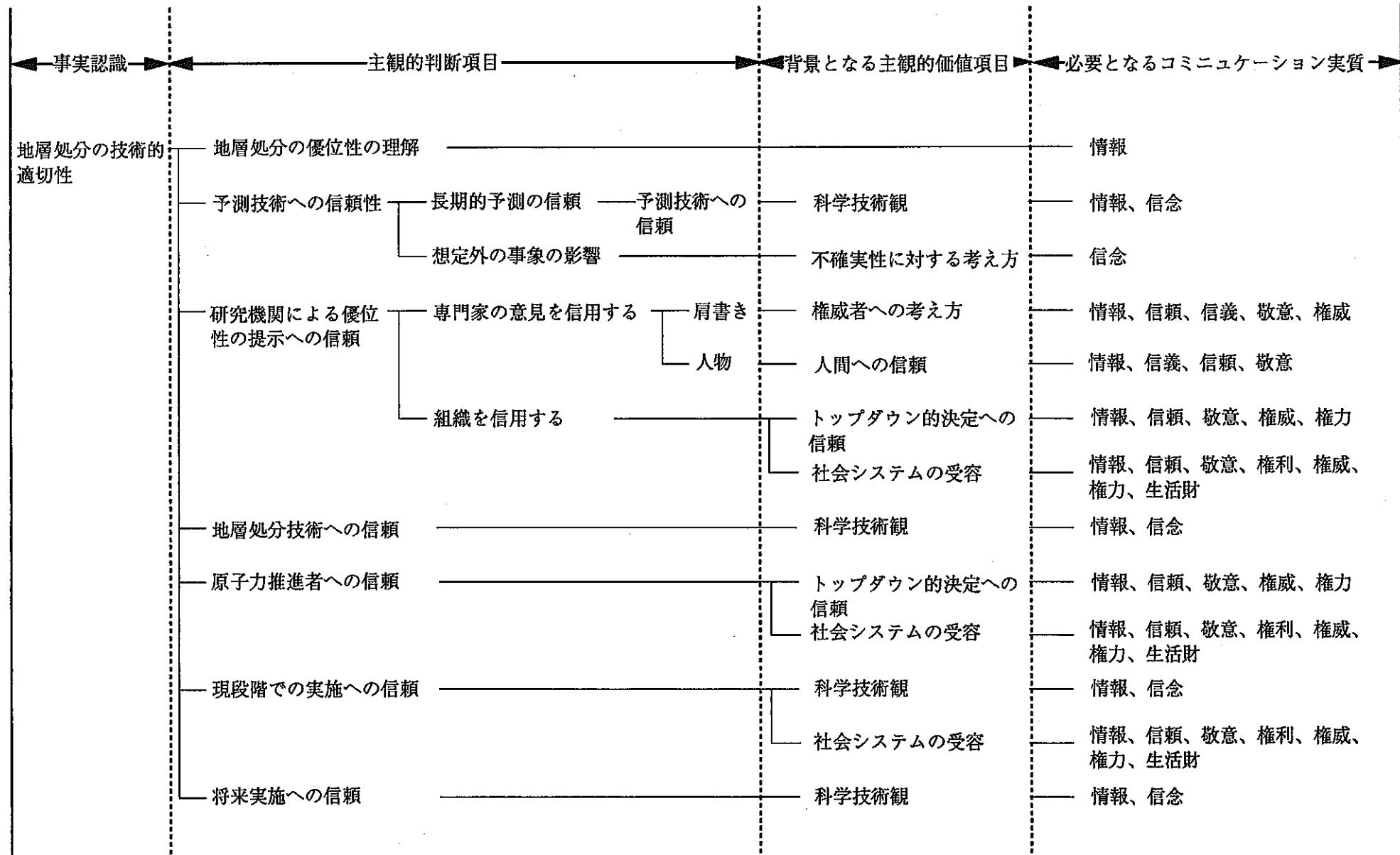


図4.2 地層処分問題に対する意識構造モデルの基本的枠組みの例 (2/8)

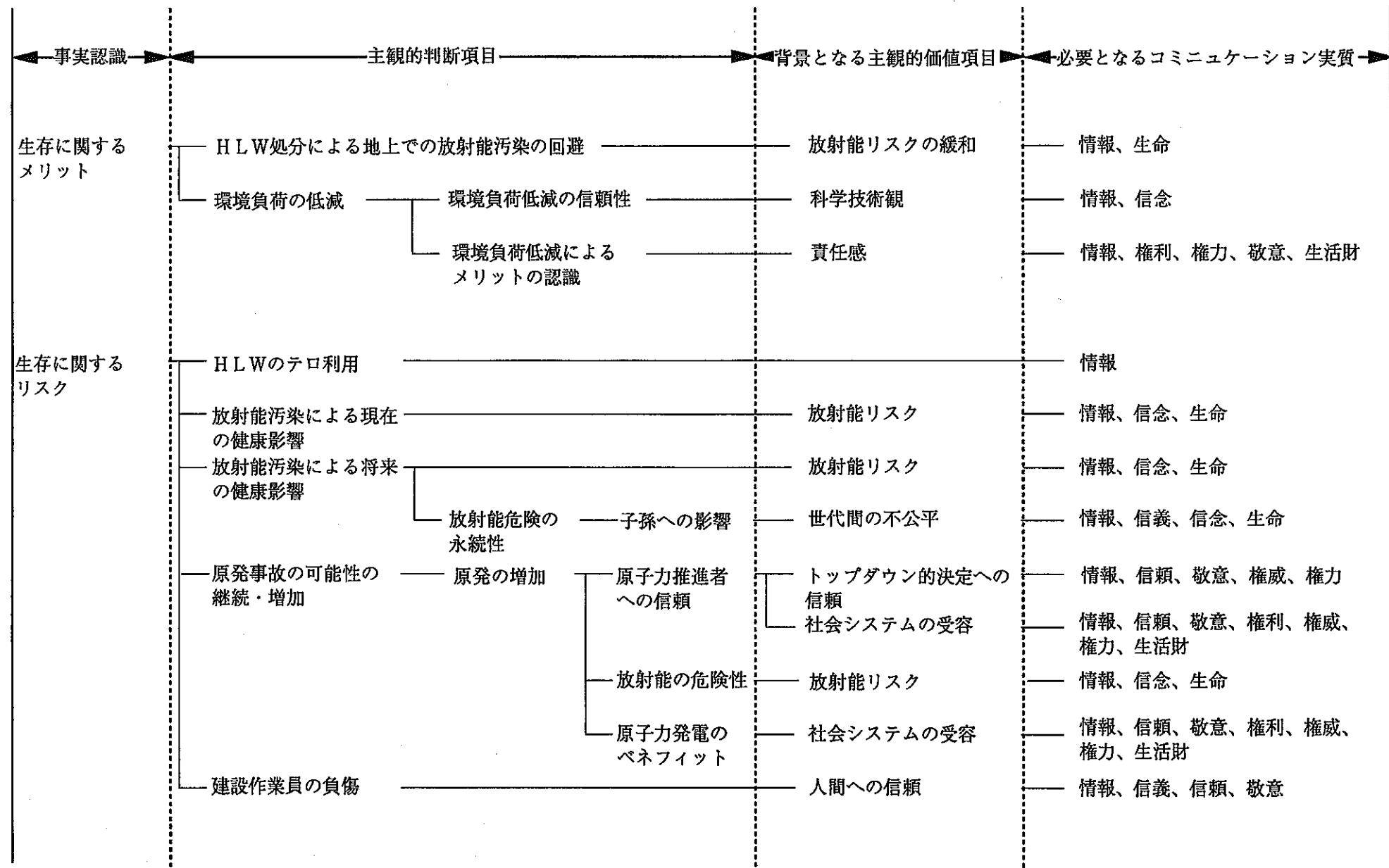


図4.2 地層処分問題に対する意識構造モデルの基本的枠組みの例 (3/8)

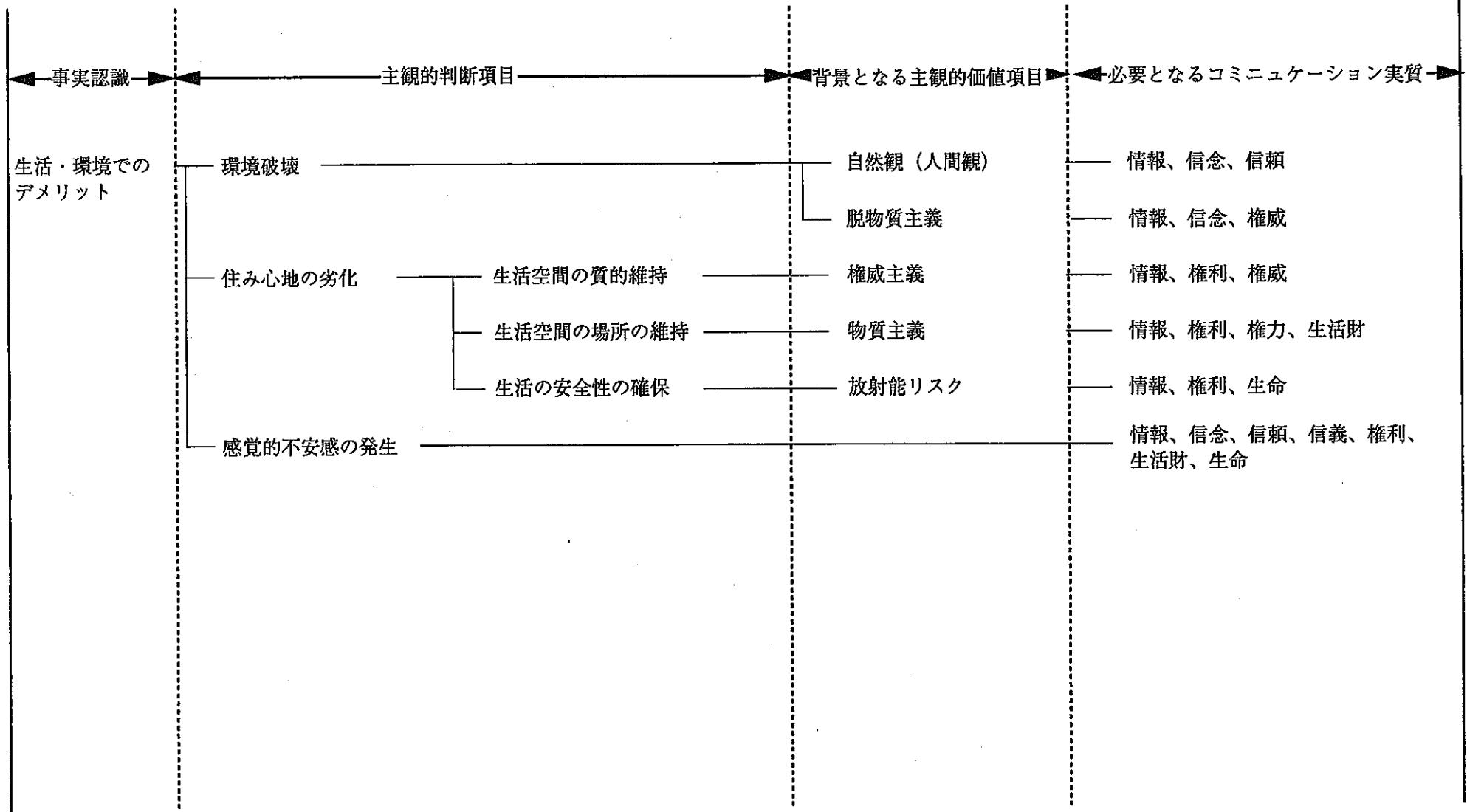


図4.2 地層処分問題に対する意識構造モデルの基本的枠組みの例 (4/8)



図4.2 地層処分問題に対する意識構造モデルの基本的枠組みの例 (5/8)

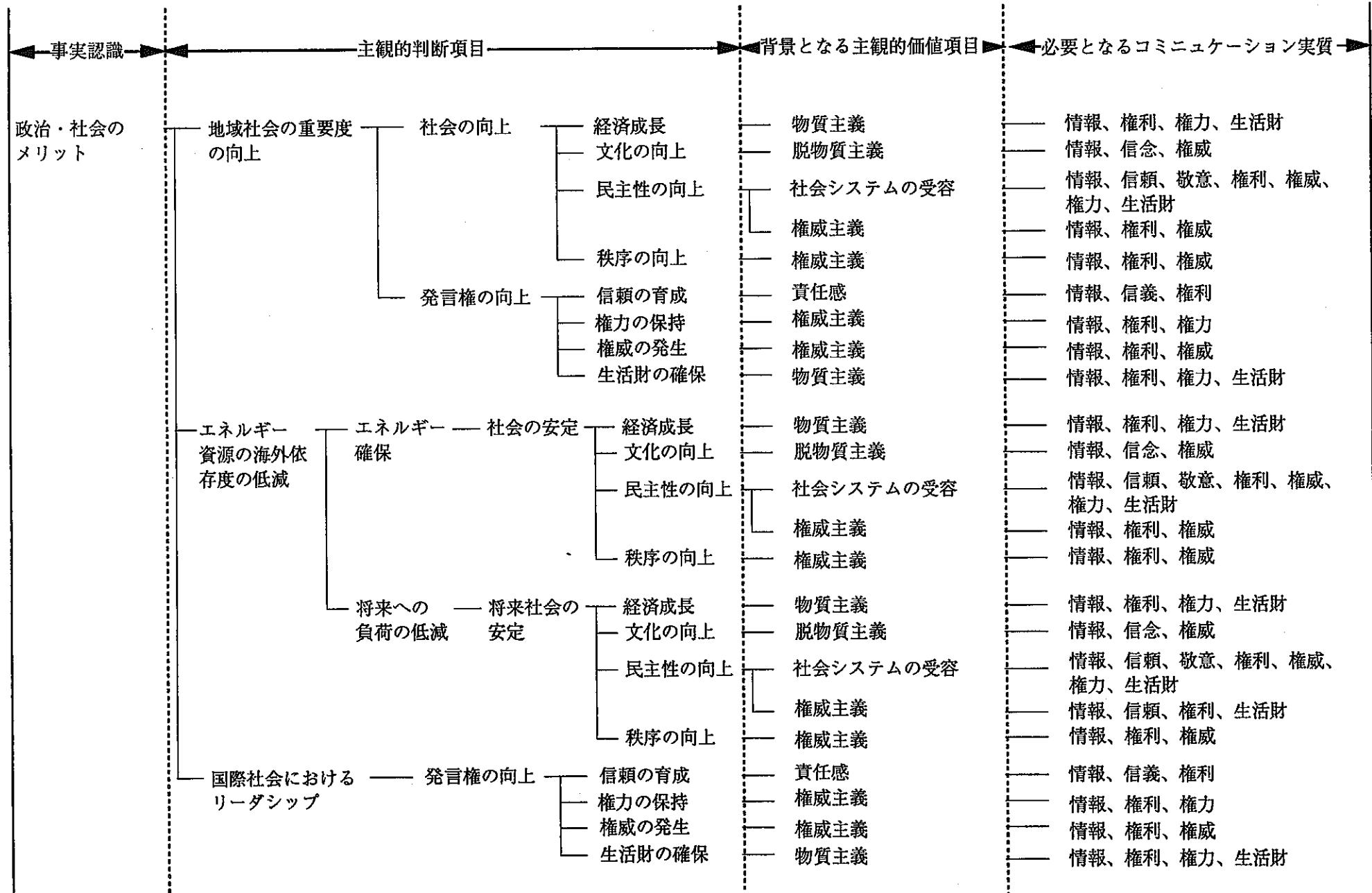


図4. 2 地層処分問題に対する意識構造モデルの基本的枠組みの例 (6/8)

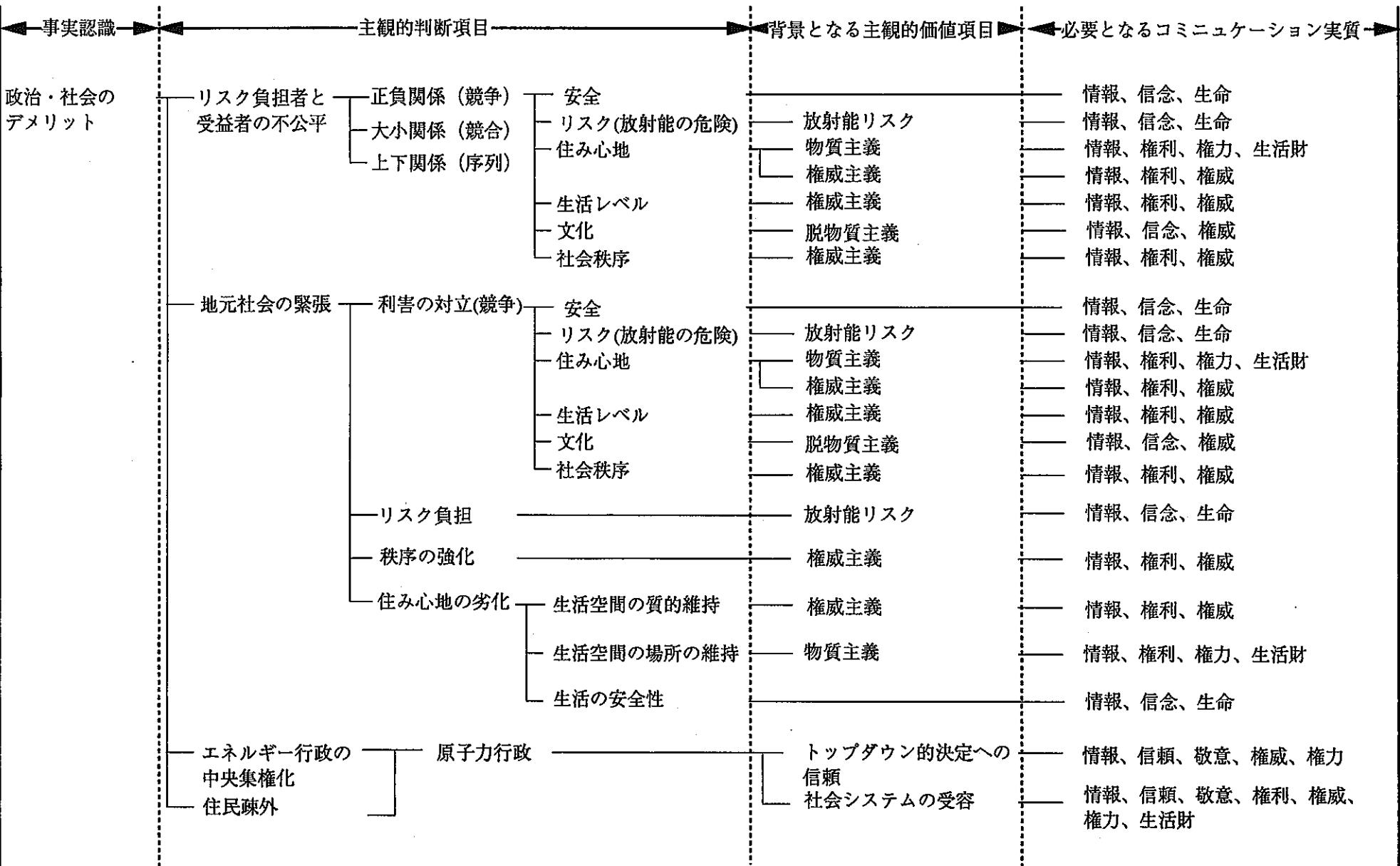


図4.2 地層処分問題に対する意識構造モデルの基本的枠組みの例 (7/8)

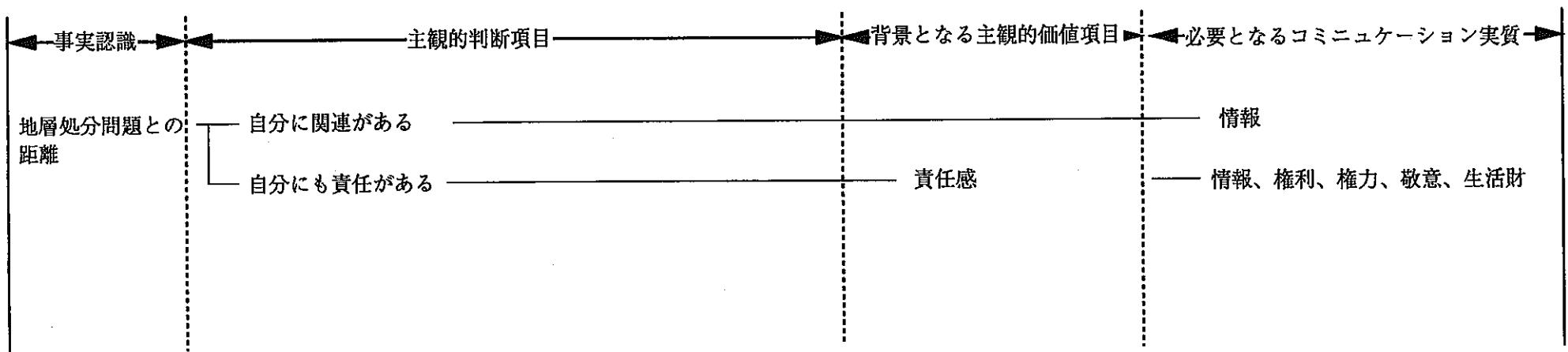


図4.2 地層処分問題に対する意識構造モデルの基本的枠組みの例 (8/8)

表4. 1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目の関係（主婦D）（1/4）

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	他より良い方法。「地上に保管しておくより、密閉できると思う」
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	長期的影響、目に見えない不安。「100年くらいは残るかな」「影響がなければいずれは慣れる」
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、生活財	(経済的) 安定社会の享受。「貧しいながらも楽しい。はもはやない」
科学技術の信頼	科学技術觀	情報、信念	情報	科学技術は信頼。不測の事態。「技術を使用するのは人間であり不安」
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意	情報、信頼、権力	行政の密室性、慎重な推進。「専門家だけにまかせておけばよいものではない」
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、権威、生活財	自己への影響がない場合は無関心。「感情的であってもいずれは慣れる」
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意	情報、信頼、敬意	信頼関係、誠実さが重要。「人間のすることには限界がある」
自己責任	责任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、生活財	「電力を使っているのだから少しあしかたがないか」「処分場建設による環境破壊は自分の問題ではない」
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	権威	地元だけに限定するのはよくない。

表4.1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目の関係（主婦D）（2/4）

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地層処分の優位性の理解	—	情報、信頼	情報、信頼	密閉して漏れない状態にするには、水中より地中深くが安全。地球上のどこかに置くとしたら地中は安全
予測技術への信頼性	長期的予測	科学技術観	情報、信念	ある程度年数経たなければ判らないものもある。人間には限界がある。
	想定外事象の影響	不確実性に対する考え方	信念	不測の事態。「技術を使用するのは人間であり不安」
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、 権威	現時点では、専門家の研究結果は問題ないという段階でも、なにか、不十分が生じること予想される。
		人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	安全確保の努力は信頼。しかし、不測の事態、「人間のすることには限界がある」。「近くにできるとなると、放射能汚染が不安になる」
	組織を信用	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、 権力	「地層処分は初めてなされることなので、周囲の目も厳しい」、「チェック機関ができるかもしれない」。「ごまかせない」
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財	
地層処分技術への信頼	科学技術観	情報、信念	情報	「厳重にされているという漠然とした信頼がある」、「原発の稼働中になにか起こるのに比べると最初から密封しているので信頼できると思う」、「技術は信頼するが人間は不安」
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、 権力	情報、信頼、権威、権利	「地層処分は初めてなされることなので、周囲の目も厳しい」、「チェック機関ができるかもしれない」。「ごまかせない」
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財		
現段階での実施への信頼	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、 権威	情報、信頼、信義、敬意	現時点では、専門家の研究結果は問題ないという段階でも、なにか、不十分が生じること予想される。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財	情報、信頼、権威、権利	「地層処分は初めてなされることなので、周囲の目も厳しい」、「チェック機関ができるかもしれない」。「ごまかせない」
将来実施への信頼	科学技術観	情報、信念	情報	不測の事態。「技術を使用するのは人間であり不安」

表4.1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目の関係（主婦D）（3/4）

事実認識：生存に関するメリット・デメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
H LWテロ利用		情報	情報	言及なし。
放射能汚染による現在の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	測定により判る場合や基準以上になった場合は別として、徐々になにかの影響が出るかもしれないという不安はある。
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	長期的影響、目に見えない不安。ある程度時間が経たないと判らない。「100年くらいは残るかな」「影響がなければいざれは慣れる」
	放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	言及なし。
原発事故の可能性の継続・増加 (原発の増加)	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	言及なし。
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	言及なし。
	放射能の危険性	放射能リスク	情報、信念、生命	言及なし。
	原子力発電のベネフィット	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	言及なし。
作業員の負傷	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意		言及なし。

表4.1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目の関係（主婦D）（4/4）

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊	自然観（人間観）	情報、信念、信頼	情報、信頼	環境破壊はだいたい起こると思う。「環境破壊があっても、HLWを処分できるのだから多少は目をつぶる」、社会の問題である。
	脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし。
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威	埋めるので、表面から見えない。慣れてしまう。ごみ収集車のように常時通るのでなければ、迷惑しない。
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財	東京の近郊ではないイメージがあるので、つくってもよい。処分場予定地の近辺の人は、移住すればよいのでは
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命	その場所での放射能の影響が伝えられないと不安になり、理解が得られない。安全性の確保と住み心地は、強い関連がある。
感覚的不安感の発生		情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命	十分な安全性研究がなされていると言っても、自分の近くにできるとなると、感情的に危ないと感じる。放射能汚染が気になる。マイナスはないが、処理するということで感情的になる。できてしまえば、慣れる。できるときに抵抗がある。	

18

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある	—	情報	情報	一時的な関心。「テレビ報道があれば見るかもしれないが、その後はすぐ忘れる。」
自分にも責任がある	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利	HLWが処分できるなら処分場建設で環境破壊があってもやむえないが、それは自分の問題ではなく、社会の問題である。

表4. 2 地層処分問題に対する態度 (1/2)

被験者	基本的態度	地層処分問題に対する論点	裏庭問題に対する論点	ビデオへの反応	性格分類*
A	賛成	原子力には基本的に賛成。HLWの処分方法として海中や宇宙などの処分に比べると地下の処分は安全なので賛成である。 土地の狭い日本で有効かつ安全に処分できる。	自分の町に建設となったら反対	専門的な内容は判らないが、ビデオの内容は信頼する。ニュース報道も信頼する	ESTP
B	賛成	HLWを処分する方法として最も研究がなされているのが地層処分であると認識した。他の研究ももっともいいのではないか。地上にあるよりは、地層処分の方が良い。	処分場は自分の近くにはたてて欲しくない。一時的でも、地上にあるので放射能の影響が気になる。	ビデオでは、放射能の強さや寿命の具体的な数値が表示されていない。ある条件での安全性を説明しているが、他の条件ではどうか言及していないので安全と言い切れない。	ISTP
C	賛成	研究者が今の段階で一番良いとしているもので、やらなければいけないものであれば、賛成である。	言及なし	言及なし	ISTP
D	条件付き賛成	HLWが出て、なにかで処分しなければならない。地層処分が適當と思う。他の手段は見あたらない。HLWを地上に保管するより密閉した状態にできる。	ある程度抵抗はある。できてしまえば慣れる。	言及なし。	ESFP
E	条件付き賛成	地層処分が現在一番安全だとすればそうするしかない。しかし、絶対安全でなければならない。 原子力には反対。地層処分が当たり前だとHLWが益々増えてしまう。	自宅裏にくるのはいや。万一の事故を考える。原子力をやめて、現存するHLWは人知れない所に処分する。.	ビデオで言っていることは信用する。	ISTP
F	仕方ない	最終的にはHLWができてしまっている。これをどうにかしなければならないので、地層処分は仕がない。原子力を始める前に処分方法考えるべき。HLWがどんどん増えていくかもしれない。	言及なし	映像を通して、正しい情報も誤った情報も伝えられる。原子力は正しく伝えている。しかし、悪いイメージだけが残っている。	ESTP

* 性格分類：1番目=興味関心の方向： 外向的（E）－内向的（I）

2番目=ものの見方： 実線・現実的（S）－理論・独創的（N）

3番目=判断の仕方： 論理・分析的（T）－感情・情緒的（F）

4番目=環境への接し方： 判断して対応（J）－臨機応変（P）

表4. 2 地層処分問題に対する態度 (2/2)

被験者	基本的態度	地層処分問題に対する論点	裏庭問題に対する論点	ビデオへの反応	性格分類
G	仕方ない	それしか方法がないのであれば、仕方がない。	絶対に安全でないと反対運動がおきる。場所の選定は、大学や研究所等の中立的な第3者機関が行うべき。	放射能の減衰時間が判らない。ビデオでは速やかになくなる様な印象を受けるが不明である。何重にもなっていて本当に危険性がないような印象を受ける	ENTP
H	仕方ない	ビデオの通り安全なら、今の段階で他の方法がないで仕方がないと思う。ただし、安全性を問題とする意見があれば態度は変わるかもしれない。 (実家が、原発の側である) HLWが増えすぎて埋める場所がなくなるかも。	近くには埋めてほしくない。 完全に安全だと思わない。 万一の場合の対策も講じて欲しい	ビデオでは、一人の意見しか出でていない。安全面だけ述べている。具体的な数字で示していない。公平な判断ができないので信頼できない。地層処分の仕組みを知ることができた。	ISFP
I	条件付き反対	世界の国々で協力して研究を続けるとしても、無害な微量の放射能に変える方法が見つかるまで、とりあえず保管しておく方が良い。	言及なし	ビデオでは予測できると言っていたが疑わしい。 (阪神大震災やその影響を予測できなかった) 専門家の言葉遣いの違いや具体的な数字の表示がないことなどから疑ってしまう。	ISFP
J	条件付き反対	これしか方法がなければ、どうやって安全に遂行するかを考えるべき。しかし、考えた末の結論でもいいと言えない。害がないと言われても信頼性には不安がある。自前で処分できるが、発生する前に処分方法を考えておくべきだ。	その上には住みたくない。専門家でも建前上安全だと言ってもそこには住めないだろう。	ビデオは安全な事しか言わないので疑問。絶対に安全ということはない。専門家が考へても何かデメリットがあるはず。専門家の意見だけを広めたいという印象を受ける。中途半端な知識だと特に不安になる。	INTP
K	条件付き反対	地下の安全性が未解明であると思う。まして1万年先のこととは判らないことが多い。現状では、地層処分に反対である。他の方法も考えた方がよい。もし、地下のこと、1万年先のことを解明できれば地層処分でも良い。ただし、場所に限りがあるので長期間はできない。	言及なし	今の段階で埋めても良いといえるほど長期間の現象予測はできていない。大丈夫だと判断する発想に驕りがあり、これが問題。安全です、大丈夫ですと言うより、これだけ危険があるが必要性もあると言った方がよい。	INTJ

表4. 3 地層処分問題に対する事実関係に関する基本的認識

被験者	基本的態度	高レベル廃棄物処分の必要性	地層処分の技術的適切性	生存に関するメリット	生存に関するデメリット(リスク)	生活環境でのデメリット	経済・産業でのメリット/デメリット	政治・社会のメリット/デメリット	地層処分問題との距離
A	賛成	専門家を信頼	人工バリアの長期的健全性が不安	生活維持のため原子力賛成	危険なものが地上にある	処分場建設による自然破壊	—	地元の不公平	関心あり。便利さ優先
B	賛成	不安あるが信頼	自然を把握できていらない	—	わずかでも放射能は危険	核廃棄物の輸送時の被ばくが危険である	—	—	報道で知る
C	賛成	地上から隔離できる	埋設後チェックができない	—	人工的な放射能自体が問題	—	—	—	一般人にもっと知らせるべき
D	条件付賛成	地上にあるより良い	技術は信頼するが人間が不安	—	長期的影響、目に見えない不安	処分場建設による環境破壊、仕方ない	—	—	一時的な関心
E	条件付賛成	必要悪	技術者を信頼するしかない	—	技術者より報道を信頼する	核廃棄物による自然破壊	—	—	原子力は嫌だ
F	仕方ない	今ままでは益々増えてしまう	安全性確保が不十分	経済発展には原子力も仕方ない	廃棄物が一ヵ所に集中し、汚染も集中	核廃棄物を自分たちで処理できない	—	都市と地元の不公平	電力使用者の責任
G	仕方ない	方法がなければ仕方ない	危険性はない印象	電力確保のため原子力が必要	地殻変動により地元の被ばく	外から課される物であり絶対の安全の保障が必要	地域振興のための誘致開発コスト	地元の反対運動選挙に悪用	国民の監視が必要
H	仕方ない	地下の方が多少危険が減少する	安全面しか言わない。信頼できない	—	弱くても放射能は恐い	埋め続けると処分場の余地がなくなる	—	—	原子力からの電気を利用
I	条件付反対	無害化できるまで保管すべき	実際の処分場の安全性は未確認	—	エネルギー利用による放射能が問題	—	—	—	自然と共存するべき
J	条件付反対	絶対的な安全はない	長期的には健全性が損なわれる	—	長期的には人体に影響の可能性	地層深くの開発の影響が心配	—	—	絶対反対と言つても仕方ない
K	条件付反対	処分場に限界、長期間継続が無理	地下、1万年先の安全性は不明	—	—	—	—	—	人間がいる限り破壊は伴う

表4.4 主観的価値項目に対する地層処分問題の事実関係の認識との関係

主観的価値項目	被験者（主婦）								
	A	B	C	D	F	G	H	J	K
社会的難儀	—	電気が使えなくなると困る	故障して漏れ出る心配。専門家が必要	電力不足	田舎の風景。人が住んでいないところ	古くなると漏洩する	電気が使えなくなつて困る。	処分場がなくて廃棄物が放置される	漏洩する
社会全体責任（公共意識）	エネルギーを節約すれば、廃棄物を減らせる。関心を持った方が良い	原発の反対運動。安全な環境作り	便利な物には不便も伴う。便利さには無関心になる	妥協は恐い	クリーンなイメージ	あるべき場所にあるべきものを作る	廃棄物はきちんと処理する。	意志統一が必要	場所に限りがある。
トップダウン的決定		政治家の不正事件	税金を使う。場所選択には関与できない	表面的にはこまる。もっと慎重に	身近ではない	何をやっているのか不明、公開すべき	計画的におこなうべき	もっと事前に計画して	—
不公平	地元の人にとってみれば不公平	地元の処分場建設	自分から	誠意がない	見えなくすることによるごまかし	—	—	行動が先	—
計画的後始末（責任感）	最後まで責任を持つ必要がある	お役所仕事、体裁だけ整える。	P.Rで広める必要がある	妥協点を見つける。とにかく反対では良くない	みんなの責任	—	後のことも皆で考える	計画的に、できるだけ多くの人の参加	後かたづけは必要
必要悪	—	データの公開	非人間的なイメージ	必要悪	仕方がないもの	便利な物の弊害		選択肢の一つ、最善策を考える	—
社会システムの受容	環境重視	環境重視の人は反対	—	—	—	—	—	合理主義は賛成しやすい。	安全が保障されることが重要
物質主義／脱物質主義	人権優先	個人の主觀で反対が起きる。	経済の恩恵を受けるので賛成する	わずかの影響も許さない。	—	—	—	経済性を重視しない人は反対する	効率を重視する人が賛成
権威主義	いずれは受け入れられる	安全の保障は良識の問題	本人さえ納得すればよい	常識的な範囲で納得できる物を見つける	常識的なものなら良い	非常識への周囲の反対	—	前例はないが迷惑でなければよい	—
科学技術観／	技術進歩により認められる	原子力発電所	コンピュータが必要	専門家だけに任せておけばよいものではない	人間と技術が相互に頼りあっている。	予想しきれない	—	新しい物に対する議論	—

5. 地層処分に関する公衆意識構造の推定

本研究では、これらのリスク観、価値観が地層処分問題への態度を決定する上での事実認識に対してどの様な影響を及ぼしているのか、また、事実認識とどのような関係を構築しているのかを検討した。この検討を基に、地層処分問題における意識構造の基本的枠組みを構築した。さらに、地層処分問題に関するヒアリングにより実際の事実認識とリスク観、価値観を分析し、これらを基本的枠組みにあてはめ、構築した意識構造の妥当性を考察した。同時に、考察を基に都市部主婦の地層処分問題に対する意識構造モデルの概略を推定した。

地層処分問題に対して合理的な合意形成を達成するためには、双方向的リスクコミュニケーションが必要であり、その中では、態度の決定に野生合理的なリスク観や価値観が大きく影響すると考えられる。そこで、合意形成を行うためにリスクコミュニケーションで用いるべきコミュニケーションの実質を定義した。ここでは、一つの仮説として、コミュニケーション実質も含めた意識構造モデルの構築を試みた。

コミュニケーション実質は、双方向的リスクコミュニケーションを行う場合に、お互いの価値観を共有するために交換し合うもの、あるいは価値観を伝達する場合に、実際の行動として現れるもの、伝達、交換の手段、媒体となるものとして定義した。前出の図4.2では、主観的価値項目に影響すると考えられるコミュニケーション実質を推定して、示している。それぞれ実質の意味は、以下の通りである。単なる言葉（熟語）の意味としてではなく、コミュニケーションで用いられる目的から意味付けを行っている。

情報：知識を伝達するもの

生命：自己生存にかかわるもの（放射能リスク）

信念：個人のものの見方（人間観、科学技術観）

信義：人間関係の中で守るべきこと（義理、人情）

信頼：相手の信頼を得ること

権威：相手から尊敬を受けられること（専門家、生活ステータス等）

権利：自分で物事を決められること（例、住民参加による選択等）

権力：相手に対して一方的に物事を決められること（トップダウン的決定）

敬意：相手を尊重する態度

生活財：金銭、土地、消費財等の形のあるもの（補償金等が代表）

コミュニケーション実質の定義には、曖昧な部分があり、今後、その定義と実際の意味、役割、コミュニケーションでの使われ方を再度ヒアリングを通じて分析していく必要がある。

図5. 1に、推定した公衆の意識構造モデルを示す。このモデルは、あくまでも都市部の公衆を対象に考えている。4章でも記したように、モデルは5つの事実関係の認識から構成されている。さらに事実関係の認識毎に、主観的判断項目、価値項目の中から、地層処分への態度への決定に影響するものを選び出して記した。この選択は、主婦11名のヒアリング結果から、複数が共通して論じた項目としている。さらに、判断項目、価値項目を左右するであろうコミュニケーション実質を示している。図中の矢印の方向と太さが影響の方向と強さを示している。点線は、影響関係が曖昧あるいは非常に薄い場合である。

図5. 2には、NIMBY問題に対する意識構造モデルを推定した。このモデルでも、対象は地元ではなく、都市部の公衆であり、経済・産業のメリットは認識されないものと考えて、図5. 1と同じ事実関係、判断項目、価値項目となっている。図5. 1との違いは、「生存に関するデメリット」と「生活環境でのデメリット」の影響が強くなり、「必要性」の認識を低下させることになると推測される。ここでは、「問題との距離が」想定の基でもはっきりとするため、影響関係の一部は実線に変わっている。

これらのモデルは、あくまで一つの仮説であり、今後、モデルの妥当性を向上させると伴に、広範囲のヒアリングにより適用性を確認する必要がある。

=事実関係の認識

=主観的判断項目
主観的価値項目

=コミュニケーション実体

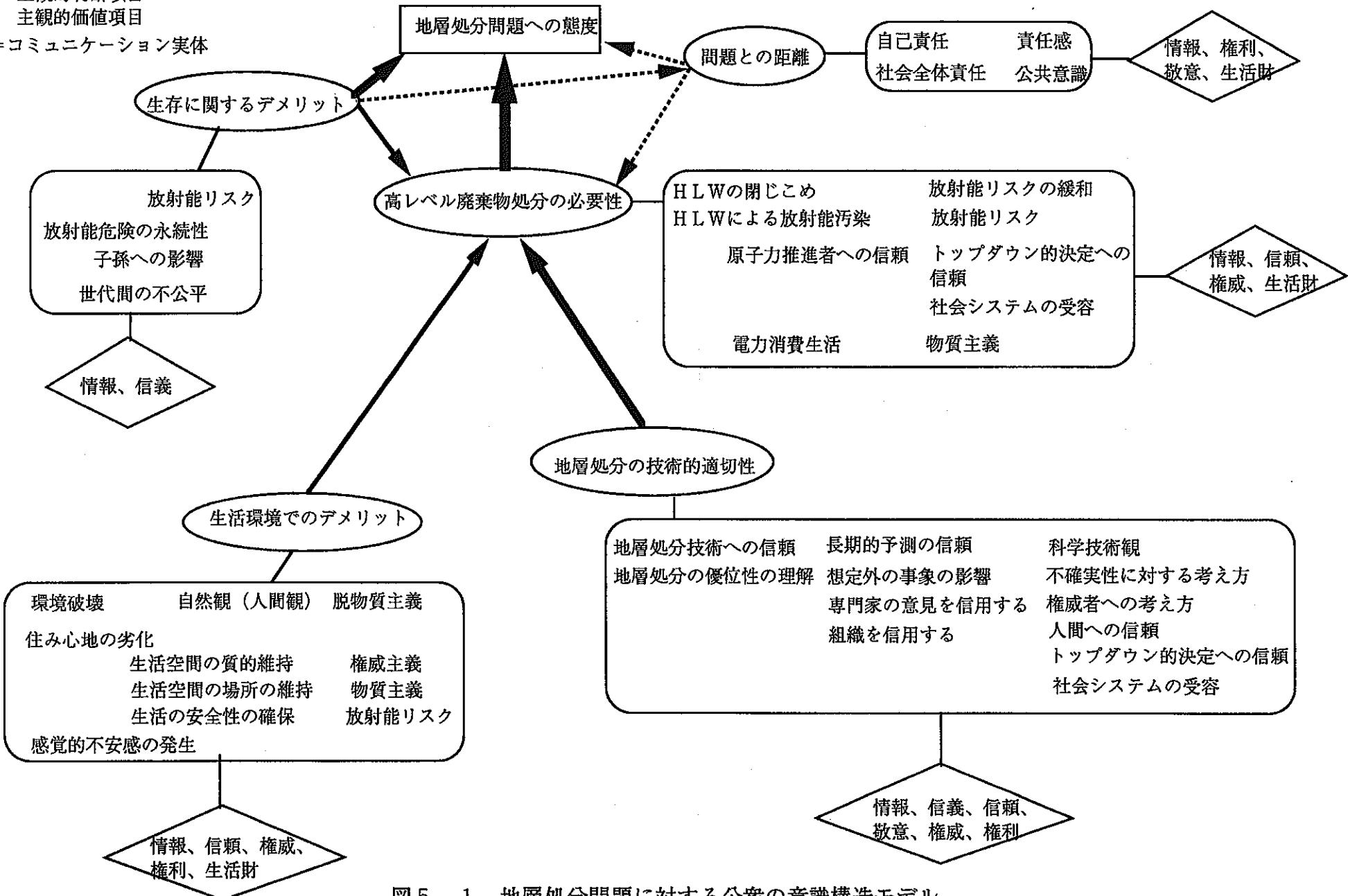


図 5. 1 地層処分問題に対する公衆の意識構造モデル

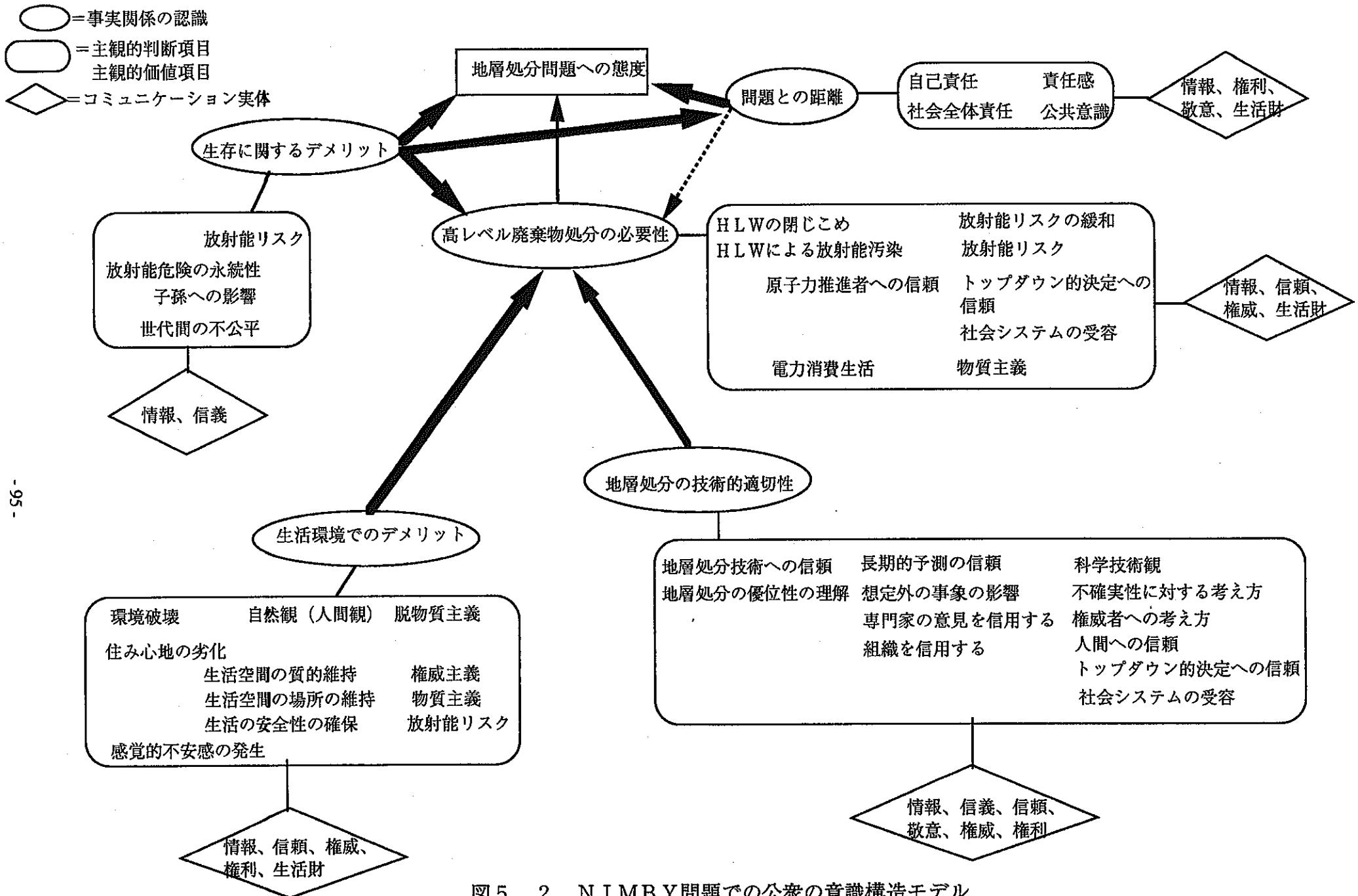


図 5. 2 NIMBY 問題での公衆の意識構造モデル

6. まとめ

(1) 成果

本研究の成果を項目毎に示す。

1) 地層処分問題における意識構造の基本的枠組みの構築

①事実認識と態度の基本的関係の構造化

平成6年度の成果を基に、地層処分問題に対する事実認識と態度との基本的な関係を構造化した。

②意識構造の基本的枠組みの構築

①の基本的な関係に、事実の認知段階を考慮して構造化を行った。

③主観的価値判断につながる事実認識の関係図式化

平成6年度の成果を基に、地層処分問題に対する事実認識を主観的価値判断につながる影響項目

(詳細な事実認識)に分離して、事実認識と影響項目との関係を図式化した。

④主観的価値判断の整理

地層処分問題への態度を左右する主観的価値判断の価値類型および政治的価値意識を分類し、

その類型間の関係を定義した。

⑤地層処分問題に対する事実認識と主観的価値判断との関係の構造化

上記、①～④をまとめて、地層処分問題に対する事実認識とそれに影響する一般的価値観の関係を構造化した。この構造において、双方面的リスクコミュニケーションを行う場合に用いられるコミュニケーション実質を定義した。さらに、コミュニケーション実質も含めた地層処分問題に対する公衆の意識構造モデルを推定した。

2) ヒアリングによる事実認識、価値観の確認

①ヒアリングの範囲

下表に、ヒアリング対象と目的をまとめた

対象地域	対象属性		分析項目				
	性別	年齢層	態度	事実認識	影響項目	主観的価値判断	コミュニケーション実質
都市部	女性	~30代					
		30~40代	○	○	△	△	△
		50代~					
	男性	~30代					
		30~40代					
		50代~					
	ユニバーサル	10~70代					

○：ヒアリングを実施し、かつ構築したモデルや定義等をヒアリング結果に基づいて網羅なく分析した。

○：ヒアリングを実施し、構築したモデルや定義等をヒアリング結果に基づいて分析したが、不十分な点も残っている。

△：ヒアリングは実施していない。構築したモデルや定義等は推定のままである。

×：ヒアリングは実施していない。モデルや定義等も推定されていない。

②研究の位置づけ

下表に、地層処分研究開発に関する情報認知研究におけるヒアリングの位置づけをまとめた。

認知過程	地元部		都市部	
	対象属性限定	ユニバーサル	対象属性限定	ユニバーサル
静的判断（情報なし）	×	×	○	△
動的判断（情報あり）				

③枠組みへのあてはめ

構造化した地層処分問題に対する事実認識と主観的価値判断との関係にヒアリングにより抽出した事実認識と主観的価値観をあてはめることにより、実際の意識構造とモデルのずれがどの程度で

あるかを確認した。

④公衆意識構造モデルの推定

基本的枠組みへの当てはめを基にして、公衆の意識構造モデルを推定した。同時に、双方向リスクコミュニケーションにおいて有効と考えられる、コミュニケーション実質をまとめた。

3) まとめ

ヒアリング結果のあてはめにより、以下の結論を得た。

○地層処分問題に対する事実認識と主観的価値判断の枠組みの中で、実際の事実認識と主観的価値判断の関係をうまく説明できるものと考えられる。

○ヒアリングで得られた事実認識や主観的価値観の範囲が小さいため、地層処分問題に関係するであろう全ての事実認識および主観的価値観を網羅できていない。これは、事実認識と主観的価値判断の枠組に未整備な部分があることやヒアリング方法にも不十分な点があったことによる。

(2) 今後の課題

今後の課題は次の通りである。

①構築した基本的枠組みを整理してより明確なものにする

②価値観および事実認識－価値観の関係、コミュニケーション実質の役割をより詳細に分析できるヒアリングシナリオを作成する。

③②に沿って、対象範囲を拡げたヒアリングを実施する。

④基本的枠組みの確立と広範なヒアリングにより、意識構造の枠組みの妥当性を高めるとともに、より一般性のあるものに拡張する。

これらの結果から構築される、意識構造モデルを基に地層処分研究開発を含めた地層処分問題全般に関する公衆の意識構造を広く解明していく。

参考資料 I ヒアリング調査の結果

参考資料 I. 1 主婦Dへのヒアリング内容

参考資料 I. 2 主婦Dにたいする第二回ヒアリング資料

- ・第1回ヒヤリングについての整理
- ・日常的なものごとに関する質問

参考資料Ⅰ. 1 主婦Dへのヒアリング内容

1. 第1回ヒアリング

[地層処分に対する態度]

結局そういう廃棄物があつてなにかで処分しなければならない、っていうことがあるわけですよね。そうすると、一応私には他にいろいろな知識もないで、いまビデオで見たとおりに他の方法には×がついていましたよね。海にとか、南極にとか。そういうことを見ると、地層処分というのはかなり安全なのかな、と思います。結局、地表に出しておくわけにはいかないわけですね。

[地層処分の影響項目]

①高レベルの廃棄物を空気中にふれないところに持つていいける点

さっきのビデオでは、まだ処分の段階にいっている国はない、というふうにいっていましたが、原子力発電はかなりの運転量になっていてたくさんの廃棄物がもうすでに貯まっていると思うのですが。そういう廃棄物を地上においておくよりも、密閉されたところで他に出ていかないっていう状態のほうがいいわけですね。それを考えると、氷の中とか、水中よりも、地中深くという方が安全という感じがしたんですけども。

空気中にあるといつても、さらしてあるのではなく、それなりにしっかり密閉されているとは思うが。

地層処分により、かなり安全に処理できる可能性がある、と思います。そういうふうに安全に処理することは、とても良いことである。

②放射能による地中の汚染は、あれぐらい深くなると特に考えなくとも良いのではないかと思う。

地中で処分することの悪影響といつても、結局地球上のどこかにおかなければならぬわけですよ。だから地中の特に悪い点というのはなかなか見つからないんですが。むしろ他の方法よりは安全だと思う。

このような放射能汚染というものは、ひょっとすると起きると思います。こうした汚染はとても悪いことだと思います。

③廃棄物の処分場だけではなくて、原子力発電所がくるということでも、いろいろといわれているように、安全性について研究が充分になされていると言われても、やっぱり自分のところにくるとなるとまた違う反応をするかもしれません。やはり感情的に、もしかしたら危ない、というように。

具体的には、やはり高レベルのものが含まれているということで、放射能汚染が心配になります。

放射能汚染の心配は、たぶん大丈夫なんだろうけども、自分のそばにっていうと、やっぱりなんとなくできれば違うところにあればいいなっていう気持ちです。

今までなかったところにそういう処分場がくるって言うと、かならず周りは反対しますよね。ゴミなんかにしてもそうだし。なにか、マイナスっていうことはないけれども、なにかを処理するっていうようなものがくるっていうことは、なにかと感情的になりますよね。

新聞なんかで見ていると、なんでそんなに反対するのかなと思うときもありますよね。でも反対に歓迎される施設というのもあるじゃないですか。なんとかホールであるとか。でもやっぱりなにかを

処理する場所とかっていうと、必要ではあるけれども、感情として、で、出来てしまえば出来てしまつたでまたなにも感じなくなってしまうんではないかとは思うんですけど、近くに出来るとかいったときにはある程度抵抗があるんじゃないかと思うんですけども。こんど近くにそういう処理する施設が出来るんだって、ていうふうに聞いて、ああ良かったねとはいわないですね。

それで、ちょっとでも事故があれば騒ぐことになるんだと。

こういう反対したくなる気持ちというのは、もし私だったらかなり確かにそういう気持ちが生まれてくると思う。理性と感情とか、本音と建て前みたいなもので、建て前としてはそういうものをつくってもかまわないですよ、というかもしませんが、本心では、えーここじゃなければよいのに、っていうふうにそういう感じになると思います。

(なんでそういう不安感が出てくるんでしょうか)

やっぱり、よくわからないから。それと例えば影響がすぐにわかるものってありますよね。雨で水が増えたとか、風でものが倒れたとか。ではなくて、この場合は、起きるとしたらいろんなものにじわじわと影響がくるわけですよね。そういうもんだと思うとよけいに不安が募ることになりますね。放射能汚染というものは、測定するとすぐに結果が出てくるとか、なにかのレベルを超えたとなれば大問題になるわけですけど、そういう場合じゃなくて徐々になにかの影響が出るかもしれないというか、そういう感じ。核実験をやった後のネバダの話とか。

いいものでも悪いものでも、ある程度年数を経なければわからないものってありますよね。少量だけれども後からあればよくなかったんだねっていわれても、いやだなっていうか。

こういうふうにいうと、放射能だからっていうことはないような気もしますが、でもおなじようなものであってもやはり放射能は特別なっていう感じもありますね。例えば、紫外線にしても、あとからあれば体に良くなかったんだっていわれていますけれども、やはり違いますよね。

さっきのビデオで高レベルのものは短い期間であれですけれども、弱いものは横這い状態でずっと残るっていうましたけれど、えっ、ずっと残るって、ていうふうになんとなく思いますよね。

(ずっと、っていうとどのくらいの期間だと思われますか)

ずっとっていうのは100年ぐらいですかね。100年ぐらいのものならあそこまでの処理はしないですね、きっと。だからやっぱり恐いものなんですかね、きっと。なんでもそういう裏表っていうことがありますものね。あそこまでするから安全なっていう風に思いますし、逆に、あそこまでするってきっとすごく危ないものなんだっていう風なぐあいからも、ねえ。

(感情的に納得しない、という人もいると思いますが、そういう人に関してはどう思いますか)

じゃあ、どうしたら良いんでしょう、っていうがんじ。例えばここに道路が出来るけど絶対に立ち退かない、っていうひとはいますよねえ。じゃあ、そういうかたはどこか他に移されたら良いんじゃないですか、というと、いや、ここは退きたくない、って、そういうことになってしまったらすごく解決のしようがなかなかないですね。なにかをつくるときに必ず、そういうことって起きますよね。じゃあ、どうしたらいいかっていうと、難しいですね。文句を言っている人にはどのようにでもしてあげるから、どうしてほしいのっていったら、単なるわがままになっちゃうし。そのまえで納得した人にとってはなんか損をしたようになりますし。

(地層処分の場合には、このような問題はどういう形で起きてくると思いますか)

地層処分の場合には、埋めてしまうので、表から見えなくなってしまうわけですよね。だからわりとその面ではいいかもしれない。そこになにかが建てられているっていうというものではないですね。埋めてしまえばそれで完了してしまうわけですね。そこにゴミの処理場が出来て、いつもいつもゴミの収集車が通るというわけではなく、一時的なものなので。もう完了しましたっていえるとい

うのは、これからずっと処分を続けていきますということよりは、かなり印象が違うと思います。具体的な施設の活動があって、それで迷惑をしているというものではないですから。

④さっきの画面をみていくと、岩盤近くまであんなに掘ったりいろんなことをして、なんか何にもなければな、と思います。悪影響はないのだろうかとか。ふつうは掘らないところまで深く。

石油を掘ったりとか、深く掘ったりとかはいろいろとなされているとは思うんですけども、そういうところは身近な場所ではないですよね。それで地層処分場っていって、何か近くのところを深く掘っているらしいと聞いたらやっぱりそんなことをしてだいじょうなの、っていうのは、なんか普通しないことをするって言うのは、処理のためにそんな深く掘ったりするって言うのは、そんなことをして大丈夫なのかな、とか。

⑤処分場をつくる場合には、地層とかきちんと調べてここが一番適当であろうという場所が選ばれるわけですね。そうすると多分そういうところというのはそんない大勢ひとが住んでいる場所ではないだろうと思います。そうしたらもしそのような近くに住んでいる方がいらっしゃれば、もしそこに処分場をつくるとなって、その方たちがその場所をどうしても離れるのは、っていうのでなければ移転されるっていうことを考えても、うーん、そうじゃないかもしれないけれども。

もある場所が、地層処分にもっともふさわしい場所だとわかった場合には、どこかに地層処分しなければならない以上、やっぱりそこに処分場をつくらなければならないと思う。そういう場所っていうのは、人里離れた場所っていうか、東京の近郊ではないっていうイメージがあるので、だったらそういうところにつくったらしいんじゃないか、という気がします。そこにはあまりひとは住んではないだろうから。もし近くに住んでいる方がいるんであれば、もし処分場の近くで生活していくのがいやな場合には、移るなりなんなりそういうことが出来るんじゃないかなっていうか。例えば、東京の近くにつくってみんなで移れなんていうことは絶対に出来ないとは思いますけれども。

どこかの村にダムを造るとかっていう場合には、その村が沈んでしまうからその人をどこかに移さなければ、ということになるわけですね。そういうイメージです。

今までにずっと放射能っていうのはどういうものかということがわからなかった時期があるわけですね。危険だということも充分に知らなかつたし、どういうふうにしたら安全に処理できるかということも知らないくて、結局、汚染された研究者というのもいたわけですよね。だから、研究しつくされてもうほんとに安全なのかもしれないけれども、でもどうなんだどうっていう、なんていうのかな、やっぱり知らないものに対する恐怖っていうか、そういう感じのところが放射能のはあるんだと思うんですね。

いまの研究されている専門家の方はもちろんそういう危険についてご存じだとは思いますけれども、過去にはあまり知られていなかつたということもあるわけで。キューリ夫人みたいに。いまは研究されて、間違いはない、っていう段階まで来ているんでしょうけれども、でも、もしかしたらこれではやっぱり充分ではなかつた、ということがもしかしたら出てくるかもしれませんよね。

事故とかは起こり得ないと思っていても、やっぱり起きますよね。例えば、チェルノブイリであるとか。日本でもなんかありましたよね。それと同じように、処理に関しても、研究ではこれで完璧、ということなのかもしれないけれども、やっぱりなんか、今までしてなかつたことですから、不測の事態があり得ないということはいえないわけですね。

[地層処分研究への信頼について]

安全を確保するためになされている努力に関しては、わりと信頼できると思う。

(非常に信頼できるとは言い切れない面っていうのは、なにかありますか)

いろんなことを考えちゃったんですけど、原発の事故ってありますよね。地層処分っていうことになると、最初の段階でもかなり密閉された状態となるので、それをまた密閉された空間においていくことになるわけですね。だから、”とても”も”わりと”も、なにもつかない”信頼できる”っていうかんじなんですけれども。原発の稼働中になにか事故が起きるというのに比べて、たとえ高レベルなものであったとしても最初から漏れないように密閉しているのであるから、より信頼できると思う。

信頼というに関しては、そんなにうたがっているわけではありません。だいたいよくやってはいると思うが、万が一という不測の事態の可能性も否定できない、という感じです。

[廃棄物を密封する技術は信頼できるか]

いま超高層ビルを見て、あれが倒れてこないだろうかと心配する人はいませんよね。それが霞ヶ関ビルがはじめに出来たときには、すごいなって思ってこれが倒れてきたらなんて心配しましたよね。だから今の技術っていうのはすごく信頼度はあがっていると思う。でも、このあいだも高速道路がひっくり返っちゃったりしているし。地上にたてるものよりも、地下に出来たものの方が、また不測の事態とか起きるのかな。でもこうして聞かれなければ、地上のビルやトンネルなんかと同じに考えていましたけど。

(埋める作業をする人についての信頼はどうですか)

こういう作業をする人については、厳しいチェックがなされるであろうという、漠然とした。 . . まあ、あんまり信頼とかを細かく疑う性格ではないので、まあいかっていうか。 . . あまり深く考えたことはありませんね。ただでも地中深くそこまで掘るっていうことは、悪影響ができるんじゃないかっていうのはさっきちょっと思ったんですけど、そういう技術とかそういうことについてはあまり思いませんでした。それだけの処理をすいいるっていうことであれば、そういうことは厳重にされているんじゃないかなっていう漠然とした信頼があります。

欠陥ビルとかいっても、当事者には手を抜いているっていうのはある程度わかっているわけですねえ。

だからそういうことをチェックする機関というものが出来るかもしれない。そういう機関がチェックした結果というのは割と信頼します。ただそういうところが出した結果が他からでてきたものと違うって聞くと、えーって驚くようなことはありますね。ただ地層処分の場合には、これが初めてなされることであれば周りの目もすごく厳しいですよねえ。だから、手を抜いていることがわかれれば大問題になるだろうから、そういう手抜きはありにくいのではないんでしょうか。

なにか問題が起きたときには、なにが悪かったかっていうことはきっとわかるんじゃないかと思うんですよ。だから、例えば、数字をゴマかすだと、違う数字を報告したとか、そういうことっていうのも、でそれがほんとに予測できなかったことなのか、それともこうしたために起きちゃったのかということもきっとわかっちゃうと思うので、まわりも初めてそうやって地層に処分するんだってことになれば、それなりに関心が集まることになると思うので、そういうことは出来ないんだろうっていう感じの。

[処分前の保管について]

廃棄物は、今までのところ多少はでてきているというお話ですが、それらについては特に問題というの起きていないのでしょうか？

(今は厳重に保管されています)

今は、厳重に保管されて地上にあるわけですよね。それから考えれば、厳重に保管してかつ地面の中に埋めてしまった方がより安全だなという気がします。

[その他]

(なにか他に聞きたいこととかありますか)

えっと、処分したあとって、結局完了して、でそうするってことまでなんか計画があるんでしょうか？それはもう跡地みたいな感じに。で、監視みたいなことで定期的に監視をするとか。

あと、処分完了までの過程がどのくらいの期間なのかなっていうことも、気になったんですけど。期間は一時的っていう風に感じているんですけども。

(これはどのくらいの期間ですか)

一時的っていうのは、一ヶ月くらいっていう。ビデオを見ると、ダダダダダ、っていうかんじなので、でも岩盤に達するまで掘って、っていうことですよねえ。そう考えると一ヶ月じゃとてもすまないかも。そうしたら、ゴミ処理場の方がましたかも、なんていっているかもしれない。なんにしても、分からないうちにね、それがネックになっているっていうか。だからたぶん最初に納得した形で、ああ、こういうことだし、安全だし、って納得しても、後になってやっぱり話が違うじゃないか、っていうことは、こういうことではきっとよくあるんじゃないかなって。いま私でも、長いってどのくらいですか、ってきかれて、あ、そういうわけわざがちょっと考えたあれぐらいでは終わらないかもしないって、おもうと、あ、やっぱりみたいなんになつて、だからすごくその最初に処分をするまでの説明だと、そういうことはすごく大事っていうか。当然のことですけれども。そういうのをすごく誠実にしなくちゃいけない。だから例えば、このぐらいの影響っていうのがもうすこし大きかったりすると、ものすごく問題になっちゃうかな。工事自体っていうか、放射能とかじゃなくて。さつき、ゴミ処理場の方はゴミを積んだトラックがたくさん通るからっていっただけれども、地層処分の場合も土を積んだトラックがたくさん通るかもしれないし。やっぱり同じことだったじゃないか、ってことになるかもしれないし。

あと、実際に埋めていく期間というのはどのくらいになるんでしょうか。一ヵ所に一度にうめたらそこはもう終わりっていうことなのでしょうか。それによってだいぶ違って、さっきビデオでやっていたように、今はたまっていないといいながらいきなりこんなにいっぱい固化体を並べてダダダダダっていう感じで埋めていってはい完了っていう風になるわけですねえ。ですけど実際は、何十年かそれ以上も継続的に埋設がおこなわれるわけなんですか。そうなると、さっき私がいったみたいに、地層処分場っていうのは、一時的に埋設工事をしてもそれはすぐに終わって完了っていう感じになるので、まあいいかなっていうしましたけど、それとは違うんであればまた違ってきますよね。そういう徐々に埋めて密閉するまでの期間っていうのはなんか不確かな状態っていうか、きちんと埋めてないっていうか。結局、ゴミ処理場も日々継続的に処理が行われるけれども、この地層処分場っていうのも長い時間継続的に処理が行われるんだとすると、結局同じじゃないかって。それだと考えちゃいますね。ビデオを見ていたら、ババっと掘って、ダダダって埋めて、はい完了しましたっていう感じだったものですから。そうするとたぶんきっとなにか、話違うよねっていう。

2. 第2回ヒアリング内容

(1) 日常的なことがらについて

a.水道管の故障

当面水道が使えないということが、とにかく困ったことですね。

b.放置自転車

やっぱり、駐輪スペースをゆったりとるなど、きちんと出来るようにならなければどうにもしょうがないんで。わたしは自転車に乗らないんですが、ちゃんとスペースがあつてもちょっと止めたりとか、そういうことは見かけますけれども。自転車でいうと、私はほとんど関係がないのでそれがすべてだと思います。

(では、ゴミの集積場で当日朝ではなくて前の晩からゴミを出してからすが散らかしてしまう、っていう問題に関してはいかがですか)

ゴミですと、まだいいふ考えが変わるものも、やっぱりまず個人個人がある程度のルールは守らなければいけないと思うんですよね。またある程度、みんなが気持ちよく使えるように整えるっていうことも、いとわないっていうか。それからまずは張り紙などで呼びかけてみたり。

(実際に、保坂さんご自身はそういうことをなにかやろうと思いませんか)

状況によってあれですけれども。いまのわたしの状況に当てはめていえば、管理人さんがやってくれるので、私が配るではなく、管理人さんとかにどうでしょうねっていう風にお願いすることになるとは思いますけれども。自分がなんかそういうものを書いたり配ったりとかはしようとは思わないんですけど。

で、そこの場所でまずルールを守るべきなので、役所などに片づけてくれとかいうのはちょっと違うと。自転車なんかの場合は、役所にいわなければならないっていう面もあるかもしれませんけれども。

c.年度末の道路工事

時間的に特に急いでいない場合はあれですけれども、まず自分の当面の用事が進まなくなることが一番問題だと思います。無駄な税金かどうかは分かりませんが、ほんとに必要な工事ももちろんやっているんでしょうけれども、なんか同じ場所を何回も何回も掘ったり埋めたりしているものよく見かけますし。みんなが税金のためとか何とかいっていますよね。

(住専とかはどうおもいますか。限られた人たちの決定によって迷惑を被るっていうことは)

わりとぼうっしているんで、強くなんとかっていうわけでわんないんですけれども、なにかのときに、確かにおかしいよねって。じゃあみんな署名を集めましょうとか、そういう風にはあんまりつながっていないかない。

(まあ、上の人々は基本的にはしっかり考えているだろうから、まかしてもいいかなって。)

そうともいえないですね。だんだん。なんかおかしいのに、それでも通ってしまうっていうのが、世の中あるんだなっていうか。みんなが変だなって思っているのに。なんとかしなきやっていうところまでいくには、毎日のその他の自分の日常が手一杯状態なので、じゃあそれをみんなで考える会を開こうとか、そういうちょっとバイタリティっていうのは、ないんですけども。まあ、そういう行動に今まででたことはありませんね。

d.電車の割り込み

例えはふつうに電車に乗るときに多少割り込まれても別に特にかまわないと思っちゃうんですけども。（自分の前に割り込まれても）特に割り込まれたことにより確実になにか自分に困ることが起きるのでなければ。

（スーパーのレジ待ちではどうですか）

その場合には、腹が立ちますね。買い物が少ししかない場合にはまあいいのですが、いっぱい持っている人が割り込んできた場合には、それはやっぱり、私並んでたんですけれどっていいたいです。

（隣のレジで割り込みを見た場合には、どう思いますか）

あんなところにわりこんじゃって、なんて、って思うでしょうけれども、隣のレジまで注意するというほどの気はないんですけども。まあぜんたおとしてはあまり気にする方ではありませんね。

e.お祭り

お祭りっていってやるからには、やはり盛り上がった方がいいと。それによってなんか雰囲気っていうのがあると思うんですね。みんなほどほどといいながら、ほどほどですうっといっちゃうよりも、なんか山があった方がやっぱりみんなにとってもいいんじゃないかということですよ。こういう場合でやるんだったら、多少の後かたづけなんかはしょうがないですね。どっかからクレームが付くとかがあればまた話は違いますけれども。

f.偏差値

でも結局そういう数字に表れるものっていうのもある程度はあると思うんですよね。偏差値が高くていい学校に行っているから優れている、逆にそうじゃないからダメなんだ、っていうような図式はいまはだんだん壊れては来ているんだとは思うんですけども、やっぱり実際にそういう場にたってしまえば、いい偏差値を取りたいっていう風になってしまいますよね。

g.職業

どれも魅力的ですねえ。すごく迷ってしまう。

（もし仕事の成功と家庭を取るとしたら、どちらをとりますか）

それはすごく難しい選択ですけれども、やはり家族を取ることになるのではないかでしょうか。

（どちらかといえば、社会にでてやりがいを見つけてみたいと考えていますか）

いまはその時期ではないと思いますが、そのうち子育てが住めばそういうことも考えてもいいかなって思っています。どんなことをやろうかなというようなイメージはあまりはっきりしていないのですが。

h.社会のあり方

（現状の社会はどうおもいますか）

目に付く悪い点としては、えー、なんでそんなことっていうことが通っているところがありますよねえ。犯罪とか。まあ国外と比べたら多いとはいえないのかもしれません。

特に最近印象が強かったのは、H I Vの薬害の問題ですね。ああいうことは起きないですんだかもしれないのに、という理不尽さを感じます。理不尽さっていうのは、自分に何の落ち度もないのにそういう被害に突然遭ってしまうっていうようなことが最近多いみたいなので。例えば、地下鉄のサ

リン事件みたいなこともそうですし。新聞でも地下鉄の方なんかで、こう、知らないでサリンをすつてしまってなくなられた方なんかもいらっしゃるようですし。乗客の安全を考えて立ち勧いたくなったりとか、なんか割にあわないっていうか。

他にも身の回りのささいなことでも、いいわよっていっているうちになんかいろんなことを押しつけられちゃったりしますよね。そうすると人間にはいろんな人がいるんだなって。そういう風に考えちゃうと、いろんな人がいるんだけれども、いろんな人がいてそれで人格を尊重した社会っていうのは、なかなかそれはちょっと、なんかそういうとちょっと矛盾かなっていう気もしますけれども。

(割にあわないっていう部分。誠実に生きていさえすればなんとかなる、っていうところが薄れてきていますか)

確かにそういうところもありますねえ。ただ、だからどんなことをしてもいいや、というようなところまではいっていませんが。ささいなことでもやってあげたらすごく感謝されたとか、最近でもそういう報われたっていうところもありますし。新聞に報道されるようなトラブルに巻き込まれない限りは、日々のそういうささいな事柄で生きていくんだなあっておもいますけれども。

ただ、薬害エイズなどのように、報道されていることは自分にとって身近なことではないので、新聞なんかで読んだりしたときには同情したりとか、そんなことってないよねって思ったりしても、それから目を離せば自分の生活ではとりあえずそういうことっておこっていないので、まあちょっと違う場所の話かな。

i.悪魔君

突飛な名前でも悪いイメージのものではなければ別にいいと思うので。まあ、子どもが困ってしまっては困りますよね。名前に関してはそのような名前を付けられた子どもがとってもかわいそうなので、本人っていうのは親のことですよね、本人さえ良ければっていうのはないですねえ。

(悪魔というような名前を役所なりで受け付けないようにするということはどうですか)

悪魔という名前を付けること自体には、とうてい賛成できませんが、それを役者が判断するとなると、そういう基準をどうするかっていう問題が必ずでてきますので、これは難しいですね。例えば、悪魔君はダメだけど、魔王君はどうかとか。そういうことは個人の取り方ですごく違うんで。

(こういう常識的な問題はみんなが従うべきだ、という風には考えませんか)

人に押しつけることは出来ないけど。そうですねえ。どちらかといえば常識的な範囲内で行動してほしいな、とは思いますけれど。

(目立つ名前の方がよいと思いますか、一般的な名前の方がよいと思いますか)

自分の子どもに名前を付けたときには、自分がそう呼びたいっていうことがあったんですけども。変わった名前でかわいいなっておもうときもたくさんありますけど、ただ自分の子どもにそういう変わった名前を付けようとは思いませんね。自分で呼びたいなって思うときには、多少、目立った名前でもつけますねえ。

j.コンピュータ

コンピュータが普及すれば世の中はますます便利になっていくし、コンピュータの方もどんどん進歩して人間と同じような性能を持つことも夢ではないような気がします。

(2) 地層処分に対する意見の整理

[地層処分に対する態度]

消極的な賛成の方でしょうね。どういう条件なら、っていうことよりも、どちらかというと他の処分のしかたよりも納得できるのではないかということなので、やっぱり、消極的に賛成、という方だと思います。

[地層処分問題に対する関心]

ミーハーな程度ですが。まあ関心はありますね。

(テレビ観でもし地層処分に関する番組が紹介されていたら)

その場合は、ああこんな番組をやるんだっていう感じで、見てみようかなとは思うけれども、どうでしょうね、まあそのあと忘れてしまうんじゃないでしょうか。

[地層処分の影響について]

① 放射能汚染があることについて

放射能汚染の問題というのは、一番大きな問題だとは思うんですけども、地層処分で汚染されるかどうかっていうことですけれども、なにかで固めてほんとに地中深く埋めて、クッションになるものもあって、なにかで漏れるようなことはないっていうそういうことがされているから汚染がないというのが前提になっていると思うのですけれども。放射能汚染は、どこにどう処分しても多少は汚染されちゃうんです、地層処分はそのなかで一番汚染が少ないんですよ、っていうようなものだったらこれは問題だなあ、っておもいますけれど。地層処分だったら汚染の心配がありませんよ、っていうことだったと思うので、この汚染の問題は地層処分の影響ということではないと思うのですけれども。だからこのことは、地層処分によって一番安全に処分できるという意味でメリットと考えられるものだと思います。

② 環境破壊について

環境破壊が多少あったとしても、高レベル廃棄物が処理できるのであれば、多少は目をつぶりましょう、っていうかんじですかねえ。

こういう環境破壊は、まあだいたい起きるかなっていうふうに考えていますね。

これは社会にとっての問題だとは思い増すけど、私の問題ではないですね。

③ 住み心地の劣化や不安感による感情的な反発について

過疎地に建設されるわけですよね。だから人が生活する場所からは切り放されているわけで、住み心地っていうのとはちょっと違うかなっていう感じなんですが。

(まあ過疎地帯だとしても、まったく無人の土地ではないんですけども)

でも地層処分がどうかっていうことよりも、そういう施設だったらどれにもまつわる問題ですよね。だから賛成かどうか判断に迷うっていうことではないんですけども。それでも大きな問題ではありますね。

これは地層処分だけではなくて、例えば原発なんかもあるわけですが。このあいだも、核燃料の輸送を扱ったの番組を見た分けなんですが、あれでも核燃料からでてくる放射線を測定する反対派の人がいて、その人の測定で通常の100倍ぐらいの放射線がでているって分かったのに、それがどのくらい影響のある放射線かは分かりませんけれども、それに対してはつきりとした説明がなかったっていうのはやっぱりまずいんじゃないかと。なんか、いいんだ、いいんだ、みたいな感じっていうか、

なにやってんだみたいな感じで、門前払いみたいなことをしているのを見ると、ちょっと印象が悪いっていうか。そういう感じだと、片方は不安だし理解を得られないし、だから安全性の確保というのと住み心地っていうのはすごく関連があるので。

(もし、元来危険なものではあるけれども、閉じ込めなどで完全に安全が確保されているとしたらどうですか)

感情的なことは、安全が確保されているということが一つ一つ丁寧に示されていけば納得していく面もあると思うんですよ。感情的には最初はいやだったけれど慣れちゃったっていうことは、人にはすごくあると思うんで。ただ、輸送のトラックに測定器を近づけたら、ビービーなっているような状態ではとてもだれも安全性が確保されているっていうか、信頼はしないだろうな、やっぱりすごく気になることだろうなっていう。

だからすごくそういうことを証明していけば、やはり大丈夫なんだよっていう状態になれるかもしれない。やっぱり信頼関係っていうのが一番だと思うんですよね。こういうものがあるんだけれども、あれだけやってくれているし、本人も誠実だし、大丈夫よって思えれば、問題はないと思うんですけども。

(3) 日常的なことがらと地層処分との連想について

[水道管の故障と地層処分]

電気。電力不足。夏なんかで電力が供給しきれなくなってしまうこと。これは水道の故障よりも困ったことになると思います。

[放置自転車と地層処分]

これぐらいならいいだろうって思っていると、やっぱりまずいよって。地層処分でも、処分する量がこれぐらいならいいんじゃないかな、って処分する側が思うのが一番悪いですね。これぐらいならまだ丈夫じゃないか、なんて。

[年度末の道路工事と地層処分]

表面的な仕事では困るっていうか。税金が余っているから工事しましょう、なんていう安易な考えでは、もっともっと慎重に仕事を進めていってほしいなっていうかんじですね。地層処分に関しても、なかでどういうふうに仕事をされているのか分からない部分があるので、そういうこともあるんじゃないかなと思いますね。

[電車の割り込みと地層処分]

お役所的なざるさ、見ていないとなにかずるいことをやっているんじゃないかな、っていうことがあるような気もしますね。役所で対応する人に対しても、割り込みをする入みたいに、文句を言っても無駄だというような印象もなくはないですね。原発のこのあいだの事故に関しても、最初、ないっていうようなものがあとででてきてるので、やはり誠実な対応をしているとはいえないんじゃないでしょうか。

[お祭りと地層処分]

いろんな価値観を持った人たちが歩み寄りをする、っていうことが大事なのではないでしょうか。

とにかく反対反対っていうだけではなくて、みんなで理解していこうという姿勢が大事かなっていうか。お祭りとの関連としては、やっぱり一緒にやろうよっていう姿勢っていうか。地層処分でも、地元だけの問題、みたいに限定しちゃうと良くないんじゃないでしょうか。

[偏差値と地層処分]

偏差値みたいな必要悪は、仕方がないんじゃないかっていう感じがしますね。まあ、必要悪に関しては絶対よくないっていうよりも、実際にあるものは仕方がないんだから認めましょうっていう気持ちのほうが強いですね。これだけ電気の恩恵にあずかっているわけですからね。

[職業と地層処分]

普段の生活においていちいち疑問を持たないで、まあこれが安定っていうような人が、まあそれだけやっていれば地層処分は大丈夫じゃないのって。またこのしばられずに、っていうことからくるイメージは、じゃあこれはどうなのっていう、いろいろな疑問点とか問題点とかをもっているっていう感じがするので、そうすればまた調べれば疑問がでできたりして、それを追求していくとまたなんかの疑問点がでできたりっていう、そういう人なんじゃないかと。

[社会のあり方と地層処分について]

人間味のある社会が反対するだろうっていうのは、人間重視だからやはりささいな影響も許さないぞっていうような感じが。結局、一人一人が納得するまでは動かないっていうか。経済が安定状態でいるっていうことは、あまり地層処分のことを問題視するとはあまり思えないかなっていう。経済を重視するっていうことはエネルギーの生産を重視するっていうことですから。経済がうまくいっていないっていうことは、いろんなところが不安定になるっていうことで、やはり大事なことではあると思うんですよね。経済的には不安定でも人間的には充実した社会っていうことは、あまり思い浮かびません。貧しいながらも楽しい社会、っていうことは、今の時代にはもうないんじゃないでしょうか。

[悪魔君と地層処分について]

みんなが納得できる常識的な合意を探していくっていうか。

(人それぞれの考え方があって、それが主張しあうことは仕方がないじゃないかっていう考え方にはしませんか)

仕方がないといついといろ議論していても、やはりなにかでこうとりまとめていかなければならない部分っていうのはどうしてもあると思うんですよ。その辺はすごく感じるところですね。やっぱりこうみんなが納得できる範囲でまとめていかなければならぬっていう場面はいろいろあると思うんですね。学校とかでも、みんなが勝手なことをいっていたら絶対にまとまりません。で結局、納得いかない場合は、まとまらないし、またまとまろうとして歩み寄ってもこないで離れていくっていうようになっちゃうと思うんですよね。

[コンピュータ技術と地層処分]

コンピュータでここまでいろんなことが出来るんだから、そういう核のゴミに関しても、研究されてより良い処分のやり方も見つかるのではないかと。

(科学技術は優れたものだから、処分についてもそのような研究開発をする人たちに任しておけば

安心ですか?)

技術は確かに優れたものだとは思うけれど、それを使うのは人間だから、やはり思わぬことが起きてし宇野は、仕方がないことでなはないですか。

参考資料 I. 2 主婦Dにたいする第二回ヒアリング資料

<第1回ヒヤリングについての整理>

氏名 主婦D さん

1. 地層処分について

(1)あなたは、地層処分をすることについて、どのように考えますか？

あてはまるもの1つに○印をつけてください

a.賛成である

○b.消極的ながら、賛成である

c.***という条件つきで、賛成である (条件：)

d.***という条件つきで、反対である (条件：)

e.消極的ながら、反対である

f.反対である

g.いますぐには、どちらともいえない (理由：)

h.わからない

i.どうでもよい

(2)地層処分の問題は、あなたにとってどのような問題ですか？

あてはまるもの1つに○印をつけてください

a.非常に関心がある

○b.かなり関心がある

c.わりと関心がある

d.どちらかといえば関心がある

e.ほとんど関心がない

(3)それでは、東京都のごみ処理問題についてはどうですか？

あてはまるもの1つに○印をつけてください

a.非常に関心がある

b.かなり関心がある

c.わりと関心がある

d.どちらかといえば関心がある

e.ほとんど関心がない

2. 地層処分の影響については、どのように考えますか？（いい影響、わるい影響）

あてはまるところに○印をつけてください。

(1) 影響

環境破壊

について

・問題の大きさ

a.非常に大きな問題であり、やはり地層処分には反対である

b.地層処分に賛成かどうか、判断に迷うほどの問題である

○c.判断に迷うほどではないが、大きな問題である。

d.大きな問題ではないが、多少は気になる

e.特に問題ではない

・確かにそう思う

a.確かにそう思う

○b.だいたいそう思う

c.よくわからないが、まあそうだと思う

d.ひょっとしたらそうかな、と思う

e.まったくわからない

・誰にとって問題となるか

-社会のみんなにとっての問題である

社会の問題

社会の問題ではない

+-----+-----+-----+-----+

○

-私にとって問題である

私の問題

私の問題ではない

+-----+-----+-----+-----+

○

(2)影響

住み心地の問題

について

・問題の大きさ

- a.非常に大きな問題であり、やはり地層処分には反対である
- b.地層処分に賛成かどうか、判断に迷うほどの問題である
- c.判断に迷うほどではないが、大きな問題である。
- d.大きな問題ではないが、多少は気になる
- e.特に問題ではない

・確かにそう思う

- a.確かにそう思う
- b.だいたいそう思う
- c.よくわからないが、まあそうだと思う
- d.ひょっとしたらそうかな、と思う
- e.まったくわからない

・誰にとって問題となるか

—社会のみんなにとっての問題である

社会の問題

社会の問題ではない

+-----+-----+-----+-----+
○

—私にとって問題である

私の問題

私の問題ではない

+-----+-----+-----+-----+
○

(3) 影響

放射能汚染

について

(特に意見なし)

・問題の大きさ

- a.非常に大きな問題であり、やはり地層処分には反対である
- b.地層処分に賛成かどうか、判断に迷うほどの問題である
- c.判断に迷うほどではないが、大きな問題である。
- d.大きな問題ではないが、多少は気になる
- e.特に問題ではない

・確かにそう思う

- a.確かにそう思う
- b.だいたいそう思う
- c.よくわからないが、まあそうだと思う
- d.ひょっとしたらそうかな、と思う
- e.まったくわからない

・誰にとって問題となるか

—社会のみんなにとっての問題である

社会の問題

社会の問題ではない

+-----+-----+-----+-----+

—私にとって問題である

私の問題

私の問題ではない

+-----+-----+-----+-----+

次の各質問には、選択肢が4つづつあります。いま、各質問ごとに持ち点が5点あるとして、それぞれの選択肢に自分の考え方があてはまると思う度合いに応じて点数を配分してください。

[1] 水道の故障

あなたの家の水道管が壊れて水が周囲にたくさんあふれ出してしまい、数日間水道が使えなくなってしまった。あなたはどのように思いますか。

- a. (2) 水道が使えなくなって、困ったものだと思う。
- b. (1) 周囲に迷惑をかけてしまい、すまないと思う。
- c. (1) 修理屋を呼ばなければならず、損をしたと思う。
- d. (1) 今まで何気なく使っていた水道を、改めて便利なものだと実感する。

電力不足（停電）。供給しきれない。

[2] 放置自転車

駅前の自転車の違法駐車がひどくなってきました。あなたはどのように思いますか。

- a. () 困ったことだと思うが、とくにどうしようとは思わない。
- b. () みんなが気持ちよく利用できるように、駅前をきれいにしようと思う。
- c. () 通るとき邪魔になるので、役所などに苦情をいう。
- d. () 駐輪スペースをゆったりとるなど、きちんとした街づくりをするべきだたと思う。

$$c+d=5$$

これくらいなら問題ないではまずいこと。

処分する側は影響ないといわれても、言われた側は納得しない。

[3] 道路工事

年度末の恒例でとなった道路工事によって、渋滞につかまってしまいました。あなたはどのように思いますか。

- a. (2) 車が前に進まず、困ったものだと思う。
- b. (1) ドライバーのみんなが迷惑するので、困ったものだと思う。
- c. (1) ずいぶん無駄な税金をつかうので、困ったものだと思う。
- d. (1) 道路工事などは、もっと計画的にやったほうがよいと思う。

表面的な仕事では困る。もっと慎重に／原発も同じ

[4] 割り込み

(不公平) 電車を待っていたら、列に割り込む人がいました。あなたはどのように思いますか。

- a. (1) とにかく腹が立つ。
- b. (2) 自分の前でなければないので、とくにかまわない。
- c. (1) 周りの人が気にしていないようであればなので、とくにかまわない。
- d. (1) 割り込んだ人には、誰かが注意したほうがよい。

誠意がない

[5] お祭り

町内でお祭りをやることになりました。どのようなお祭りがよいと思いますか。

- a. (3) とにかく楽しいお祭りにしたい。
- b. (2) みんなで楽しめるお祭りにしたい。
- c. () 楽しいお祭りもよいが、後かたづけのことも考えなければいけない。
- d. () 楽しいお祭りもよいが、ためになるものでなければいけない。

とにかく反対ではなく話し合いであゆみよる。必要なのでやるしかない場合は、妥協点を見いだす。自分勝手はよくない。

[6] 偏差値教育

- a. (1) とにかく偏差値は好きではない。
- b. () 偏差値の高い人に比べて不利になるので、よくないと思う。
- c. (2) 偏差値によって、人と競争しなければならないので、よくないと思う。
- d. (2) 偏差値を重視すると、人間的な教育ができなくなるので、よくないと思う。

必要悪。しかたがない。なくてすめばよいが、それでは済まない。

[7] 職業

- a. (2) 大企業に入って、安定した人生を送りたい
- b. (2) 個人的に独立した仕事をしていきたい
- c. (1) 気のあった人たちと、静かに暮らしたい
- d. () 企業にしばられずに、気ままに生きたい

a.が賛成しそう。疑問を持たない人

d.は反対しそう。疑問点をもつので

[8] 社会のあり方

- a. (1) 経済が安定している社会がよい
- b. (2) 人格を尊重し、人間味のある社会がよい
- c. (1) 犯罪が少ない公正な社会がよい
- d. (1) 金銭よりもライフスタイルが重要とされる社会がよい

a.は賛成しそう。b.はささいなことでも許さない。反対。理不尽、割に合わないと感じる

[9] 悪魔君

あなたは、子どもに悪魔君という名前を付けることについて、どのように思いますか？

- a. (1) あまり突飛な名前を付けるのはよくない
- b. (1) 将来、子どもが困るのでよくない
- c. (1) 名前は個人の自由なので、本人さえよければよい
- d. (2) 子どもの意志も尊重されなければならない

常識的な範囲で皆が納得できるものを見つけてゆく。歩み寄りがないとバラバラになってしまう。

反対だけ強調しても、浮き上がってしまう。

[10] コンピュータ

あなたは、コンピュータの能力について、どのように考えますか？

- a. () いくら技術が進んでも、人間と同等の能力を持つとは思えない
- b. (1) コンピュータが進歩すると、人間が疎外されるのではと、心配である
- c. (2) コンピュータが進歩すると、世の中が便利になるので、喜ばしい
- d. (2) 技術が進めば、人間と同等の能力を持つこともありうる

コンピュータによりいろいろなことができるのだから、将来的には、核のことに関しても研究が進み、よりよいやり方が見つかるかもしれない。専門家だけにまかせておけば良いというものでもない

参考資料Ⅱ ヒアリング結果の整理

- 表Ⅱ. 1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦A）
- 表Ⅱ. 2 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦B）
- 表Ⅱ. 3 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦C）
- 表Ⅱ. 4 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦E）
- 表Ⅱ. 5 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦F）
- 表Ⅱ. 6 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦G）
- 表Ⅱ. 7 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦H）
- 表Ⅱ. 8 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦I）
- 表Ⅱ. 9 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦J）
- 表Ⅱ. 10 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦K）

- 図Ⅱ. 1 第1回ヒアリング結果（主婦A）
- 図Ⅱ. 2 第1回ヒアリング結果（主婦B）
- 図Ⅱ. 3 第1回ヒアリング結果（主婦C）
- 図Ⅱ. 4 第1回ヒアリング結果（主婦E）
- 図Ⅱ. 5 第1回ヒアリング結果（主婦F）
- 図Ⅱ. 6 第1回ヒアリング結果（主婦G）
- 図Ⅱ. 7 第1回ヒアリング結果（主婦H）
- 図Ⅱ. 8 第1回ヒアリング結果（主婦I）
- 図Ⅱ. 9 第1回ヒアリング結果（主婦J）
- 図Ⅱ. 10 第1回ヒアリング結果（主婦K）

表Ⅱ. 1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦A) (1/8)

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	他より安全な方法。HLWのような危険なものが地上にあるのは良くない。地層はHLW処分にしかるべきところ。土地が狭い日本で有効に安全に処分できる。HLWの現在の保管状態が心配
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	「廃棄物のような危険なもの」、食品汚染を通じての影響を意識
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、生活財	電力消費量や便利さをあまり落としたくない。
科学技術の信頼	科学技術観	情報、信念	情報	人工バリアが破れ、放射性物質が漏洩するかもしれない。地層の化学変化、地震の影響、長期の健全性に不安。安全だと言われてももしものことが起こる。安全性の向上が必要
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意	情報、信頼、権威	専門的なことは専門家に任せた方が良い。専門家を信頼するしかない。専門家以外の人が賛否を言うのはおかしい。
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、権威、生活財	専門家以上にうまく進めらるとは思わない。安全を確保する努力は信頼できる。努力してもミスは起きる。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意	情報、信頼、敬意	研究者が安全に配慮しても、実作業（建設や処分）では限界がある。チュエルノブイルでは作業者が危険を認識していなかった。
自己責任	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、生活財	電力消費量や便利さをあまり落としたくない。エネルギーの節約は必要
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、権威、生活財	原子力発電所には基本的に賛成。エネルギー需要のため、原子力発電がある。エネルギーの節約は必要

表Ⅱ. 1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦A) (2/8)

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地層処分の優位性の理解	—	情報、信頼	情報	海中や宇宙等の処分に比べると地下処分は安全。土地が限られた日本で有効に安全に処分できる。
予測技術への信頼性	長期的予測	科学技術観	情報、信念	ビデオの内容はだいたい信頼する。安全確保の努力は信頼する。寿命が長いと人工バリアが保つかどうか心配。地層の化学的変化の影響が心配。努力はしてもミスや間違いはおきる。
	想定外事象の影響	不確実性に対する考え方	信念	安全だと言われてももしものことが起こりうる。 Chernobyl でも安全だと言っていたが、事故が起きた。
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	専門的なことは、専門家に任せる。信頼する。ビデオの内容はだいたい信頼する。努力や姿勢は信頼できる。意図的なごまかしはない。
	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	情報、信頼、敬意	努力してもミスや間違いは起きる。研究者がいくら安全に配慮しても実作業の段階では限界がある。安全だと言われてももしものことが起きる。
	組織を信用	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	処分場の建設中に地中での機械の故障、事故、人間のミスが起きる。バリアの中に埋め込むまでの間で作業する人の安全が心配。ニュース報道等も半分程度信頼している
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		
地層処分技術への信頼	科学技術観	情報、信念	情報	人工バリアが破れて放射性物質が漏洩する。地層の化学的変化、地震、長期的健全性が不安。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、敬意、権威	処分場の建設中に地中での機械の故障、事故、人間のミスが起きる。バリアの中に埋め込むまでの間で作業する人の安全が心配。 Chernobyl でも作業者が犠牲になった。阪神大震災では高速道路建設に手抜きがあった。ニュース報道等も半分程度信頼している
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		
現段階での実施への信頼	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	情報、信頼、信義、敬意	安全確保の努力は信頼する。努力や姿勢は信頼できる。意図的なごまかしはない。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、敬意、権威、権利	処分場の建設中に地中での機械の故障、事故、人間のミスが起きる。バリアの中に埋め込むまでの間で作業する人の安全が心配
将来実施への信頼	科学技術観	情報、信念		言及なし。

表Ⅱ. 1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦A) (3/8)

事実認識：生存に関するメリット・デメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWテロ利用		情報	情報	「廃棄物のような危険なものが地表にあるの好ましくない。」
放射能汚染による現在の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	医療等、放射線は生活の身近なところにもある。放射能だからといって一概に反対するのはどうか
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	言及なし
	放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	言及なし
原発事故の可能性の継続・増加(原発の増加)	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	言及なし
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	
放射能の危険性	放射能リスク	情報、信念、生命		言及なし
原子力発電のベネフィット	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、敬意、権利、生活財	原子力発電所は基本的に賛成。電力の消費量、便利さは落とさない。
作業員の負傷	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	情報、信頼、敬意	努力してもミスや間違いは起きる。研究者がいくら安全に配慮しても実作業の段階では限界がある。安全だと言われてももしものことが起きる。

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊	自然観（人間観）	情報、信念、信頼	情報、信頼	人家から離れた場所に処分するとなると自然破壊が心配である。
	脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威	実害はなくても、近くに住むのは感覚的にいやである。
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財	町中にはつくらないと思う。周りに人が住んでいないことが前提である。
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命	自分の町に建設するとなったら、絶対安全だという確証がない限り反対。
感覚的不安感の発生		情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命		言及なし

表Ⅱ. 1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦A）(4/8)

事実認識：経済・産業のメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地元社会の向上	経済成長	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	文化の向上	脱物質主義	情報、信念、權威	言及なし
	民主性の向上	權威主義	情報、権利、權威	言及なし
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、權威、権力、生活財	言及なし
	秩序の向上	權威主義	情報、権利、權威	言及なし
電力の安定供給（経済成長）	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財	電力の消費量や便利さはあまり落としたくない。
原子力産業の活性化	経済成長	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	科学技術の進歩（生活の利便性）	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし

事実認識：経済・産業のデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
風評被害	経済停滞	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	イメージの低下	權威主義	情報、権利、權威	言及なし
農林水産業の事業機会の喪失	経済の停滞	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	民主性の低下	權威主義	情報、権利、權威	言及なし
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、權威、権力、生活財	言及なし
	秩序の低下	權威主義	情報、権利、權威	言及なし
処分場建設コストの発生（経済負担）	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし
電力コストの増加（経済負担）	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし

表II. 1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦A) (5/8)

事実認識：政治・社会のメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地域社群の重度の向上	社会の経済成長 文化の向上 民主性の向上 秩序の向上	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし
		脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし
		権威主義	情報、権利、権威		言及なし
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財		言及なし
	発言権の向上	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
権力の保持 権威の発生 生活財の確保	信頼の育成	責任感	情報、信義、権利		言及なし
	権力の保持	権力主義	情報、権利、権力		言及なし
	権威の発生	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
	生活財の確保	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし

表Ⅱ、1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦A) (6/8)

事実認識：政治・社会のメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
エネルギー資源の海外依存度の低減	エネルギー確保	経済成長	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
		文化の向上	脱物質主義	情報、信念、権威	言及なし
	民主性の向上	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		言及なし
		秩序の向上	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
	将来への負荷の低減	経済成長	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
		文化の向上	脱物質主義	情報、信念、権威	言及なし
		秩序の向上	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
		エネルギー供給	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	言及なし
			世代間の不公平	情報、信念、信義、生命	言及なし
国際社会におけるリーダーシップ(发言権の向上)	信頼の育成	責任感	情報、信義、権利		言及なし
	権力の保持	権力主義	情報、権利、権力		言及なし
	権威の発生	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
	生活財の確保	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし

表Ⅱ. 1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦A) (7/8)

事実認識：政治・社会のデメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
リスク負担者と受益者との不公平(競争、競合、序列)	安全		情報、信念、生命		言及なし
	放射能の危険	放射能リスク	情報、信念、生命		言及なし
	住み心地	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、生活財、権威、権利	処分場建設場所に近い人には、不公平に思える。なぜここなんだと。移住するとしても、もっと生活環境の良い場所
		権威主義	情報、権利、権威		
	生活レベル	権威主義	情報、権利、権威		
	文化	脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし
	社会秩序	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
地元社会の緊張	利害の対立	安全	情報、信念、生命		言及なし
		放射能の危険	放射能リスク	情報、信念、生命	言及なし
		住み心地	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
			権威主義	情報、権利、権威	言及なし
		生活レベル	脱物質主義	情報、権利、権威	言及なし
		文化	権威主義	情報、信念、権威	言及なし
		社会秩序	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
	リスク負担	放射能リスク	情報、信念、生命		言及なし
	秩序の強化	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
	住み心地の劣化	質的維持	権威主義	情報、信念、権威	言及なし
		場所の維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
		安全性	放射能リスク	情報、信念、生命	言及なし
エネルギー行政の中央集権化		トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力		言及なし
住民疎外		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		言及なし

表Ⅱ. 1 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦A) (8/8)

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある	—	情報	情報	関心はかなりあり関連情報（報道）があれば、見る。エネルギーを使う以上関連はある。
自分にも責任がある	责任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、生活財	電力消費量や便利さをあまり落としたくない。いま、便利な方法があるのならばそれに頼ってしまう。エネルギー節約が必要

表Ⅱ.2 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦B) (1/4)

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	地上にあるよりは良いかもしれない。今の段階では、不安はあるが、地層処分を信頼する。原発に比べると人間に遠い。放射能が弱まり。人間への影響が少ない。地下にうめれば、人が近づくことはない。
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	現在、原発の廃棄物はどうなっているのか疑問、不安である。発生することも知らなかった。強い放射能が出てるので保管されていると思うが、保管方法、数量が公開されていない。明らかにされないのは問題があるからではないのか。人体への影響があるかもしれない。
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、生活財	原子力の恩恵はわからない。
科学技術の信頼	科学技術觀	情報、信念	情報	自然について全てを把握できていない。（地震予知ができない）研究内容は信頼できる程度は研究で明らかになるが、分からぬ点も残る。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意		言及なし
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、権威、生活財	原子力は役に立つとは思う。万一の事故を考えると賛成できない。新聞で作業者の被ばくの事を読んだことがある。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意		言及なし
自己責任	责任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、生活財	原子力の恩恵はわからない。
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、信義、生活財	原発は、今後増えていきそうなので良い面はあるとは思う。

表Ⅱ.2 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦B) (2/4)

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点	
地層処分の優位性の理解		—	情報、信頼	情報、信頼	地上にあるより良いかもしれない。研究が一番されている。他の方法は研究が進んでいないと感じる。	
予測技術への信頼性	長期的予測	科学技術觀	情報、信念	情報	自然について全てを把握できていない。地震予知ができない。ある条件下での安全性は説明しているが他の条件に言及していないので安全と言えない	
	想定外事象の影響	不確実性に対する考え方	信念	—	人間が想定したものでの処分すると予想外のことが起きたときに対処できない。	
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	情報、信頼	研究内容は信頼できる。地層研究をしていても人間には分からぬ部分はある。	
		人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	情報、信義、信頼、敬意	人為的な悪影響は考えていない。	
	組織を信用	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、敬意、権利	具体的な放射能の寿命や強さが示されていないので、研究が不足しているのかあるいは反対運動があるからなのかと感じる。	
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財			
地層処分技術への信頼		科学技術觀	情報、信念	情報	研究内容は信頼する。研究が一番なされているとも思う。人工バリア等の閉じこめについては本当かどうか分からぬ。研究でも分からぬことがある。人工バリアは地震の影響を受けるかもしれない。地下に漏れた放射能が土壤を通して地上に漏れ出す。	
原子力推進者への信頼		トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、敬意、権利	現在、原発の廃棄物はどうなっているのか疑問、不安である。発生することも知らなかった。強い放射能が出てるので保管されていると思うが、保管方法、数量が公開されていない。明らかにされないのは問題があるからではないのか。人体への影響があるかもしれない。	
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財			
現段階での実施への信頼		権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	情報、信頼、信義、敬意	研究が一番されているが、地層研究をしていても人間には分からぬ部分はある。ある条件下での安全性は説明しているが他の条件に言及していないので安全と言えない	
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼	人間が想定したものでの処分すると予想外のことが起きたときに対処できない。	
将来実施への信頼		科学技術觀	情報、信念	情報	地層研究をしていても人間には分からぬ部分はある。	

表Ⅱ.2 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦B) (3/4)

事実認識：生存に関するメリット・デメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
H LWテロ利用		情報	情報	言及なし
放射能汚染による現在の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	輸送時一時的でも地上にある場合は、強い放射能が出ているので人体への影響があるかもしれない。地層処分しても地震などにより人工バリアが壊れ放射能が地上に漏れ出す。長時間浴びる（1ヵ月位住む）と影響が出る。弱くても繰返し浴びると影響が出る。
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	レントゲンでも繰返し浴びると癌等になると聞いている。
	放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	言及なし。
原発事故の可能性の継続・増加(原発の増加)	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	言及なし。
	放射能の危険性	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	言及なし。
	原子力発電のベネフィット	放射能リスク	情報、信念、生命	万一の事故を考えると賛成できない。
作業員の負傷	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、敬意、生活財	今後、増えていきそうなので良い面もあるとは思うが、理由は分からぬ。
人間への信頼		情報、信義、信頼、敬意	情報、信義、信頼、敬意	原発では、作業者に影響があると新聞で読んだ記憶がある。

表Ⅱ.2 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦B) (4/4)

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊		自然観（人間観）			言及なし
住み心地の劣化		脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	輸送時一時的でも地上にある場合は、強い放射能が出ているので人体への影響があるかもしれない。地層処分しても地震などにより人工バリアが壊れ放射能が地上に漏れ出す。長時間浴びる（1ヶ月位住む）と影響が出る。弱くても繰り返し浴びると影響が出る。
感覚的不安感の発生			情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命		言及なし

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある		—	情報	情報	原子力については日常生活では考えないが報道（反対運動、事故）を通じて気がつく程度。
自分にも責任がある		責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、生活財	原発は役に立つとは思うが、原子力の恩恵はわからない。

表Ⅱ.3 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦C) (1/4)

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	現在、地上のどこかに保管されているHLWを、人間が生活している場所から、遠くに処分できる。隔離できるかもしれない。
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	放射性物質は何万年もなくならないと聞いたことがある。 低レベル放射能は何万年も残り、人体に絶対安全とは言えない。 高レベルは早くなくなると言うことだが、どのくらいの期間が不明である。
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財	生活の快適性を求めることが増えてきている。原子力発電に頼つて行かざるを得ない。
科学技術の信頼	科学技術觀	情報、信念		言及なし
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意		言及なし
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、信頼、権利、生活財	原子力発電を今後、他の方法に換えていけるのであれば換えた方がよい。太陽エネルギーにもっと力を入れるべきである。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意		言及なし
自己責任	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財		言及なし
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、信義、権威、生活財	自分たちが作っていることを考えると身勝手である。 このような問題もテレビで取り上げた方が良い。

表Ⅱ.3 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦C) (2/4)

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点	
地層処分の優位性の理解	—	情報、信頼	情報、信頼	研究されている中では、安全が確認されていると思う。海洋処分も良い方法ではないか。地震があっても地下よりは、人間から遠ざけられる。	
予測技術への信頼性	長期的予測 想定外事象の影響	科学技術観 不確実性に対する考え方	情報、信念 信念	言及なし 人間が考えられる可能性以外、想定外のことが起きるかも知れない。	
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用	権威者への考え方 人間への信頼	情報、信頼、信義、敬意、権威 情報、信義、信頼、敬意	情報、信頼、信義 情報、信頼	研究者の結論に対する信頼はどちらでもない。原発は安全には動いているが、地震予知などは研究されてはいるが予知できていない。 どのような人たちが進めていくのか判らない。
	組織を信用	トップダウン的決定への信頼 社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権威、権力 情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、敬意、権威	基本的にはまかせておけるのでは、大学、シンクタンク等
地層処分技術への信頼	科学技術観	情報、信念	情報	見えないところに処分することは心配である。完全に処分してしまうと。やり直しもきかないし、埋設後チェックができないので心配である。地震の衝撃でバリアが破れて放射性物質が漏れ出かもしれない。	
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼 社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権威、権力 情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、権利、敬意	係わっている人たちだけで進めていくのではなく、テレビ等で一般の人が知る方法があっても良い。テレビのニュースや特集番組であれば信頼できる。	
現段階での実施への信頼	権威者への考え方 社会システムの受容	情報、信頼、信義、敬意、権威 情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、信義 情報、信頼	処分に対して判断するに十分な知識がないのでいまのところどちらとも言えない。段階が進んでいけば安全だとは思う。 漏れてしまった時の対策を考えているか。	
将来実施への信頼	科学技術観	情報、信念	情報	言及なし	

表Ⅱ.3 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦C) (3/4)

事実認識：生存に関するメリット・デメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
H LWテロ利用		情報	情報	言及なし
放射能汚染による現在の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	人間が作り出した放射能があること自体が問題。放射能浴びれば害がある。汚染食物を通して被ばくする。目に見えないので遠ざけることができない。
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	放射性物質は何万年も残存する。低レベル放射能は何万年も残り、人体に絶対安全とは言えない。高レベルは早くなくなると言うことだが、どのくらいの期間か不明である。
放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	情報、信義	自分たちが作り出した放射能がずっと残ってしまう。 漠然とではあるが、子孫に影響が出るかも知れないと思う。
原発事故の可能性の継続・増加(原発の増加)	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	言及なし
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		
放射能の危険性	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	言及なし
原子力発電のベネフィット	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		言及なし
作業員の負傷	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	情報、信頼	作業者が放射能を浴びる可能性がある。

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊	自然観（人間観）	情報、信念、信頼		言及なし
	脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命	言及なし
感覚的不安感の発生		情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命		言及なし

表Ⅱ.3 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦C) (4/4)

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自己に関連がある	一	情報	情報	このような問題もテレビで取り上げた方が良い。係わっている人たちだけで進めていくのではなく、テレビ等で一般の人が知る方法があっても良い。
自分にも責任がある	责任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、敬意、生活財	自分たちが作っていることを考えると身勝手である。

表Ⅱ.4 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦E) (1/4)

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	必要悪。核廃棄物は発生することは許されない。しかし、発生したものは処分するしかない。地層処分が現在一番安全であれば仕方がない。放射能が消えてなくなる期間によっては、地層処分を認める。処分により人から隔離されるとは思うが、不安は残る。
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	いつまでの核廃棄物が残存してしまう。地層処分を当たり前に考えると、廃棄物がどんどん増えていく。原子力発電を使う限り増えていく。核廃棄物は、放射能を含むのでいやだ。身近なごみは、リサイクルが可能である。
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、生活財	原子力はなくなった方がよい。自分の生活には困らない。原子力からの電力分はなくてもかまわない。
科学技術の信頼	科学技術観	情報、信念	情報	言及なし
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意	情報、信頼	国も専門家の意見を聞いているはずであるから信頼できる。
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、信頼、敬意、生活財	原子力をやめて、現状で残った廃棄物は人知れない所に埋めてしまう。自然エネルギーを考えて欲しい。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意		言及なし
自己責任	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、生活財	電気を使ってごみ（核廃棄物）が出るとは考えなかった。ビデオと資料で初めて知った。日々の生活中では、リサイクルを心がけている。
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、信義、権威、生活財	普通のごみの場合は、国や自治体がリサイクルを推進していく必要がある。

表Ⅱ.4 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦E) (2/4)

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地層処分の優位性の理解	—	情報、信頼	情報、信頼	現在一番安全だとするなら仕方がない。ビデオでいっていることは信用する。安全については、専門知識を持った技術者を信頼するしかない。
予測技術への信頼性	長期的予測	科学技術観	情報、信念	言及なし
	想定外事象の影響	不確実性に対する考え方	信念	— 言及なし
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	安全については、専門知識を持った技術者を信頼するしかない。しかし、報道と技術者の意見が対立した場合は半信半疑になる。
		人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	言及なし
	組織を信用	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	処分場をつくる側でも、技術者が係わるので信用する。
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	
地層処分技術への信頼	科学技術観	情報、信念	情報	ビデオの内容は信用する。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、敬意、権威	国も専門家の意見を聞いているはずであるから信頼できる。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		
現段階での実施への信頼	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	情報、信頼、信義、権威	安全については、専門知識を持った技術者を信頼するしかない。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、敬意	万一の事故を考えてしまう。処分する過程での事故。処分後の事故が考えられる。放射能漏れが起きる。
将来実施への信頼	科学技術観	情報、信念	情報	言及なし

表Ⅱ. 4 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦E) (3/4)

事実認識：生存に関するメリット・デメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
H L Wテロ利用		情報		言及なし。
放射能汚染による現在の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	万一の事故で、放射能漏れが起き人体に影響が出る。癌になる。
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命		言及なし
原発事故の可能性の継続・増加(原発の増加)	放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	言及なし
	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	技術者の意見より報道を信頼する。技術者は現実から遠いところにいる。
	社会システムの受容		情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	
	放射能の危険性	放射能リスク	情報、信念、生命	事故のニュースで放射能の影響が報道されたのを聞いた。
原子力発電のベネフィット	社会システムの受容			言及なし
	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意		言及なし
作業員の負傷				

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊	自然観（人間観）	情報、信念、信頼	情報、信頼	核廃棄物が増えて、地球を汚す。自然を破壊する。地層に手を加えると自然ではなくなる。このような問題には多少大げさでもマスコミ報道を信用する。
	脱物質主義	情報、信念、権威	情報	生活するのに便利でも自然には手を加えない方がよい。
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義		言及なし
	生活空間の場所維持	物質主義		言及なし
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命	自宅の裏はいや、万一の事故を考える。人里離れた山の中に処分してほしい。
感覚的不安感の発生		情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命		言及なし

表Ⅱ.4 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦E) (4/4)

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある	—	情報	情報	原子力を身近には感じないが、原子力エネルギーはいやだと思っている。子どもの時大学での原発反対運動を見たときの印象が強い。原子力はなくなった方がよい。自分の生活には困らない。原子力からの電力分はなくてもかまわない。
自分にも責任がある	责任感	情報、権利、権力、敬意、生活財		言及なし

表Ⅱ.5 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦F) (1/5)

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	今ままでは、益々増えていく。比較的安全といわれる施設に置けることはよい。現状では、地層処分が良いと思う。自然界の中の放射能を考えると仕方がない。時間とともに減衰するので子孫への影響は少ないと思う。
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	1カ所に集中することで汚染も集中する。現在発生しているHLWは、地球の許容量を超えていて、専門的な研究がなされていても、汚染が絶対に起きないとはいえない。
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利	個人的には、大量の電力消費社会には反対。節電を心がけている。昔の生活に戻る方がよいが。しかし、経済発展を犠牲にした節電が必要になるなら、原子力もしかたない。
科学技術の信頼	科学技術観	情報、信念	情報	安全の確保は不十分である。原子力は原爆と同じ材料を使うので危険なイメージがある。科学は進歩しているので、このまま研究を継続していれば、もっと良い方法が出てくるかもしれない。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意	情報、敬意	原子力を始める前に、処分方法も含めて考えるべきであった。安全な処分方法がないなら原子力以外の方法をとるべき。いやなものは全て地方にもっていく。
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、信頼	公害等の事例をみても行政はが信じられない。世の中全体が自分の届かないところで動いている。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意		事故、トラブルが起きている。従業員の被ばくが報道されている。
自己責任	责任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、敬意	自分では、節電しているが他人には強制できない。自分たちの廃棄物が自分たちで還元できる方がよい。使用している人が自分たちの責任で処理すべき。
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、信義	固化体など不变のものが増えていく。人間がこのようなものを生み出すのは恐い。「臭いものには蓋」式の安易さがある。多くの人の目に触れないところにつくる。

表Ⅱ.5 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦F) (2/5)

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点	
地層処分の優位性の理解		—	情報、信頼	情報、信頼	今の段階では、良い方法である。ただし、科学は進歩しているので、このまま研究を継続していれば、もっと良い方法が出てくるかもしれない。	
予測技術への信頼性	長期的予測	科学技術観	情報、信念	情報	専門的な研究がなされていると思うが、汚染が絶対にないとは思えない。子どもたちに影響が出るかもしれない。岩盤や地下水の流れに変化が起きるかもしれない。	
	想定外事象の影響	不確実性に対する考え方	信念	—	言及なし	
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、 権威	情報、信頼、信義、敬意	専門家であるならもっと分かりやすく説明できるのでは。 多少心配な点があっても言及しないので疑わしい。専門家がどの程度その分野の権威であるか知らないので信用できない。	
		人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	—	言及なし	
	組織を信用	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、 権力	情報、信頼、敬意	専門家の説明がわかりにくいのは、行政サイドの主旨の範囲内で説明するから。安全確保は不十分。「臭いものには蓋」式の安易さがある。	
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財		映像を通しては正しい情報が伝えられている。しかし、悪いイメージだけが残る。原発と同じイメージ。違いは長期的であること。	
地層処分技術への信頼		科学技術観	情報、信念	情報	一ヵ所に集中することで汚染も集中する。厳重にバリアされても子孫への影響ができる可能性はある。安全性確保が不十分	
原子力推進者への信頼		トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、 権力	情報、信頼、敬意	多少心配な点があつても専門家や行政が言及しないので疑わしい。 安全な処分方法がないなら原子力以外の方法をとるべき。 安全確保は不十分。「臭いものには蓋」式の安易さがある。	
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財			
現段階での実施への信頼		権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、 権威	情報、信頼、信義、敬意	科学は進歩しているので、このまま研究を継続していれば、もっと良い方法が出てくるかもしれない。多少心配な点があつても専門家や行政が言及しないので疑わしい。	
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財	情報、信頼、敬意	安全確保は不十分。「臭いものには蓋」式の安易さがある。 みんな埋めた後にはわすれてしまう。	
将来実施への信頼		科学技術観	情報、信念	情報	もっと良い方法ができたとき地層処分したものはどうするのか	

表Ⅱ.5 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦F) (3/5)

事実認識：生存に関するメリット・デメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLW利用			情報		言及なし。
放射能汚染による現在の健康影響		放射能リスク	情報、信念、生命	情報	専門的な研究がなされていると思うが、汚染が絶対にないとは思えない。一ヵ所に集中することで汚染も集中する。人体、環境への悪い影響が起きる
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	情報	厳重にバリアされても子孫に影響が出るかもしれない。
	放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	情報	放射能レベルは時間が経つと下がるので、子孫への影響は少なくなると思う。
原発事故の可能性の継続・増加(原発の増加)	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、敬意	安全確保は不十分。「良いものには蓋」式の安易さがある。
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		
	放射能の危険性	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	固化体など時間的に不变のものが、増えてしまっている。悪事の決定的な証拠のイメージがある。
	原子力発電のベネフィット	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、権利、生活財	経済発展を犠牲にした節電が必要になるなら、原子力もしかたない。
作業員の負傷		人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	情報、信頼、敬意	事故、トラブルが起きている。従業員の被ばくが報道されている。

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊		自然観（人間観）	情報、信念、信頼		言及なし
		脱物質主義	情報、信念、権威	情報	固化体など不变のものが増えていく。自分たちの廃棄物が、自分たちで処理できるようにならなければいけない。HLWは自分たちでは処理できていない。地球の許容量を超えていて。
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命		言及なし
感覚的不安感の発生			情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命		言及なし

表Ⅱ. 5 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦F) (4/5)

事実認識：政治・社会のデメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点	
リスク負担者と受益者との不公平(競争、競合、序列)	安全		情報、信念、生命	情報	都市で電力を使う人と地方で廃棄物を受入る人で不公平が生じる。いやなものは全て地方にもっていく。多くの人の目に触れない場所につくる。	
	放射能の危険	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	本当は、恐いものだというイメージがあるが、それを隠していると感じる。	
	住み心地	物質主義・権威主義	情報、権利、権威、権力、生活財		言及なし	
	生活レベル	権威主義	情報、権利、権威		言及なし	
	文化	脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし	
	社会秩序	権威主義	情報、権利、権威		言及なし	
地元社会の緊張	利害の対立	安全	情報、信念、生命		言及なし	
		放射能の危険	情報、信念、生命		言及なし	
		住み心地	物質主義・権威主義	情報、権利、権威、権力、生活財	言及なし	
		生活レベル	脱物質主義	情報、権利、権威	言及なし	
		文化	権威主義	情報、信念、権威	言及なし	
		社会秩序	権威主義	情報、権利、権威	言及なし	
	リスク負担	放射能リスク	情報、信念、生命		言及なし	
		秩序の強化	権威主義	情報、権利、権威	言及なし	
		住み心地の劣化	質的維持	権威主義	情報、信念、権威	言及なし
		場所の維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし	
		安全性	放射能リスク	情報、信念、生命	言及なし	
エネルギー行政の中央集権化		トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、敬意	公告などの事例をもみても行政が信頼できない。 「臭いものには蓋」式の安易さがある。	
住民疎外		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、権利、権威、敬意	地元への説明会などで地域の人が十分に納得がいくような回答が必要。説明が、不十分なまま現実が先行する。反対意見にも耳を傾けるべき。	

表Ⅱ.5 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦F）(5/5)

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある	—	情報	情報	放射能漏れにより自分たちの子どもに影響が出るかもしれない で、自分との関連はある。
自分にも責任がある	责任感	情報、権利、権力、敬意、 生活財	情報、権利、敬意	電力を使っている人たちで処分すべき。都市で電気を使っている 人と地方で廃棄物を受け入れる人で不公平が生じる。

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

表Ⅱ. 6 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 （主婦G）(1/8)

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	それしか方法がないのであれば仕方がない。
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	放射能の漏れだしはないが、地殻変動で地上に戻されて地域住民が被ばくする。地層処分前の埋設中に廃棄物が地上にでてくる、あるいは作戦的に取り出される。火山活動で固化体が説けるかもしれない。
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし
科学技術の信頼	科学技術観	情報、信念		言及なし
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼 社会システムの受容	情報、信頼、権威、権力、敬意 情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、信頼、敬意 情報、信頼、権利、権威、生活財	絶対に安全とは言い切れないので、処分場決めるに当たり地元で反対運動が起きる。国の政策決定において何が話し合われ、何が決められたのか公開した方が良い。 大規模な工事に費用がかかる。処分方法の再検討が必要になる。税金を使う限り、最も有益なものに使わなければならない。 国にまかしておけばそう悪くはならない。国の交渉はどちらかと言えば信頼する。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意		言及なし
自己責任	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財		言及なし
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、信義、生活財	今、国民は真剣に考えていない。国から提示されることを信じるしかない。国民がもっと見張っていれば談合はなくなる。

表Ⅱ. 6 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦G) (2/8)

事実認識：地層処分の技術的適切性

-6-

主観的判断項目	背景となる主観的価値項	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地層処分の優位性の理解	—	情報、信頼	情報、信頼	他の処分方法に比べて安全性は高い。ただし、地層処分だと地球に溜まってしまう。宇宙処分が理想であり、研究を続けるべき。
予測技術への信頼性	長期的予測 想定外事象の影響	科学技術觀 不確実性に対する考え方	情報、信念 信念	言及なし 地殻変動によって地上に廃棄物が戻される。火山活動等の自然現象によって固化体が融けてしまう。
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用 組織を信用	権威者への考え方 人間への信頼 トップダウン的決定への信頼 社会システムの受容	情報、信頼、信義、敬意、權威 情報、信義、信頼、敬意 情報、信頼、敬意、權威、權力 情報、信頼、敬意、権利、權威、權力、生活財	情報、信頼、信義 情報、信義、信頼、敬意 情報、信頼、權威 放射能の減衰時間が分からない。ビデオでは実際の時間が不明。地震に対する安全性は本当に信じて良いだろうか。 放射能の影響がないようにする努力は信頼できる。 国的研究機関に対しては、信頼性で問題はない。
地層処分技術への信頼	科学技術觀	情報、信念	情報	ビデオで見た限り何重にもなっているので危険性はないような印象である。考える限りの悪い事態に対する防護の効果はある。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼 社会システムの受容	情報、信頼、敬意、權威、權力 情報、信頼、敬意、権利、權威、權力、生活財	情報、信頼、敬意	政治的なレベルでは、どちらかと言えば信頼できない
現段階での実施への信頼	権威者への考え方 社会システムの受容	情報、信頼、信義、敬意、權威 情報、信頼、敬意、権利、權威、權力、生活財	情報、信頼、信義、權威 情報、信頼	処分場選定に際しては、国的研究機関や大学の研究所が誰もが納得できるような資料を独自に公表すべき。2つの評価結果が異なつていれば、世論も真剣に取り組む。誰もが納得できる評価結果（リスクの最も低い場所の選定）であれば、住民運動は無駄である。 埋設作業中の事故による廃棄物が地上にでてくる。 作為的な取り出しの可能性もある。
将来実施への信頼	科学技術觀	情報、信念		言及なし

表Ⅱ. 6 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦G) (3/8)

事実認識：生存に関するメリット・デメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
H L Wテロ利用		情報		言及なし。
放射能汚染による現在の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	放射能の漏れだしはないが、地殻変動で地上に戻されて地域住民が被ばくする。健康上、人に害を及ぼす。
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命		言及なし。
	放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	言及なし。
原発事故の可能性の継続・増加 (原発の増加)	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	言及なし。
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	
	放射能の危険性	放射能リスク	情報、信念、生命	言及なし。
	原子力発電のベネフィット	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	従来の発電方式だけでは電力量の確保のできないため、原子力が必要となる。
作業員の負傷	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意		言及なし

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点	
環境破壊	自然観（人間観）	情報、信念、信頼		言及なし	
	脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし	
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威	情報、権威	見た目、景観、地域イメージが損なわれる。
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財	地域住民に対して交換条件の提示（補償）が必要
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	地層処分の問題は外から課されるものであり、絶対に安全でないと反対運動は起きる。
感覚的不安感の発生		情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命		言及なし	

表Ⅱ. 6 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦G) (4/8)

事実認識：経済・産業のメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地元社会の向上	経済成長	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財 政治家が地域振興のためにあえて誘致する可能性もある。
	文化の向上	脱物質主義	情報、信念、権威	言及なし
	民主性の向上	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	言及なし
	秩序の向上	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
電力の安定供給（経済成長）		物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財 従来の発電方式だけでは電力量の確保のできないため、原子力が必要となる。
原子力産業の活性化	経済成長	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	科学技術の進歩（生活の利便性）	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし

事実認識：経済・産業のデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
風評被害	経済停滞	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	イメージの低下	権威主義	情報、権利、権威	情報、権威 ごみ処理場と同じようにイメージが悪い。必要なものだが反対運動が起きる。
農林水産業の事業機会の喪失	経済の停滞	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	民主性の低下	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	言及なし
	秩序の低下	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
処分場建設コストの発生（経済負担）		物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財 大規模な開発に伴って費用がかかる。やるからには、費用より安全性が優先される。他の発電方法と廃棄物処分費用まで含めて経済性を再検討した方が良い。
電力コストの増加（経済負担）		物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財 お金が掛かるなら他の発電方法を開発すべき。原発は安いというイメージがあるが、地層処分にお金をかけると安くなくなるのは。

表Ⅱ. 6 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦G) (5/8)

事実認識：政治・社会のメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地域社会の重複の向上	社会の向上	経済成長	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財 政治家が地域振興のためにあえて誘致する可能性もある。
		文化の向上	脱物質主義	情報、信念、権威	言及なし
		民主性の向上	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
			社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財	言及なし
	発言権の向上	秩序の向上	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
		信頼の育成	責任感	情報、信義、権利	言及なし
		権力の保持	権力主義	情報、権利、権力	言及なし
		権威の発生	権威主義	情報、権利、権威	情報、権利、権威 反対運動により地域住民の反対意見が通るのであれば有効である。 最初から結果が決まっている場合は、無駄となる。
	生活財の確保	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし

表Ⅱ. 6 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦G) (6/8)

事実認識：政治・社会のメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点	
エネルギー資源の海外依存度の低減	エネルギー確保	経済成長	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財 従来の発電方式だけでは電力量の確保のできないため、原子力が必要となる。	
		文化の向上	脱物質主義	情報、信念、権威	言及なし	
		民主性の向上	権威主義	情報、権利、権威	言及なし	
		社会システムの受容		情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	言及なし	
		秩序の向上	権威主義	情報、権利、権威	言及なし	
	将来への負荷の低減	経済成長	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし	
		文化の向上	脱物質主義	情報、信念、権威	言及なし	
		秩序の向上	権威主義	情報、権利、権威	言及なし	
		エネルギー供給	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	言及なし	
		世代間の不公平		情報、信念、信義、生命	言及なし	
国際社会におけるリーダーシップ（发言権の向上）		信頼の育成	責任感	情報、信義、権利	言及なし	
		権力の保持	権力主義	情報、権利、権力	言及なし	
		権威の発生	権威主義	情報、権利、権威	言及なし	
		生活財の確保	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし	

表Ⅱ. 6 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦G) (7/8)

事実認識：政治・社会のデメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点	
リスク負担者と受益者不公平 (競争、競合、序列)	安全		情報、信念、生命		言及なし	
	放射能の危険	放射能リスク	情報、信念、生命		言及なし	
	住み心地	物質主義 権威主義	情報、権利、権力、生活財 情報、権利、権威		言及なし	
	生活レベル	権威主義	情報、権利、権威		言及なし	
	文化	脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし	
	社会秩序	権威主義	情報、権利、権威		言及なし	
地元社会の緊張	利害の対立	安全		情報、信念、生命	言及なし	
		放射能の危険	放射能リスク	情報、信念、生命	言及なし	
		住み心地	物質主義 権威主義	情報、権利、権力、生活財 情報、権利、権威	言及なし	
		生活レベル	脱物質主義	情報、権利、権威	言及なし	
		文化	権威主義	情報、信念、権威	言及なし	
		社会秩序	権威主義	情報、権利、権威	言及なし	
	リスク負担		放射能リスク	情報、信念、生命	情報 政治家が地域振興のためにあえて誘致する可能性もある。	
	秩序の強化		権威主義	情報、権利、権威	情報、権利、権威 選挙のために本当はリスクが小さくても退ける可能性もある。 住民運動等の争いが起きる。住民意見が通る場合はよいが最初から結果が決まっていると、双方（地元と国）とも時間と労力、金の無駄である。もっと有効に活用できる	
	住み心地の劣化	質的維持	権威主義	情報、信念、権威	言及なし	
		場所の維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし	
		安全性	放射能リスク	情報、信念、生命	言及なし	
エネルギー行政の中央集権化		トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、敬意	今、国民は真剣に考えていない。国から提示されることを信じるしかない。	
住民疎外		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、権利、権威、敬意	地層処分の問題は外から課されるものであり、絶対に安全でないと反対運動は起きる。	

表II. 6 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦G) (8/8)

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目	背景となる主観的価値項	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある	—	情報		言及なし
自分にも責任がある	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、敬意	国民がもっと見張っていれば談合はなくなる。

事実認識：高レベル廃棄物（H L W）処分の必要性

表Ⅱ. 7 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦H) (1/4)

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
H L Wのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	近くにあるより地下にあるので、多少危険でなくなる。処分方法が厳重であるように感じる。地下深いので取り出して悪用できない。固化体が壊れない。放射能がもれない。
H L Wによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	廃棄物の発生量が明確ではない。放射能は恐いものである。弱い放射能でも蓄積されると恐い。放射能はすぐに消えない。強い放射能により人も自然も壊されるされる。地震によりバリアが壊れて漏れ出し、地上まで上がってくる。施設がテロの標的にされる。
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、生活財	原発からの電気を使っている。
科学技術の信頼	科学技術観	情報、信念	情報	技術は、まあ信頼する。ただし、ビデオで言っていることは一方的であり、自分で判断する材料がないので信頼できない。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意	情報、信頼、敬意	実際に現場に行かない人（政治家）は信頼しない。 「安全」だけで済ませている。将来、なにが起きるか判らない。（地震の予知が当たっていない）
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、信頼、権利、権威、敬意	万一の対策を講じて欲しい。なにかあった場合の情報伝達が遅い。透明性を向上させるべきである。切尔ノブイリで実際事故が起きたが、お金だけですませている。対策はあってもなにか起きれば元には戻らない。 報道、新聞を結構信じる。左右されやすい。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意		言及なし
自己責任	责任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、敬意、生活財	ごみ処分場が増えるのは気になるが、現在の生活ではごみがどんどん出る仕組みになっているので仕方がない。リサイクルには協力している。H L Wが増えていくと埋める場所がなくなる。
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、信義、生活財	自分が平和なので子孫も平和であってほしい。人間として生きていける環境がまだある。なくなるとすれば、5世代くらい後

表II.7 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦H) (2/4)

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地層処分の優位性の理解	—	情報、信頼	情報、信頼	ビデオで言っている事は信頼できない。処分方法は厳重であると感じたが、地震の影響はある。
予測技術への信頼性	長期的予測	科学技術觀	情報、信念	地震の影響があるかもしれない。阪神大震災は予測できなかった。地震予知はなかなか当たらない（新聞報道を信頼した）。
	想定外事象の影響	不確実性に対する考え方	信念	何100年先には、何が起きるか判らない。
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	実際に現場に行かない人（研究者）は信頼できない。 ビデオは、安全面しか述べていない。ビデオで言っていることは信頼できない。
	組織を信用	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	言及なし
		トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	実際に現場に行かない人（政治家）は信頼できない。「安全」だけで済ませている。万一の対策も講じておいて欲しい。なにかあった場合の情報が伝達するのが遅い。透明性を向上させるべき。 報道、新聞を結構信じる。左右されやすい。
		社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	
地層処分技術への信頼	科学技術觀	情報、信念	情報	地震の影響が大きい。埋めてすぐには、強い放射能があるので、バリアが壊れると放射能が漏れ出すのでは。土壌にしみこみ地上まで浸透してくる。地下水や雨でながされ全ての水が汚染される。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、権利、権威、敬意	実際に現場に行かない人（政治家）は信頼できない。「安全」だけで済ませている。万一の対策も講じておいて欲しい。なにかあった場合の情報が伝達るのが遅い。透明性を向上させるべき。チエルノブイリで実際事故が起きたが、お金だけですませている。 報道、新聞を結構信じる。左右されやすい。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		
現段階での実施への信頼	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	情報、信頼、信義、敬意	実際に現場に行かない人（研究者）は信頼できない。 ビデオは、安全面しか述べていない。ビデオで言っていることは信頼できない。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、権利、敬意	対策はあってもなにか起きれば元には戻らない。「安全」だけで済ませている。万一の対策も講じておいて欲しい。
将来実施への信頼	科学技術觀	情報、信念	情報	近未来には何があるか判らない。人為的な活動（占拠、脅迫）等

表Ⅱ.7 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦H) (3/4)

事実認識：生存に関するデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
H L Wテロ利用		情報	情報	人為的な活動（占拠、脅迫）等が考えられる。ただし、取出しきれないと思う。
放射能汚染による現在の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	放射能は恐いものである。弱い放射能でも、蓄積されると恐い。土壤に漏れ出し、農作物や畜産物、空気を介して体内に蓄積される。体内にはいると排出されない。強い放射能を浴びると人も自然も壊れる。
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	放射能はすぐに消えない、強い放射能は100年、弱くても100年くらい残る。自然も壊され、人が住めなくなる。
放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	情報	自分が平和なので、子孫も平和であって欲しい。H L Wが増えていくと処分場がなくなる。子孫の生活が気になる。
原発事故の可能性の継続・増加 (原発の増加)	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼 社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権威 権力 情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財	言及なし
放射能の危険性	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	原子力発電を続けていくと、H L Wが増え、処分場も増えていく。
原子力発電のベネフィット	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財		言及なし
作業員の負傷	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意		言及なし

表Ⅱ.7 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦H) (4/4)

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊	自然観（人間観）	情報、信念、信頼	情報、信頼	現在は、人間として生きていける環境がある。人工的でない自然がある。HLWが増加して地層処分場の余地がなくなるかもしれない。
	脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命	バリアが壊れて土壤に漏れだした放射能により自然が壊される。人間が住めなくなる。
感覚的不安感の発生		情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命		言及なし

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある	—	情報	情報	原子力発電所からの電気を使っている。日常的に意識している。
自分にも責任がある	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、敬意	リサイクルには協力している。ごみ処分場が増えるのは気になる。HLWが増えると処分場がなくなるかもしれない。

表Ⅱ. 8 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦I）(1/4)

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	安全な保管方法として地層処分が挙げられる。将来は、無害な微量な放射能とする方法が見つかるまで保管しておくべき。地表から遠ざけるだけの処分では根本的な解決にはならない。地震があるので安全だといえない。
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	放射能を帯びた核のごみが長期に残存する。将来の人類、生物、環境にとってよくない。人工的な放射能である。強さ、量が違う。廃棄物処理よりも廃棄物の発生量を少なくすべき。放射能もそのまま自然界にもどせるような方法の研究をすべき。
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財	現在、電力の心配をしないでも良い暮らしに慣れているので原子力をやめるには努力が必要。節電等の国民の痛みを伴う方向に向かうべき。太陽熱、風力、地熱、廃熱を利用する方がよい。便利さを犠牲にせずに自然と共に存できればよい。
科学技術の信頼	科学技術観	情報、信念	情報	放射能のことが良く分かっていない。（核実験の理由の一つ）処分方法として実際に安全性が試されたわけではない。地震の影響を予測できていない。予想しないことが起きる可能性もある（地殻変動）。地中に手を加えた時の地表への影響は分かっていない。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意	情報、信頼、敬意	廃棄物処理の推進よりも廃棄物の発生量を少なくする方法を考えるべき。もし、放射能が地中に漏れだして被ばくしても責任の所存がはっきりしない。補償の問題は解決できない（広島、長崎での韓国人の例）。
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、信頼	各地に原子力発電所や原子力船に対して反対運動があるのは実際に危険性があるのだろう。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意	情報、信義、信頼	人間のやることでは、過去にも様々な失敗例があり、完全には解決できない。
自己責任	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、敬意	自然と共存することを考える。人間のエネルギー利用で発生する放射能は良くない。
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、信義、生活財	現在、電力の心配をしないでも良い暮らしに慣れているので原子力をやめるには努力が必要。節電等の国民の痛みを伴う方向に向かうべき。

表Ⅱ.8 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦I）(2/4)

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地層処分の優位性の理解		—	情報、信頼	情報、信頼	処分方法として実際に安全性が試されたわけではない。予想をしないことが起きる可能性もある（地震、地殻変動）。放射能を無害化できる方法が見つかるまでの一時的な保管とした方がよい。
予測技術への信頼性	長期的予測	科学技術観	情報、信念	情報	放射能ことは良く分かっていないでは。地震により人工バリアが壊れるかもしれない。地下工事の環境影響は予測できない。
	想定外事象の影響	不確実性に対する考え方	信念	—	予想をしないことが起きる可能性もある（地殻変動）。
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、 権威	情報、信頼、信義	地下のことを予測できると言っていたが疑わしい。阪神大震災は専門家が地震や被害規模を予測できなかった例である。強い放射能が短期間でなくなると言っていたが、どのくらいなのか判断できない。専門家は、具体的な数字を挙げて説明すべきであり、曖昧な表現は疑いにつながる。専門家は言葉遣いが違う。
	人間への信頼	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	—	言及なし
	組織を信用	トップダウン的決定への信頼 社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権威、 権力 情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財	情報、信頼、敬意	処分方法として実際に安全性が試されたわけではない。 人間のやることでは、過去にも様々な失敗例があり、完全には解決できない。放射能を無害化できる方法が見つかるまでの一時的な保管とした方がよい
地層処分技術への信頼		科学技術観	情報、信念	情報	粘土なり人工バリアが壊れ、放射能が地中にもれ出す。食物連鎖により汚染が人間にもおよぶ。放射能のことがよく分かっていない。大規模な地下施設の建設が地中環境や地表に影響するかもしれない。
原子力推進者への信頼		トップダウン的決定への信頼 社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権威、 権力 情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財	情報、信頼、敬意	廃棄物処理の推進よりも廃棄物の発生量を少なくする方法を考えるべき。もし、放射能が地中に漏れだして被ばくしても責任の所在がはっきりしない。
現段階での実施への信頼		権威者への考え方 社会システムの受容	情報、信頼、信義、敬意、 権威 情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財	情報、信頼、信義 情報、信頼、敬意、生活財	地層処分により放射能が完全になくなるわけではない。地表から遠ざけるだけの処分では根本的な解決にはならない。 放射能を帯びた核のごみが長期に残存する。将来の人類、生物、環境にとってよくない。
将来実施への信頼		科学技術観	情報、信念	情報	放射能もそのまま自然界にもどせるような方法の研究をすべき。

表Ⅱ.8 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦I) (3/4)

事実認識：生存に関するメリット・デメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
H.L.Wテロ利用		情報	情報	言及なし。
放射能汚染による現在の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	粘土なり人工バリアが壊れ、放射能が地中にもれ出す。食物連鎖により汚染が人間にもおよぶ。人工的な放射能である。強さ、量が違ひ生物、環境に影響がある。自然の放射能は人間に影響しない程度である。
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	放射能を帶びた核のごみが長期に残存する。将来の人類、生物、環境にとってよくない。
	放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	言及なし
原発事故の可能性の継続・増加 (原発の増加)	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	各地に原子力発電所や原子力船に対して反対運動があるのは実際に危険性があるのだろう。 原子力の放射能もそのまま自然界に戻せるような方法を研究すべき
	社会システムの受容		情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	
	放射能の危険性	放射能リスク	情報、信念、生命	人がエネルギー源として利用することによって発生する放射能は良くない。
	原子力発電のベネフィット	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	言及なし
作業員の負傷	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意		言及なし

表Ⅱ.8 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦I) (4/4)

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊	自然観（人間観）	情報、信念、信頼	情報、信頼	普段人間が手をふれていない地中ふかくに大規模な施設をつくることにより地中の環境に歪みが起きる。現在の生態系のバランスが崩れる。地中の歪みの影響が地表にも現れ可能性がある。
	脱物質主義	情報、信念、権威	情報	自然に存在する放射能は影響ないが、人工放射能は量が増えていく。人間がエネルギー源として利用することによって発生する放射能は良くない。
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威	言及なし
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財	言及なし
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命	言及なし
感覚的不安感の発生		情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命		言及なし

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある	—	情報	情報	人間のエネルギー利用で発生する放射能は良くない。
自分にも責任がある	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、敬意、生活財	節電等の国民の痛みを伴う方向に向かうべき。自然と共存することを考えるべき

表Ⅱ. 9 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦J) (1/4)

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	地層処分に関しては絶対的な安全はない。地層処分の実例があるわけではない。長期的に見ると地層処分の健全性は失われ、固化体自身に問題が起こり放射能が漏れ出す。埋めたままで補修やチェックが難しい。
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	原子力が続く限り、放射性の廃棄物は蓄積していく。微量でも蓄積すれば危ない。低レベル放射能も人体に影響があると聞いている。
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財	原子力はやめられないので絶対反対と言っても仕方ない。 原子力は地球に優しくないのでもっと優しいものを開発すべき。 低コストで大量エネルギーではなく。低コストで安全性の高いものを開発すべき。
科学技術の信頼	科学技術觀	情報、信念	情報	絶対の安全はないはず。何かデメリットがある。実例がないので、何が起きるか分からず。建築物でもそうだが100年以上で、長期的な健全性が問題になってくると思う。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意	情報、信頼、敬意	原子力は、とりあえず続く。原子力発電所は最初安全だと言っても最終的には何らかの事故が起きている。皆が不安だ正在に進めるのは民主的ではない。
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、信頼、権利、生活財	原子力は地球に優しくないのでっと優しいものを開発すべき。 低コストで安全性の高いエネルギー源、処分に困る廃棄物でないエネルギー源を開発すべき。安全にお金が掛かるのはおかしいが、経済的に余裕があれば安全を手に入れる。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意	情報、信義、信頼	人が加わることで、機械の性能が完璧であっても人為的なミスが発生し事故が起こる。
自己責任	责任感	情報、権利、権力、敬意、生活財		言及なし
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、生活財	原子力はやめられないので絶対反対と言っても仕方ない。

表Ⅱ.9 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦J）(2/4)

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地層処分の優位性の理解	—	情報、信頼	情報、信頼	地層処分に関しては絶対的な安全はない。何かデメリットもあるはず。
予測技術への信頼性	長期的予測	科学技術觀	情報、信念	長期的に見ると健全性が損なわれ、固化体に問題が生じ、放射能が漏れだし、地上に影響がおよぶ。長期の健全性には定期的な補修や検査が必要。
	想定外事象の影響	不確実性に対する考え方	信念	自然に手を加えることで何か問題が起きるかもしれない。絶対の安全はない。
	専門家の意見を信用	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	専門家が言うのだから良いとは思うが、自分たちには分からないので不安である。ビデオでは安全なことしか言わないので疑問である。専門家から見ても何かデメリットもあるはず。害がないと言われても信頼性は不安。
	組織を信用	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	専門家でも建前上、安全と言ってもその上には住めないだろう。低レベル放射能の影響があると専門家でも思っているので心配。
研究機関による優位性の提示への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、権利、敬意	候補地を伏せて置いて安全と言わっても現実的でない。地層処分しかないという専門家の意見を広めたいという印象がある。 考えた末の結論だとしてもいいとは言えない。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		
地層処分技術への信頼	科学技術觀	情報、信念	情報	地層処分に関しては絶対的な安全はない。長期的に見ると地層処分の健全性は失われ、固化体自身に問題が起り放射能が漏れ出す。埋めたままで補修やチェックが難しい。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	情報、信頼、権利、敬意	原子力発電所は最初安全だと言っても最終的には何らかの事故が起きている。皆が不安だ正在に進めるのは民主的ではない。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財		
現段階での実施への信頼	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、権威	情報、信頼、信義	現在は、最良かもしれないが、実際に処分する時期までに更に研究を進めて欲しい。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	情報、信頼、敬意、生活財	原子力が続く限り放射性の廃棄物は蓄積していく、増えれば増えるほど地層への影響は大きくなる。
将来実施への信頼	科学技術觀	情報、信念	情報	未来社会では。地層処分しなくとも良くなっていればよい。

表Ⅱ. 9 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係（主婦J）(3/4)

事実認識：生存に関するメリット・デメリット

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
H LWテロ利用		情報	情報	言及なし。
放射能汚染による現在の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	低レベルの放射能でも影響があると聞いている。地中に漏れだし、農作物を通じて人間に被害が及ぶ。自然でないものが体内に蓄積される。
放射能汚染による将来の健康影響	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	地層処分では、大量に集まればすぐに出ないとても長期的には人体に影響が出るかもしれない。
	放射能危険の永続性、子孫への影響	世代間の不公平	情報、信義、信念、生命	100年位（次世代）で処分場の健全性が失われる。200年位から放射能が地下水から農作物へうつる。200年後には、地下利用が進み処分場がじゃまになる。
原発事故の可能性の継続・増加（原発の増加）	原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、権力	原子力発電所は最初安全だと言っても最終的には何らかの事故が起きている。原子力は地球に優しくないのでもっと優しいものを開発すべき。低コストで安全性の高いエネルギー源、処分に困る廃棄物でのないエネルギー源を開発すべき。
	放射能の危険性	放射能リスク	情報、信念、生命	原子力が続く限り放射性の廃棄物は蓄積していく、増えれば増えるほど地層への影響は大きくなる。 チュルノブイリの原発事故でも人に被害がでた。
	原子力発電のベネフィット	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、権威、権力、生活財	原子力はやめられないので絶対反対と言っても仕方ない。
作業員の負傷	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意		言及なし

表 II. 9 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦 J) (4/4)

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊		自然観（人間観）	情報、信念、信頼	情報、信頼	自然に手を加えることにより何か問題が起きるかもしれない。地層処分のように地層深くを開発したことがないので何が起きるか分からぬ。
		脱物質主義	情報、信念、権威	情報	未来社会では。地層処分しなくても良くなつていればよい。処分に困る廃棄物のないエネルギー源を開発すべき。
住み心地の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	そのうえには住みたくない。専門家でも建前上、安全と言ってもその上には住めないだろう。
感覚的不安感の発生			情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命	情報、信頼、権利、生活財	埋めっぱなしなので、中で何が起こっているか分からぬ。

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある		—	情報	情報	原子力はやめられないので絶対反対と言っても仕方がない。安全と経済は天秤に掛ける。安全は経済的余裕があれば手に入る。
自分にも責任がある		責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財		言及なし

表Ⅱ. 10 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦K) (1/3)

事実認識：高レベル廃棄物（HLW）処分の必要性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
HLWのとじこめ	放射能リスクの緩和	情報、生命	情報	地層処分することで廃棄物が処分できる。
HLWによる放射能汚染	放射能リスク	情報、信念、生命	情報	地層処分の場所には限りがあり、長期間続けることはできない。原子力発電が続く限り廃棄物の処分が続けられる。
電力消費生活	物質主義	情報、権利、権力、生活財	情報、権利、生活財	原子力発電をやめることによりどの程度生活に影響があるのか判らない。生活レベルを落とせる場合と落とせない場合がある。昭和40年代のレベルであれば許せる。
科学技術の信頼	科学技術観	情報、信念	情報	科学技術は発展していくと思うが、それだけでない。人間中心だけでなく広い視野で豊かさを追求した方がよい。世の中には人がコントロールできない事があり、これをコントロールできると錯覚する事に問題の根元がある。
原子力推進者への信頼	トップダウン的決定への信頼	情報、信頼、権威、権力、敬意	情報、信頼、敬意	廃棄物処分の確実な方法がない内に原子力を始めたことが問題である。
	社会システムの受容	情報、信頼、権利、権威、権力、敬意、生活財	情報、信頼、敬意	現代社会は地球の秩序を乱している。原子力は根本的に地球の秩序をひっくり返しているようだ。原子力の根本的な思想として人が地球や森羅万象をコントロールできるという発想がある。
原発運転員への信頼	人間への信頼感	情報、信義、信頼、敬意	情報、信義、信頼、敬意	現場では安全だと思わなければ働けないので、安全性に疑問を持つ姿勢に乏しいという面がある。 原子炉の現場で運転に携わっている人は、危険があるかも知れない場所にいるので離れた場所にいる研究者よりも信頼できる。
自己責任	責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、敬意	現代社会は基本的に地球の秩序を乱している。人が生きている限り破壊は必然的に伴う。
社会全体責任	公共意識	情報、信義、権威、生活財	情報、信義	報道には、危険なものは良くないという姿勢が感じられる。

表Ⅱ. 10 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦K) (2/3)

事実認識：地層処分の技術的適切性

主観的判断項目	背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
地層処分の優位性の理解	—	情報、信頼	情報	地下の安全性や1万年先のことは判らないことが多いので現状では、反対である。しかし、解明できれば地層補分でも良い。
予測技術への信頼性	長期的予測	科学技術観	情報、信念	地震については、大丈夫と思うが、今の段階で埋めても良いと言えるほど長期間の現象予測はできない。
	想定外事象の影響	不確実性に対する考え方	信念	1万年の間には、地殻変動により処分場は隆起する可能性がある。
研究機関による優位性の提示への信頼	専門家の意見を信用	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、 権威	安全です。大丈夫ですというよりも、これだけ危険があるが、これだけの必要性もあると言った方が良い。本当に安全だと思って安全性を訴えているのは恐いことである。1万年先のことは判らないことが多く、それを大丈夫というのは驕りである。
	組織を信用	人間への信頼	情報、信義、信頼、敬意	科学者は疑問点を正しく理解するものであり理論的にこわさを理解している。
	トッピングダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、 権力	情報、信頼、敬意	言及なし
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財		
地層処分技術への信頼	科学技術観	情報、信念	情報	地下の安全性には疑問がある。地下の安全性や1万年先のことは判らないことが多いので現状では、反対である。
原子力推進者への信頼	トッピングダウン的決定への信頼	情報、信頼、敬意、権威、 権力	情報、信頼、敬意	原子力研究に携わっている人は、原子力のこわさを理解しているので、適切に進めることは信頼できる。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財		
現段階での実施への信頼	権威者への考え方	情報、信頼、信義、敬意、 権威	情報	地下の安全性には疑問がある。地下の安全性や1万年先のことは判らないことが多いので現状では、反対である。
	社会システムの受容	情報、信頼、敬意、権利、 権威、権力、生活財		言及なし
将来実施への信頼	科学技術観	情報、信念		言及なし

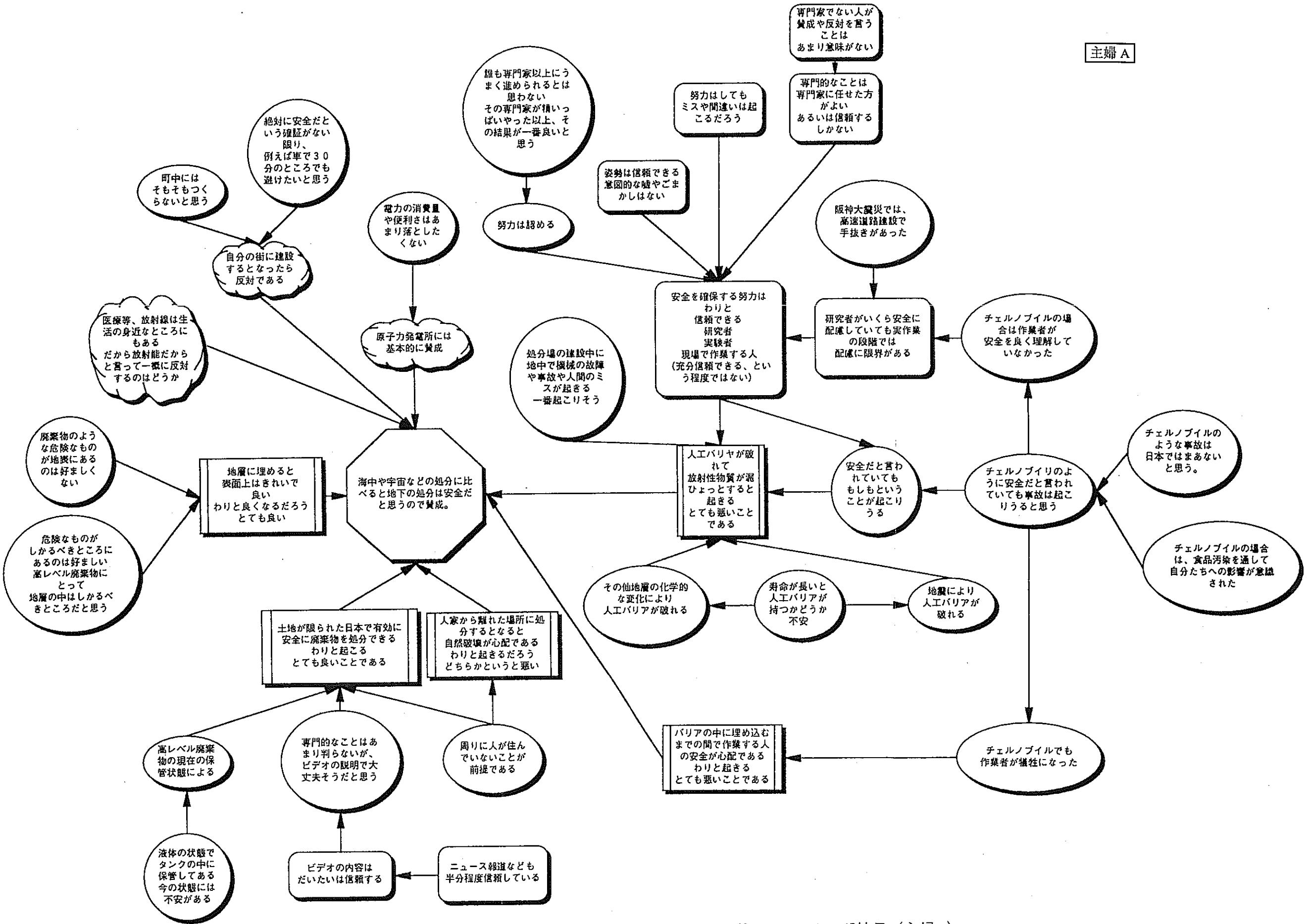
表Ⅱ. 10 事実認識と主観的判断項目および主観的価値項目との関係 (主婦K) (3/3)

事実認識：生活・環境でのデメリット

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
環境破壊		自然観（人間観）	情報、信念、信頼	情報、信頼	人が生きている限り破壊は必然的に伴う。
		脱物質主義	情報、信念、権威		言及なし
住み心地 の劣化	生活空間の質的維持	権威主義	情報、権利、権威		言及なし
	生活空間の場所維持	物質主義	情報、権利、権力、生活財		言及なし
	生活の安全性確保	放射能リスク	情報、信念、生命		言及なし
感覚的不安感の発生			情報、信念、信義、信頼、敬意、権利、生活財、生命		言及なし

事実認識：地層処分問題との距離

主観的判断項目		背景となる主観的価値項目	コミュニケーションの実質	事実認識の変化に有効な実質	論 点
自分に関連がある		—	情報	情報	生活レベルを落とせる場合と落とせない場合がある。昭和40年代のレベルであれば許せる。
自分にも責任がある		責任感	情報、権利、権力、敬意、生活財	情報、権利、敬意、生活財	現代社会は基本的に地球の秩序を乱している。人が生きている限り破壊は必然的に伴う。



主婦B

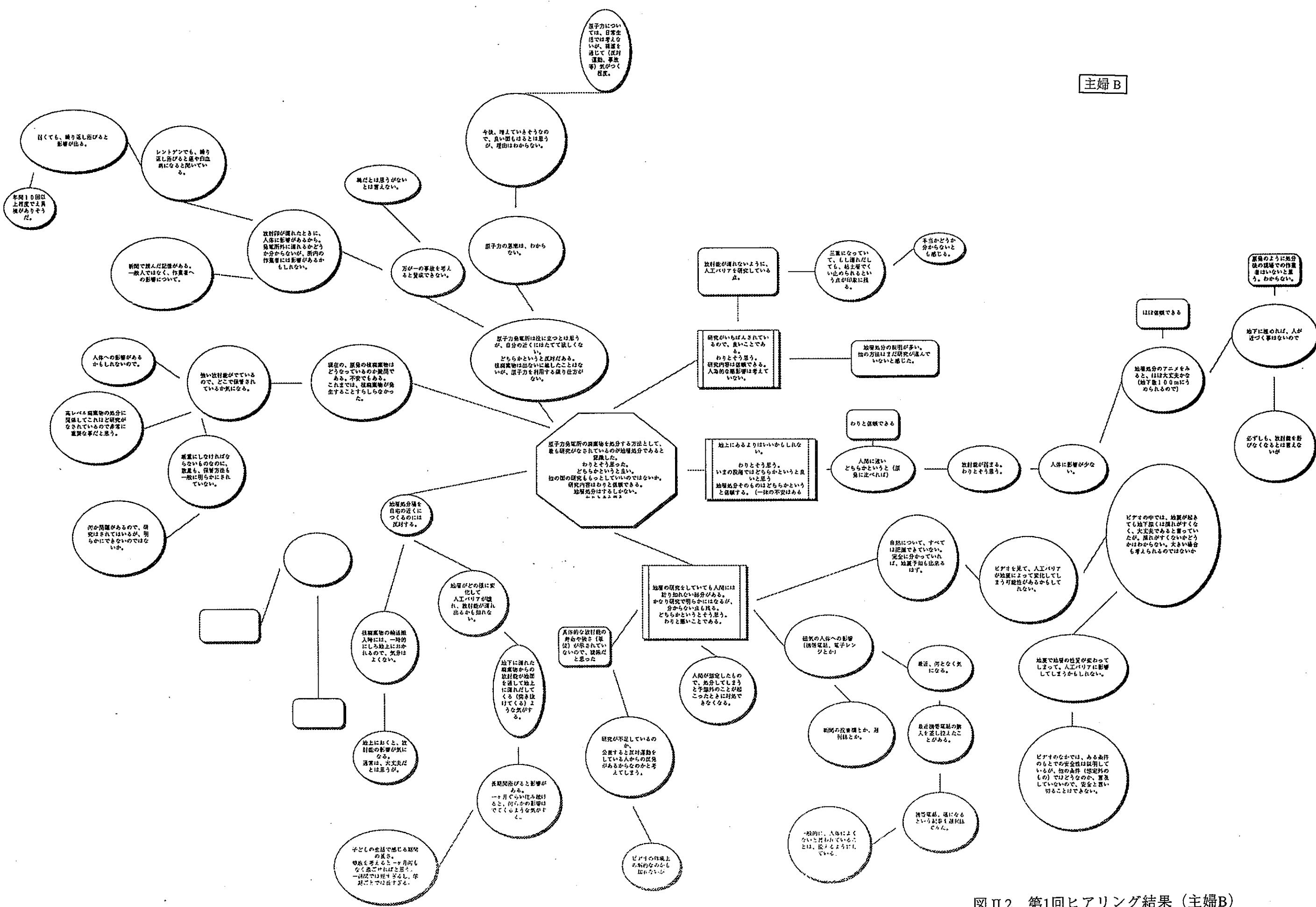
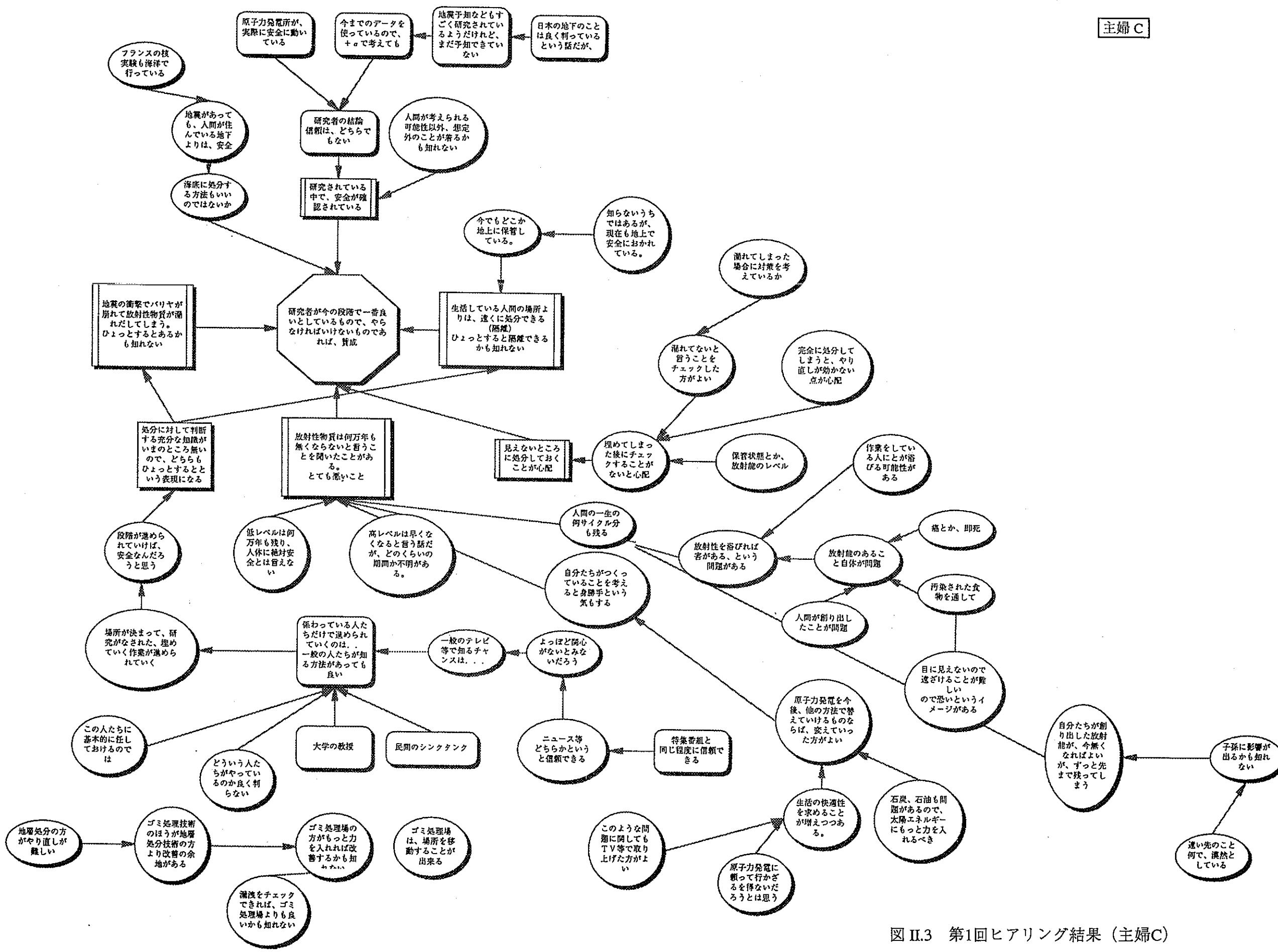


図 II.2 第1回ヒアリング結果（主婦B）

主婦 C



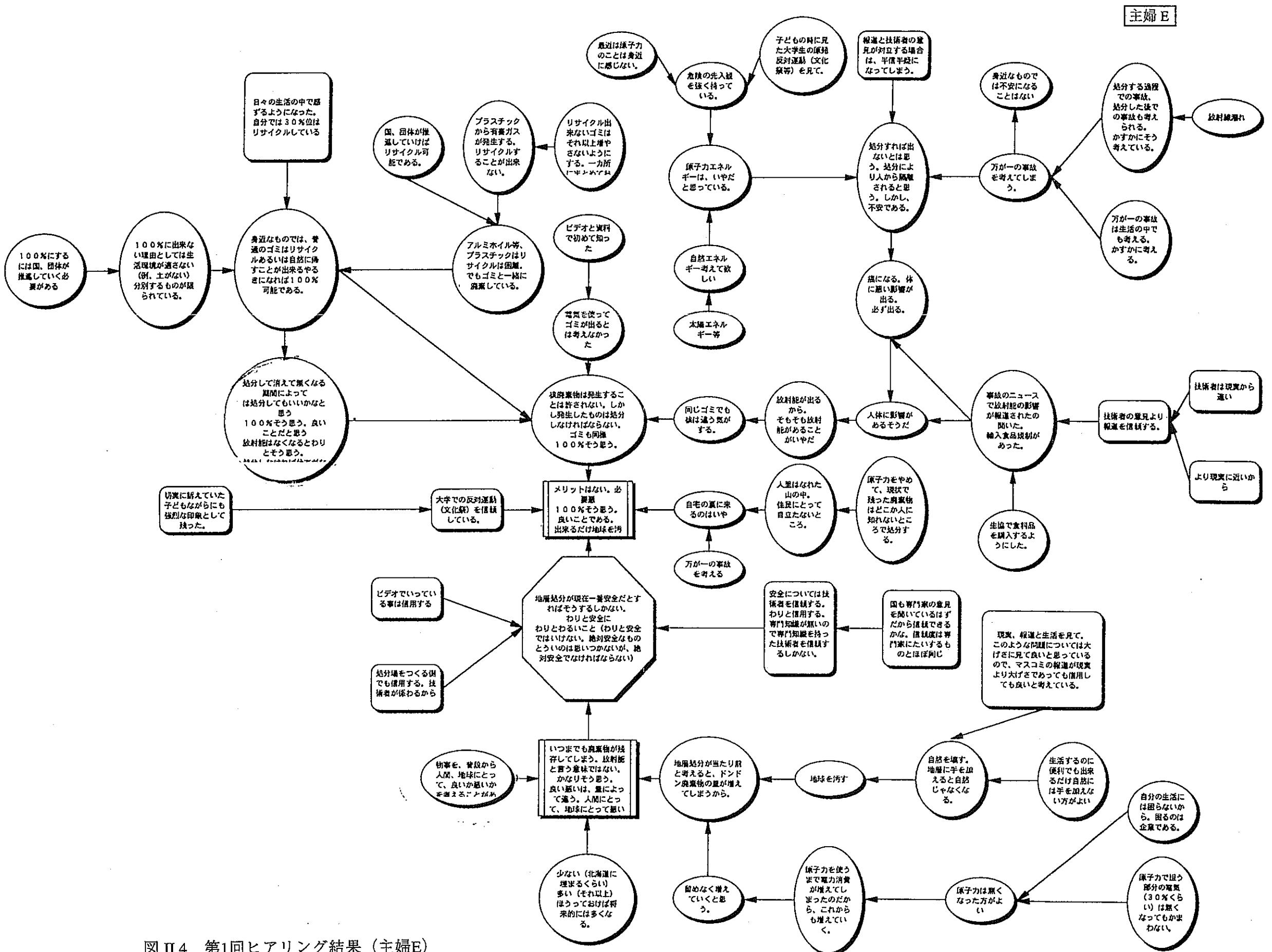


図 II.4 第1回ヒアリング結果（主婦E）

主婦 F

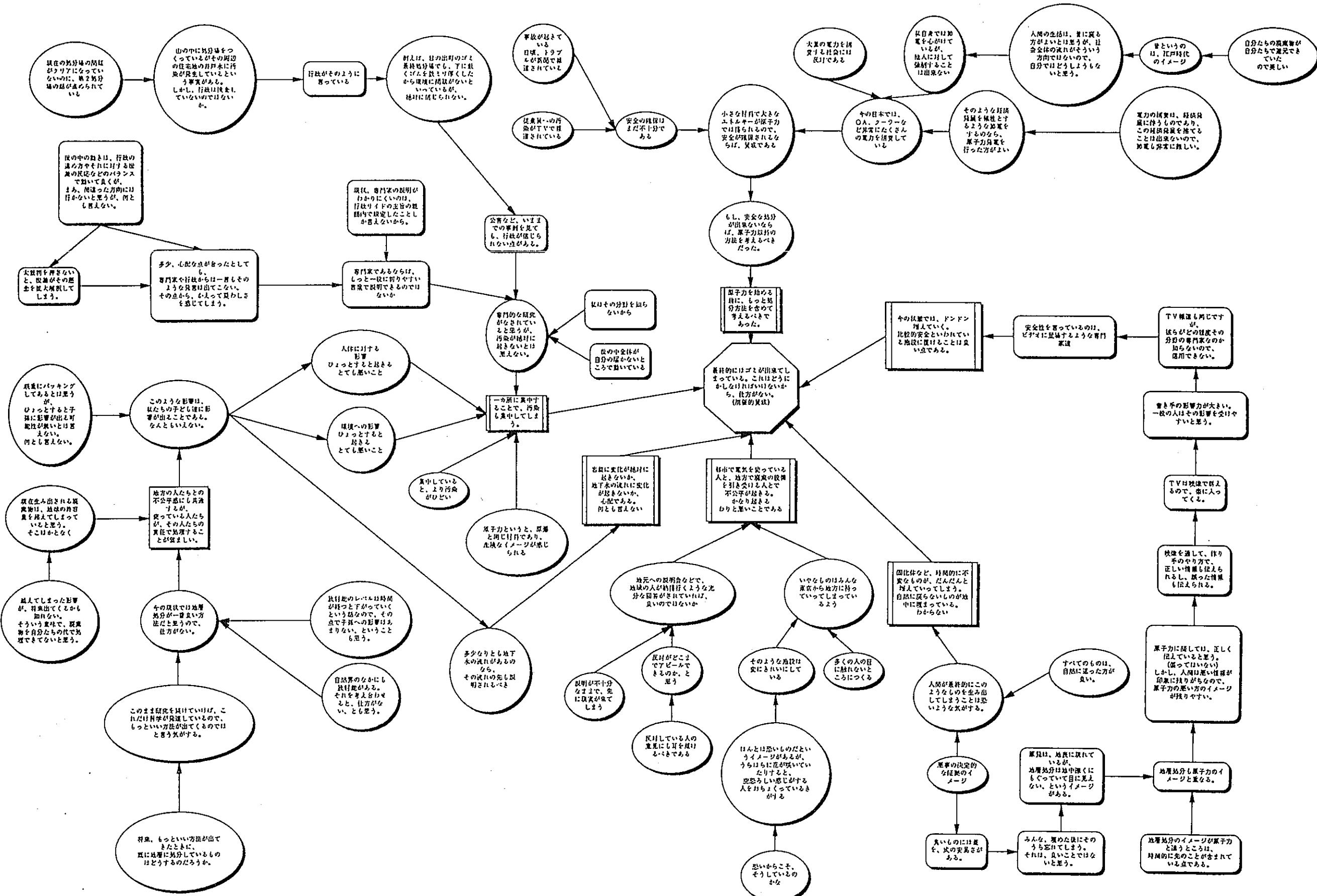


図 II.5 第1回ヒアリング結果（主婦F）

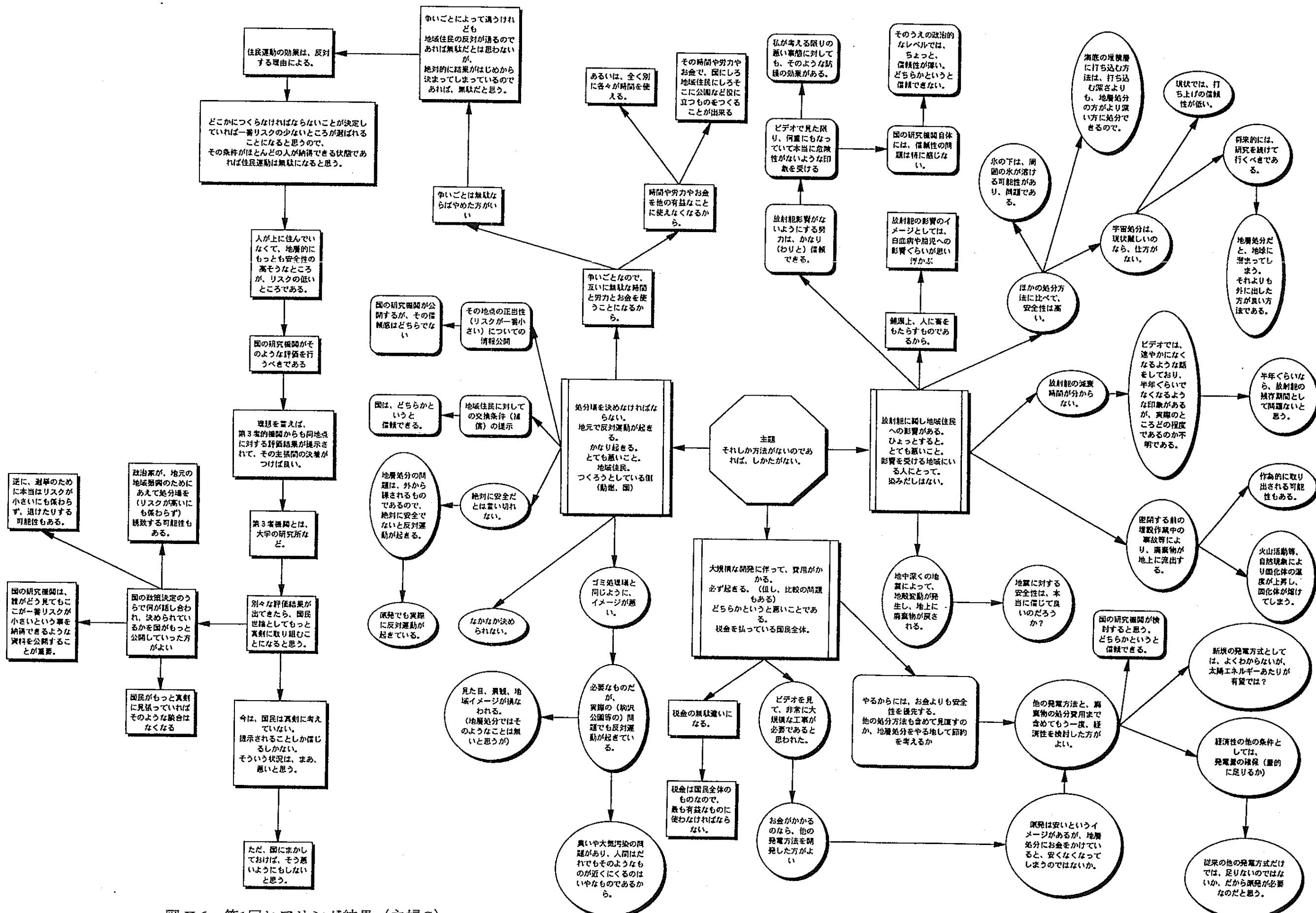


図 II.6 第1回ヒアリング結果（主婦G）

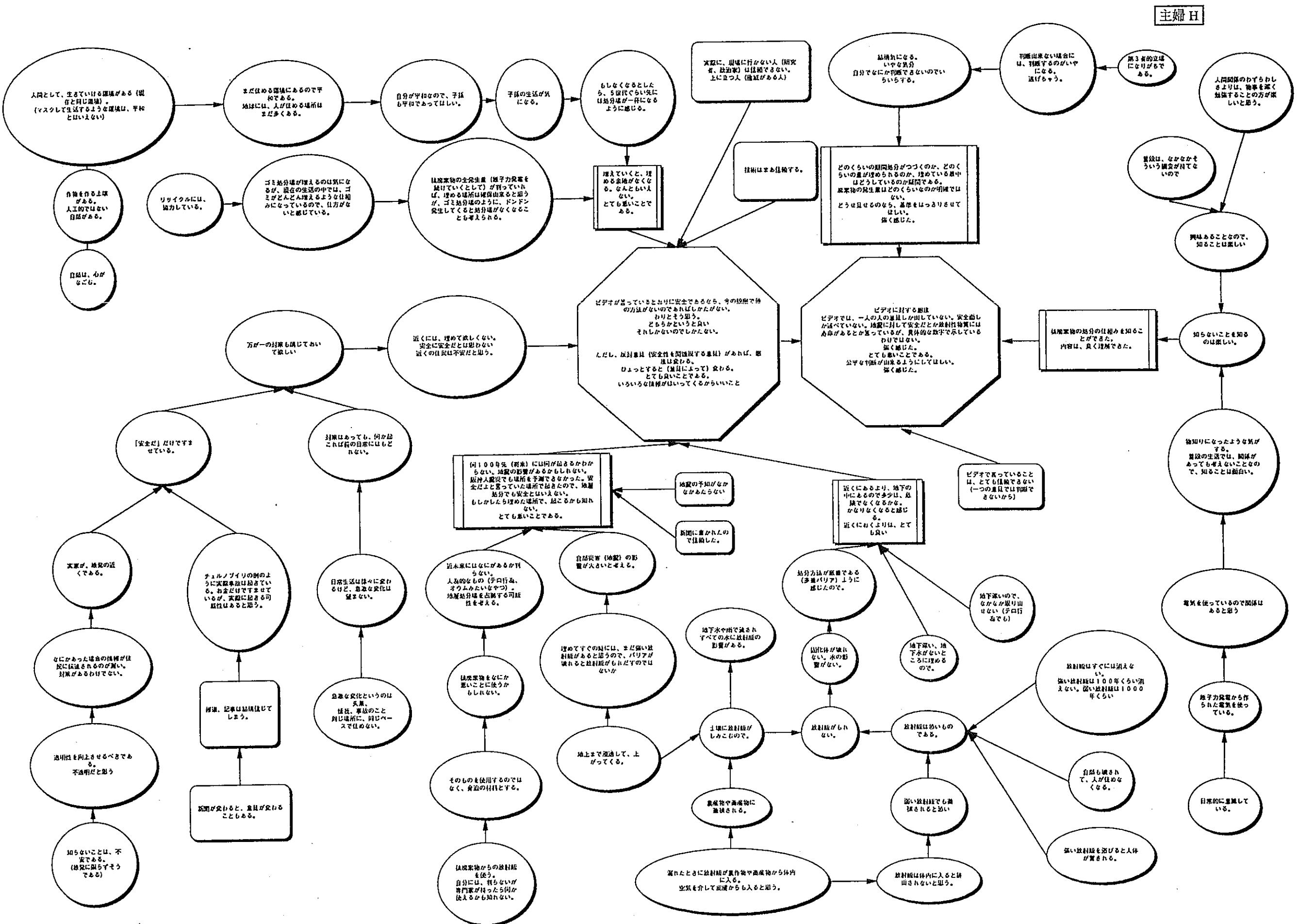


図 II.7 第1回ピアリング結果（主婦H）

主婦 I

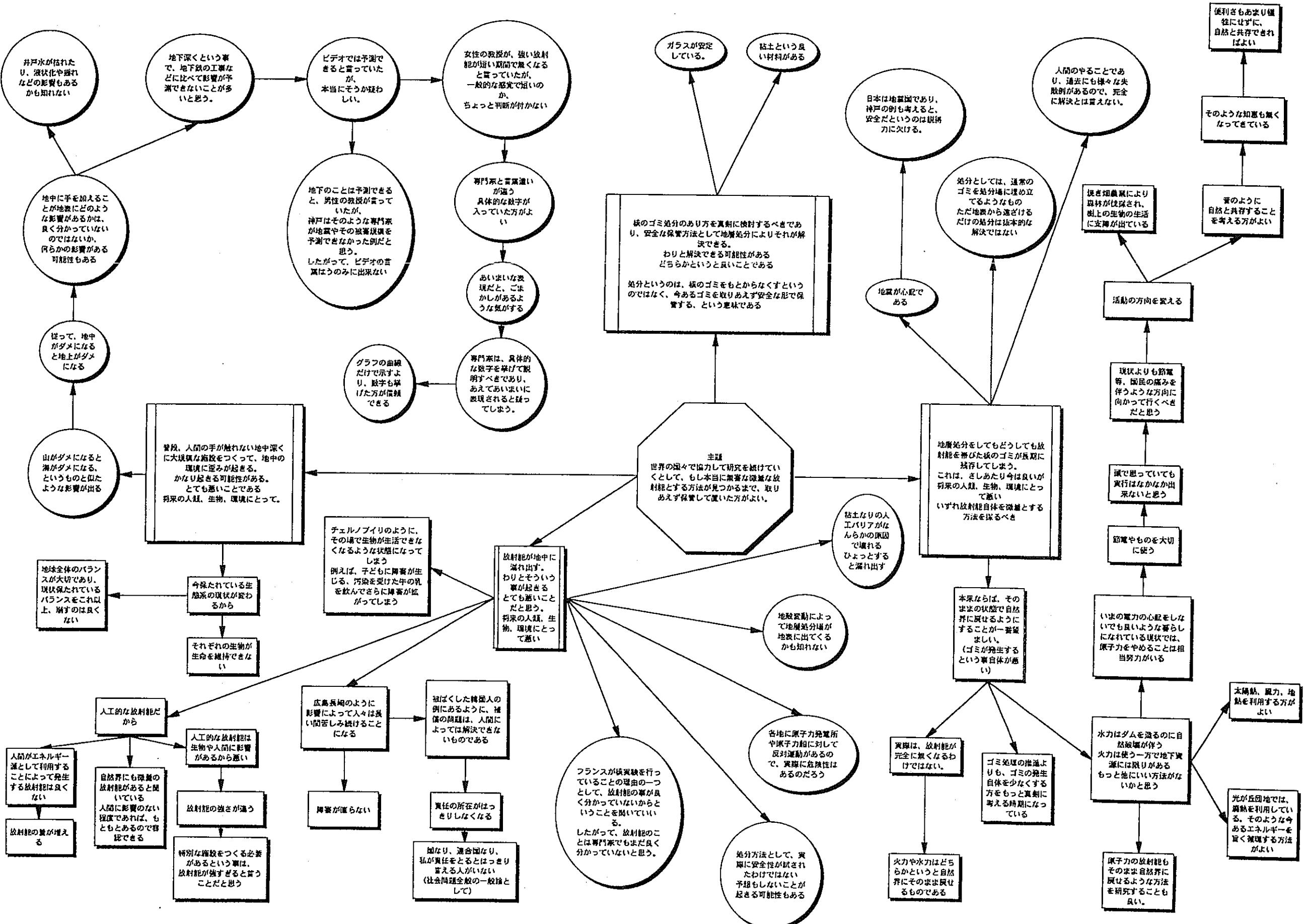


図 II.8 第1回ヒアリング結果（主婦I）

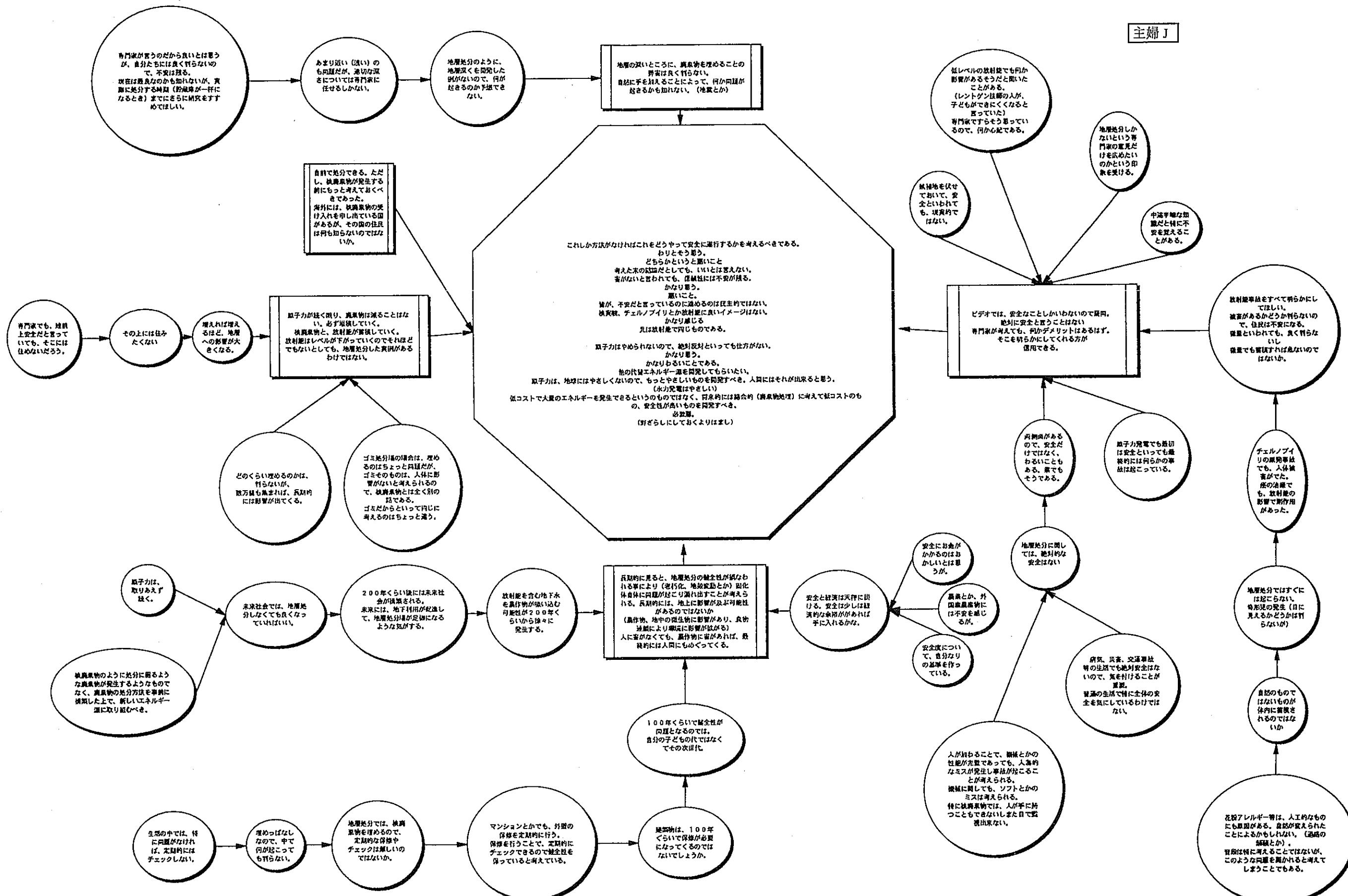


図 II.9 第1回ヒアリング結果（主婦J）

主婦 K

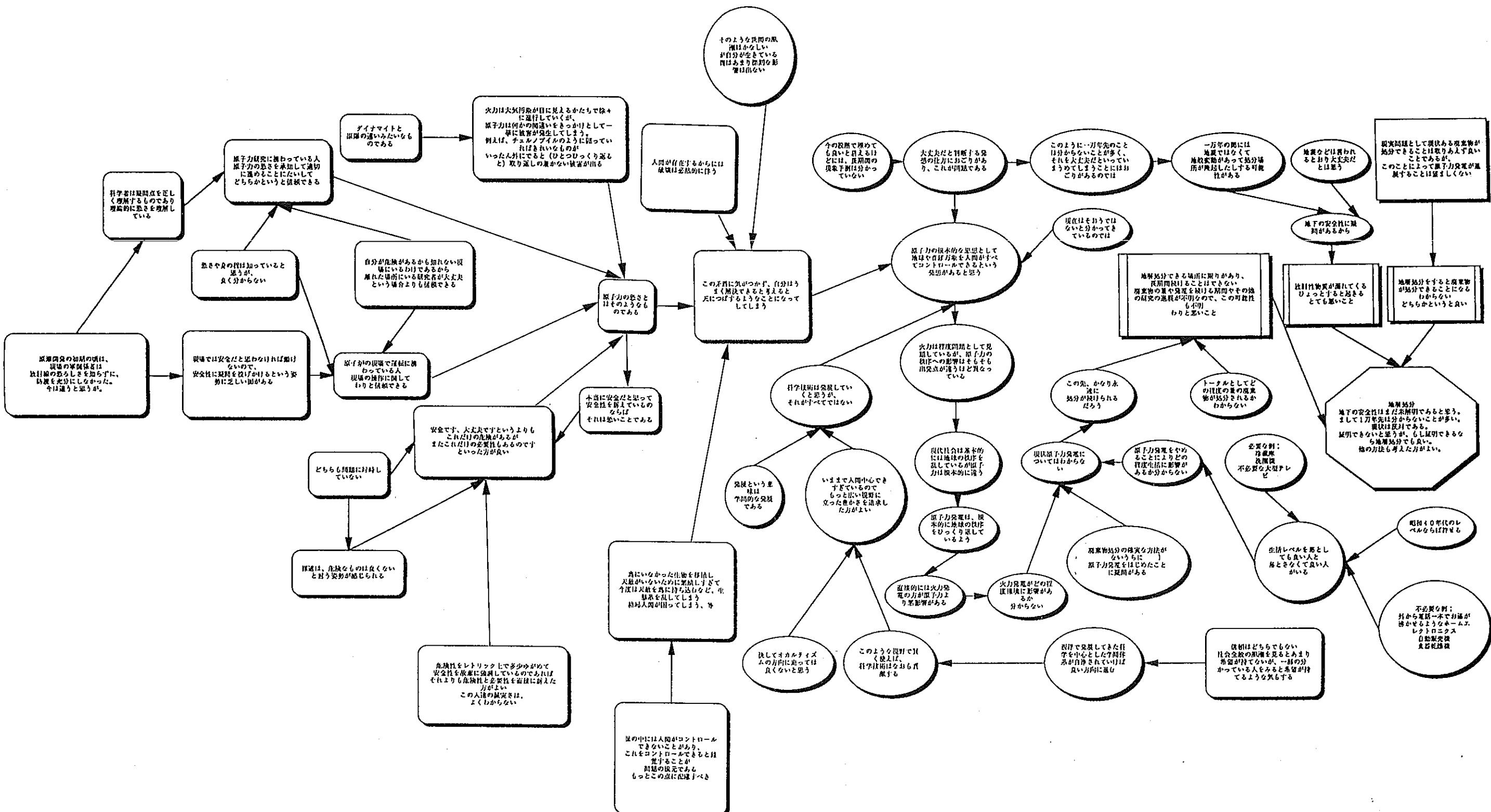


図 II.10 第1回ヒアリング結果（主婦K）